
スクール・オブ・ザ・デッド～ジ・アナザー・デッド

NAO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スクール・オブ・ザ・デッド～ジ・アナザー・デッド

【NNコード】

N3243B

【作者名】

NAO

【あらすじ】

本編「スクール・オブ・ザ・デッド」では語られなかった、もう一つの物語群。本編主人公である正臣の視点からではなく、ここでは様々な視点から本編を補完していきます。（性質上、本編を先に読むと、分かりやすいかも知れません……申し訳ありません）

第A - 1話・体育館は絶叫を内包する（前書き）

今回は、三人称です。

第A・1話・体育館は絶叫を内包する

絶叫が聞こえた。

それは真っ暗闇の前方から、津波のように押し寄せる。ジェットコースターの絶叫とは比べものにならない。いや、比べることなどできないだろう。なぜなら、ジェットコースターの絶叫は歡喜であつて、今、目前で起こつている現実は、命が危険にさらされている人間の断末魔だからだ。

そもそもその声の種類が違う。

訳も分からず、前方の生徒の制服をつかみ、床に引き倒す。引き倒された生徒が怒号をあげるも、その怒号を踏みつけて走ろうとする。踏みつけられた生徒は、踏みつけた生徒の足をつかんで転ばせ、さらに後方から来た生徒がその生徒を乗り越えていく。

そこには、上級生も下級生も、男も女も、友人も親友も、果ては恋人も関係ない。

あるのは、限りある生に執着する強欲のみ。

「……妙なことになつたわね」

亡者のように逃げまどい、正氣を狂気に塗り替えられた生徒の醜い群集心理。

最後尾付近でその光景を見た少女が、知らず舌打ちをする。

長い漆黒の髪の毛を持った、美しい少女だった。

周囲が恐怖で埋め尽くされようとする中、少女の瞳の中には好奇心が芽生え始める。両手を組みながら、肩をほぐすその姿は、あまりにも奇異な光景。これから競技に挑もうとする短距離ランナーそのものだ。

スカートから伸びるしなやかな両足が、贅肉を筋肉に昇華させた二の腕が、縄のようになめらかな鎖骨から首筋のラインが、モデル

のようにぐびれたウエストが、そして、女性のシンボルとしてこの上なく我を主張する胸の膨らみが、来る悪寒を迎え撃とうと熱を帯びる。

「……邪魔」

つまらなく告げた言葉は、少女をつかもつとした男子生徒へ。

軽い言葉とは裏腹に、振り上げられた拳は強烈だ。伸ばされた右手を、少女は難なく左手でいなす。走るスピードそのままに、すれば違う加害者の男子生徒を、ぎりぎりまで引きつけて、顔面を右の拳で打ち抜いた。

無惨。

鼻がつぶれる音にも、少女は薄笑いを浮かべるだけ。同情すべきは、殴られた男子生徒か、それとも襲われかけた少女か。

「汚い手で触らないで」

悲鳴にかき消される、男子生徒の悶絶。深紅のバラが、男子生徒の顔面で咲き乱れる。

「まったく、一体何よ。ただでさえ機嫌が悪いんだけど、私

少女は、ほんの数分前までの静寂を思い出す。

きつかけはたった一声の悲鳴。

黒板をひつかくような金切り声は、おそらく女子生徒のもの。

真つ暗闇の中で聞こえたその絶叫に、体育館で待ちぼうけていた全校生徒の耳が、いやがおうにも跳ね上がった。

ただでさえ、照明が落とされ、窓という窓が締め切られ、カーテ

ンが光を遮る密閉された空間。何百人という生徒が一同に会している体育館は、生徒たちの発する体温で、さながら蒸し風呂のようだつた。

涼しげに状況を把握しようとするこの少女でさえ、頬を伝う汗を何度もハンカチで拭うほどだった。

口に出さないまでも、何十回と心の中で毒づいた。

いつまでも始まらない集会。暗闇に閉ざされたまま、動くことすら許されない不可解な状況。

誰もがいらだちを隠せない。徐々に募る不安。

その中で交わされたのは二つ。

日々に飛び出す邪推と、疑念を帯びた視線。

切り裂いたのは、絶叫。

これが混沌を引き起しきれないでいられようか。

五感。

視覚を失った人間がまず頼りにするのは、聴覚だ。それを見透かしたかのような絶叫に、残念ながら生徒たちはなすすべがなかつた。

「密閉された空間で、火災が起こったとき、人がなぜ死ぬか」

強欲に支配された生徒たちの波に、敢然と立ち向かう少女。誰に問い合わせるでもなくつぶやきながら、跳躍する。

「それは群集心理に他ならないわ」

舞い上がった勢いそのままに、女子生徒の首元に飛び蹴りを見舞う。ぐぐもつた声は、肺を押しつぶされた衝撃によるもの。

「みんな言つのよね。なんで空いている方に逃げないんだって」

テレビの防災特集でも見たのか、得意げに語る。胸に強烈な蹴り

を受けた女子生徒は、後方の生徒を巻き込んで仰向けにのけぞった。

「頭では理解していても、いざって時には身体は動かない」

ひらりと舞い降りた少女には、酷薄な笑みが浮かぶ。

「理解は、経験とは違うわ。人はそれを勘違いする」

仰向けに倒れた女子生徒の腹を容赦なく踏みつけて、少女に殺到する狂氣の群れ。踏みつけら女子生徒は、口から汚物を吐き出し、やがて白目を剥いて気を失った。

「だから、火事場では……」

少女の声など誰の耳にも入っていない。もちろん、少女のふるつた暴力も、倒れた女子生徒に加えられた虐待も、誰の視界にも入っていない。

それを分かつた上で、少女は重心を下げて、拳に体重を乗せた。

「煙が人を殺すんじゃない。人が人を殺すのよ」

手が腹部に入り込むような掌底は、男子生徒の臓物を歪ませる。力を無駄なくたき込むその一撃の威力は、腹部を押さえてうずくまつた男子生徒を見れば明らかだ。

「……と、言つわけで、これは正当防衛」

つづくまつた男子生徒を踏み台に、より高く舞い上がる少女。暗闇に映える下着の色が、ひらめくスカートから見え隠れする。

「何よ、これ

ひとりわ高く飛んだ少女の田には、一瞬だけ体育館の全貌が見渡せた。クリスマスに点るキャンドルのように、体育館のあちこちで携帯電話のバックライトが光っている。その隙間を何か小型のものがよぎつたように見えた。

見ることができたのは、そこまで。

少女はさらなる跳躍を求めて、着地点を探さねばならなかつた。首を振つてすぐさま状況判断。田の前にいる男子生徒に狙いを定める。片足を肩に乗せて、踏ん張りをきかせる。男子生徒はすぐにバランスを崩して倒れるが、そのときにはすでに少女は宙を舞つていた。

「タす……け」

狂氣の波から抜け出すやいなや、田の前でふらついていた生徒に襲われる。

「悪く思わないで」

少女は伸びられた手をつかむことも払つこともせずに、腰を回転させた。

少女はたちまち旋風と化す。

スカートの裾はまるで社交場で踊る貴婦人のように広がり、それに遅れて、風を巻き込んだかかどが、生徒の後頭部にたたき込まれる。

生徒の視界には何も映らなかつたことだろう。

暗闇だつたと言つことも理由の一つだが、何より、少女の回転速度には一部の無駄もなかつた。鞘から解き放たれる日本刀がそうであるように、少女の美脚は最短で最大の威力をかき集めた。

体術で言つといひの、単なる回し蹴りに過ぎない一方。剣術で言つといひの、居合い抜きにまで昇華されている。

それゆえ、生徒の田には映らない。

手をつくこともできず、頭から落ちた生徒が、悲鳴の代わりに鈍い音を立てた。

「……なにかしらね」

少女は自分が興奮していることに気づく。胸に手を当て、心臓の高鳴りを聞く。

いや、手を当てる必要もなかつただろう。

それぐらい、少女の胸はまだ見ぬ恐怖に高揚している。全身に供給される血液には、きっと高濃度のアルコールが入つてゐる……そんな馬鹿げた妄想でさえ、少女はおかしく思えた。

原因不明の現状を、かくも冷静に受け止める自分自身に。ぐずおれた生徒が一度大きく痙攣するのでさえ、難なく受け止められている自分自身に。

自嘲をもよおし、口元に手を持つてこよいつとする、その手は何者かによつて遮られてしまつ。

「私に」

触るな。

語尾は暴力に変換された。

第A・1話・体育館は絶叫を内包する（後書き）

興味を持つてくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

本編につきましては、一度削除しておきながらの再掲載。謝っても、

謝っても済まされることではありません。

こちらの方は、何とか週一掲載を目標に頑張ります。

評価、感想、栄養になります。

第A・2話・ある少女の思い

「私に」

触るな。

語尾は暴力に変換された。

つかまれた手とは反対の腕を素早く折りたたむ。肘を鋭角にし、感覚で相手の顔面を探り当てる。顎は人体の急所の一つ。それを周知した上で、一撃必殺の元に沈める。それを意図した肘打ち。相手は、私の手をつかんだことを後悔するだろう。そんな傲慢な思考と一緒に、少女はひじうちをたたき込む。イメージは、すぐに現実に変わるはずだった。

「な、何を！ 危ないだろ！」
「和輝君！」

もちろん、先の声も、後の声も、少女のものではない。

「睦月……雲か？」

睦月と呼ばれた少女は、いつとつしそうに黒髪を跳ね上げ、腕を組む。

「だつたら何なの？」

尻餅をついた和輝に手を貸そうとする少女。
右足を怪我しているのか、包帯の巻かれた足が痛々しい。
松葉杖を転がしてすがり寄る少女は、自分の怪我など気にはしていないようだ。

「ありがとう、水野さん」

怪我の痛みをおして手を貸してくれた水野に、和輝は頭を垂れる。

「軟弱ね」

吐き捨てる睦月の声に、和輝の眉間にしわがたくわえられた。睦月の他人を寄せ付けようとしない姿勢。和輝が知る親友の姿とは、真逆と言つていい態度。

「いいの……和輝君には助けてもらつたから」

消えそうな笑みを浮かべて、和輝が拾い上げた松葉杖を受け取った。なんとか和輝に寄り添うことで、不安に心を折られないようしている。

それが水野の精一杯だった。

「水野さん、行こう」

和輝が松葉杖をつく水野を助けようと、腰に手を回す。

「あ、あの……あり、がと……」

水野は少しだけ恥ずかしがつたが、和輝の思いやりに下心はないと判断し、うつむき加減にお礼を伝えた。

「いいナイト精神ね。彼女も満足?」「わ、私は!」

好きな人の顔を頭に浮かべた瞬間。

どうしようもなく、大声を張り上げたくなった。

私は誰の物でもないと、高らかに宣言したかった。

私には好きな人がいる。

そう目の前の傲慢な少女に伝えたい。

勘違いしないで欲しかった。

隣で支えてくれる和輝君には悪いと思う。でも、それだけは間違つて欲しくなかつた。大好きな彼が、少しでも私のことを想つてくれれるなら。身を引いてしまう原因を作ることだけはしたくなかつた。

たとえ、私の一方的で馬鹿げた妄想でも。

「水野さん、気にしちゃダメだ」

冷静な和輝の声で水野は口をつぐむ。

「う、うん……」

和輝は水野をかばいながら、舞台袖の放送機器が詰め込まれた部屋に歩を進める。

力強い足取りと、決してくじけることのない強い意志が、水野の足の痛みを和らげていく。

水野はそんなわたわらの優しさの向こうに、和輝という人間を支える、優しすぎる親友の影を見た気がした。

「睦月さんも」

和輝は睦月とすれ違つた後、肩越しで。

「助かりたいのなら

水野の腰を抱く和輝の握力が強まる。

水野はそれを分かつていても、和輝の苦渋の表情の前では、何も言つことができなかつた。

「元から私もそのつもりなんだけど」

腕を組んだまま、暗闇に冷笑を浮かべる。

生徒たちの悲鳴、怒声、懇願、自暴自棄な声の真ん中で、それをはねつけるような強固な態度。

自信を見せつけるかのような睦月の所作に、水野は自らの足が再び痛み出すのが分かつた。

思うように歩け無いどころか、和輝の助けを借りてしまつている自分と、まるで誰の助けもいらないといった自負を持つた睦月。比べた自分自身に歯ぎしりした。

こんな自分を、大好きな彼が見たらどんな風に思つだろ？
睦月に惚れてしまうのではないか。

そんな悪い予感が水野の頭をかすめた。

「しつこい」

水野を助けて歩く和輝の後方。

睦月は裏拳で、背後から襲おうとした生徒を床に沈めていた。
背後を振り返らない一撃。

自らの肩の位置に、生徒の顔があることを知つていての攻撃だつた。

返り血がついた拳を、倒れた生徒のシャツで拭うと、不敵に笑つて二人の後に続く。

「松葉杖。早くしなさいよ

背後でつぶやかれて肩が跳ね上がる。

松葉杖は、私の名前じゃない。

そう反抗しようとした水野の耳に、奇怪な音が進入する。
トマトがつぶれるような音がしたかと思うと、木の皮を剥がすよう
うな音。

布が破れる音がしたかと思うと、ガムをかむような不快な音。
剥がす音、ちぎれる音、硬質な音、つぶれる音。

……今までになかった音。

未知のそれらが、渾然一体となつて体育館中から聞こえ始めてい
るのだ。

「な、何……？」

背後から生暖かい風に乗つてやつてくる圧迫感に、水野は背筋が
凍つっていくが分かつた。

和輝もそれが分かつていて、歩幅が水野に気をつかう速度
ではなくなっている。

額に汗を浮かべながら転がるように舞台袖に飛び込むと、和輝は
水野を手放し、閉めたドアに体重をかけた。

途中で和輝たち二人を追い抜いた睦月は、高価な放送機器を、何
のためらいもなくドアの前 和輝の前でもある に放つて緊急
封鎖した。

「これで一時しのぎにはなりそうね」

両手をたたき合わせて、ほこりを払う仕草。いかにも、一仕事終えました、とでも言いたそうに大きな息を吐く。

そんな睦月に和輝は恨めしそうな眼差しをぶつける。

「……物を投げる前に、きちんと確認して欲しいけどな」

「怪我しなかつたんだからよかつたでしょ。感謝しなさいよ、私に」

小声で、するかよ、とこぼすが、睦月には聞こえるはずもなく。水野はそんな和輝の悪態に目を丸めている。

普段から優しく人柄の良い和輝の中に、鋭いナイフのような物が隠されていることを知ったからだ。

その瞳は、穏和などとはほど遠く、必要ならば血で血を洗うことも辞さない、という危険なものだつた。

予期せぬ和輝の姿に、思わず手に持った松葉杖を取り落としてしまつ。

「水野さん？　どうしたの？　痛む？」

テレビのチャンネルのようじて、あつさりと和輝の表情が切り替わつた。

取り落としてしまつた松葉杖を素早く拾い上げ、きちんと取っ手側を向けて渡す。

誰しも好感触を得るであるうつ笑顔付き。

「う、ううん、大丈夫です。もう、治りかけなんです」

「でも、無理しちゃダメだよ。甘えるところは、きっと甘えていかないとね」

水野の作った笑顔よりも、数段上手な笑顔。

「一つの作り笑いが交錯した。

無理をして明るい笑顔をつくろうとした水野に対し、和輝はすでに用意してあつたシールを貼り付けた感覚だ。

「和輝君は……」

自分の心の中に、特定の人しか入り込めない聖域を持つているんだね。

「優しいね」

言葉と心は裏腹だつた。

私の大好きなあの人と、その人にいつも寄り添う女の子。その二人にだけ踏み込むことの許された、絶対的な領域。

心の内側と外側。

一人以外には、ただの優しい和輝君。

二人には、本当に優しい和輝君。

和輝君の境界線の内側に二人はいて、私は外側。

向けられる優しさも、笑顔も、全く違う。

笑顔の区別はほとんどできないけれど、私は唐突に理解した。

「優しいなんて。ほら、俺って人が良いから」

おどけた調子で笑う。

この和輝君も、きっとよそ行きの和輝君。どうでもいい他人に向けられる笑顔。

そう、きっと世界と二人を秤にかけても、きっと和輝君は一人を選ぶ。

断言できる。

だからこそ、胸が痛い。

……私にはそんな友人はいないから。
私はただの都合の良い友人でしかない。
テストや、学校生活でだけ必要とされるお利口さん。優等生。
誰にも嫌われてはいない。でも、夜にたわいもない話を電話越し
に聞かせてくれる友人はいない。
もし、私がお利口さんじゃなかつたら。優等生じゃなかつたら。
きつと私には何も残らない。

「うらやましい。

私も誰かの特別になりたい。
違う。

誰かのではなく、大好きなあの人の。たつた一人だけの特別にな
りたい。

すぐにでも、今すぐにでも、必要として欲しい……されたい。

「……まさ……」

胸の鼓動が止まらない。
目の前にある命の危険に対する動悸ではない。
精神的な危険。
必要とされていない……満足に走れない足手まとい……。
それらを掛け合わせた、涙も枯れるような焦り。
水野春美という存在の希薄さ。

「水野さん？」
「……おみ」

助けて欲しかつた。

呪文のように唱えれば、助けてくれるような気がした。
必要として欲しかつた。私が私でいいと、つなぎ止めて欲しかつた。

彼ならそれができる。

……ねえ、助けて。

「水野さん！」

和輝の声に、水野はようやく脳内の迷宮から抜け出した。
危うく抜け出せなくなりそうだった迷路から、強制的に連れ戻される。

「え、あ……和輝君？」

「よかつた……いきなり黙り」くつちやつたから

胸をなで下ろして、水野ではなくドアに視線をくれる。

和輝は、その向こうに蠢く得体の知れない物を見つめていた。
夜目が利く和輝以外には、まだ認知されていない異形の生物。人では到底破壊できないこの封鎖されたドアにも、不安が残る。

「ねえ、いつまで隠れているつもりなの？ かくれんぼする気はなんだけど

和輝は睦月の声の先に身構える。

声の先は、地下室へと続く階段だった。

第A・2話・ある少女の思い（後書き）

興味を持つてくださつた方、読んでくださつた方、ありがとうございます。いきなりですが、文字数が少なくて申し訳ありません。更新優先……と前向きにとらえていただけないと嬉しいです。評価、感想、栄養になります。

第A・3話・日和見主義者

「その無粋な声は……睦月だな？」
「む、睦月つて、あの睦月ですか？」

暗闇に閉ざされ、視界ゼロとなつてゐる暗闇から、一人の人間がゆつくりと現れた。剣の切つ先のように鋭い視線が、階段の上でふんぞり返る睦月を切り上げる。

長身瘦躯にまとつた制服には、一筋のしわも見当たらぬ。どれだけあらを探しても、校則に抵触することはないと思える、完璧な御姿。

その姿は、百戦錬磨の弁護士を思わせる。

「他にどの睦月がいる」

一人目の男は、毅然とした態度で全校をまとめる生徒会長、後藤俊史だつた。

一方、後ろからそろそろと出てきた人間の視線は、一点に定まつていない。危険がないか探し続けるあまり、疑心暗鬼に陥つてゐる。一見すれば、不審者だ。

もみ上げまでしっかりと刈り上げられた短髪は清潔な印象を受けるが、同年代の若者から見れば流行遅れを感じさせた。制服はほこりまみれで、所々が白く変色している。

状況が状況でなければ、いじめられた生徒に間違えられてもおかしくない。生徒会長に比べ背も格段に小さく、少しほつちやりした体形も、そういう印象を助ける要因のひとつだつた。

「で、でも……い、いえ、あの、すみません」

一人目の男は、放送部の機械マニア、佐藤達也だった。ゆつくりと地下室から上がってくる一人を見下ろして、睦月は鼻を鳴らす。

「ふん、睦月、睦月つて、そんなに私が珍しい？」

眼鏡のブリッジを持ち上げる生徒会長の目が、さりげなく細められた。

「珍しくはないこと。テレビでも拝見させてもらっているからな。まったく、たいした演技力だと感心している。どうやつたら、あれほどうまく猫をかぶれるのか……ひとつ」教授願いたいほどだよ

口の端を持ち上げたまま笑つてみせる。のびの奥が、声に出るこじのない笑いで「うめく。

「猫をかぶっているのはお互い様だと思ひわよ。でも、アンタの場合虎の威を借る狐つてところかしら」

鋭い、剣のような視線でつばさり合ひ睦月と生徒会長。生徒会長の背後で控える佐藤の視線は、おどおどと一人を行ったり来たり。

「どうせ地下室にいたのだけ、誰よりも先に逃げ込んだからじゃないの？」

睦月の声の先を追つて、佐藤の視線も動く。

「その後ろに連れている田障りなハエは、一応放送部だから、放送部の倉庫である地下室にも入れるわけだし

「僕は、い、一応じやな

「

「羽音が耳障りね」

睦月の容赦ない言葉の雷が、佐藤を生徒会長の後ろに隠れさせる。

「……な、なんなんだ……自分を、自分を……何様だと思っているんだ。僕はれつきとした放送部員だぞ……」

弾除けとして使った生徒会長の背中で、ぶつぶつと文句をたれる佐藤。

「そここの弱虫。聞こえないわよ。言いたいことがあるなら、聞こえるよひじせつあつと言えば?」

「う……」

睦月の地獄耳は、佐藤のつぶやきを逃さない。
睦月の剣幕に圧倒されて、佐藤は言葉を失う。
跳ね上がった肩は、いたずらが露見した子供のようだ。

「ぼ、僕は……」

「聞こえない」

腕を組む睦月。

「ぼ、僕は!」

「全然聞こえないわね」

半笑いで、佐藤を見下す。

「僕はれつきとした放送部員だ!」

裏返つた声で、腹から振り絞る。

息の荒い佐藤は、今にも呼吸困難に陥りそうだった。

「ところで、いつまでここにいるわけ？」

佐藤の叫びには取り合おうとせずに、睦月は和輝を振り返る。佐藤は目を丸めて痴態をさらした後、睦月のあまりの傍若無人さに、地下室にあつたバケツを蹴り飛ばす。

きれいに芯でとらえられなかつたバケツは、佐藤の意思には従わず、階段に当たつて跳ね上がる。

跳ねたバケツは、生徒会長のズボンの裾をかすめて転がつた。地下室を静寂が覆う。

「……す、すみません」

冷酷な視線が、階下ですくむ佐藤を射抜いた。

眼鏡の奥で凍てついていく瞳は、佐藤の謝罪を受け入れようとはしない。

軽蔑ではない。嫌悪でもない。それは、明らかな拒絶。人を見る目ではない、汚物を見る目。

「……気がつかなかつたが、いつの間に制服が汚れているな」

佐藤を田で射殺した生徒会長が、何気ない風を装つて、自らのズボンの裾に視線を落とす。

バケツがかすつただけで、ズボンが汚れるわけがない。

それでも生徒会長は、さも大きな汚れを見つけたかのように、わざとらしくつぶやいて見せた。

佐藤は生徒会長に走り寄ると、震える唇をかみ締めた。

あわてて生徒会長の足元にすがりつき、バケツがかすつた箇所を

丹念に払い始める。

ポケットからハンカチを取り出し、それを叩き代わりにして、ありもしない汚れを取り除いていく。

見るからに手馴れた作業。

「……まるで下僕ね」

「佐藤君……どうして」

水野が自分の手でふさこだ口から、憐憫を漏らす。命乞いをする奴隸。和輝は脳内でそう例えた。

「フン」

生徒会長はしばらぐの間、佐藤に裾を掃除せると、興味がなくなったように睦月の横を通り過ぎる。

佐藤は震える手でハンカチを握り締め、睦月をこりみつけた。

睦月はそんな佐藤の怒りなど知る由もない。

その怒りがお門違いであることも、佐藤は気がついていなかつた。生徒会長の怒りを買つてしまつた原因是、すべて睦月にある。佐藤は、自分と生徒会長を棚に上げて、物事を判断していた。

「僕を……馬鹿にした報いは……」

恨み言を地下室に溜め込む。

もちろん、そんな佐藤にはまったく気がつかず、睦月はただひとつの出口である施錠されたスライドドアを動かそうとする。

「このドアを開けるわ。見ていいで、手伝いなさいよ。ここの大ア。彼女に手を貸すことはできても、私には手を貸さないって言うわけ? ただでさえ、役にたたないのが多いんだから、アンタぐ

らこしつかりしなさいよ

和輝は眉間にしわを寄せたまま、睦月を手伝い始める。

二人はへこんでいる取つ手部に手を差し込んで、横に動かそうと踏ん張つた。

一センチにも及ばない隙間から外光が差し込み、和輝の顔を真つ二つに切り裂く。

しかし、外側にかけられている錠は思いのほか堅固で、一人の力をもってしても外れる気配はない。

「手を抜いてるんじゃないわよ！」

「やつてる！」

「罵り合つ暇があつたら、さつさと開けて欲しいものだがね」

めがねを持ち上げながら、いらだたしげに腕を組む。大きなため息は、その場にいた全員の耳に届いた。

「口しか動かさない軟弱者にしては、少し言つことが大きすぎるわね」

動きを止めた睦月の背中。煮えたぎる怒りが、水蒸氣のように舞い上がる。

「ふむ、確かに。それは確かだぞ、睦月」

生徒会長の白い歯が見えた。

「……だが、動きを止めて、口だけを動かすようなならば、その人間も結局は同じではないか？ 有言実行という言葉を学んだほうがいいな。睦月、お前は『開ける』と言つたんだ。公約通り開けてもら

わないとな。……それとも、お前はあきらめるのか？ 開ける」と
ができないと自分の非力を認め、放棄するのか？ ……まあ、そ
れもいいだろ？「

肩をすくめて見せる。

めがねの締め付けがゆるいのか、身振り手振りを交えるたびに、
めがねが下にずれる。

その作業を生徒会長は面倒だと思つていないので、毎度毎度めが
ねを中指で持ち上げ、会話に妙な間を作つた。

その独特のリズムは、まるでクライマックス直前でCMを入れる
バラエティー番組のように計画的で、狡猾だった。

核心を遅らせ、沈黙を作る。

じらす、という一番興味を引く手法。

『……』それが、めがねを持ち上げる合図。

「そして、残念ながら私はお前が言つようつに軟弱者だ。本当に残念
だよ。私に、もう少しの力、あとほんの少しの力があつたら……手
伝つことができたのだが」

大げさすぎる演技。

素人演技というよりは、コメディー演技だった。

明らかに皮肉と分かるように、残念そうな面を作る。

最初から、手伝つ気などありはしない。

「……さて、そこでだ。選択は二つほどある。あきらめるか、それ
とも、軟弱者であつても手を借りるかだ

生徒会長による、明らかな答えの誘導。

「そうそう……暴力に訴えて黙らせるというのも選択の一つだな。確かにそれで私のような軟弱者の、余計なおせつかいはなくなる。効果的かもしれないな。……だが、それではドアは開かないぞ。問題の解決には至っていない。そもそも……時間は限られているんだ。合理的かつ生産的な思考を期待するよ」

握り締められていた睦月のこぶしに田を落として、先手を打つ。
誰かの指図は受けない。

そういう性格であることを、生徒会長は熟知している。

「アリス、お前がアーヴィングの手から手を離して、生徒会長に向こう。」

「今すぐ殺してやる。一度と立ち上がりがれないから!」

殺したら、言つまでもなく一度と立ち上がる」とはできない。そんな矛盾を通り越した睦月の直情的な感情の放出が、その一言に凝縮されていた。

「……ば、馬鹿な。冷静になれ。そんなことをしても」

選択するはずのない選択肢だったのだろうか。生徒会長の仮面が、めがね同様にずれ落ちた。

睦月の手が生徒会長の胸倉をつかもうと伸びる。

生徒会長は、なすすべなく睦月に殴られ、顔を腫らすだろう。

へ少しづつ移動し始めていた。

強いほうの味方

プライドの高い睦月や、生徒会長に比べるまでもない、じんにち

くのような意思。

風になびく力ない雑草。少しでも強い風が吹けば、茎は簡単に折れるだろ？。

和輝はそんな佐藤にいらだちを覚えるとともに、生徒会長に行われる制裁は自業自得だと思つた。

止める筋合いもない。

和輝はもう一人の傍観者、水野の動向をうかがう。

「水

口に出そうとした水野の名前よりも、先に視界に入つたのは、耳に入ったのは。

水野が、真っ青になつて全身をこわばらせる姿だった。

水野が、震えた手から松葉杖を落とす音だった。

「水野さん？」

和輝の声に驚いて落としたのではなかつた。

少しきめの声で問いかけた先で、水野は先ほど放送機器でふさいだドアを見ていた。

無言で、ゆっくりと和輝を振り返る。

「誰かいるの？ ねえ、誰かいるんでしょ？」

ドアの向こうで聞こえた声は、悲痛に歪んでいた。

第A・3話・日和見主義者（後書き）

興味を持つてくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

一週間家を空けたら、ほこりだらけになつていきました。頑張つて掃除します。小説は何か書きためたので、しばらくは連続更新できると思います。

評価、感想、栄養になります。

第A・4話・加藤優理子は、今日も元気です！（前書き）

加藤優理子（加藤さん）の一人称視点です。

これからも、時々別視点での短編を唐突に挿入していきます。読み
にくいのは承知ですが、ご了承ください。

第A・4話・加藤優理子は、今日も元気です！

朝が弱い私にとって、学校への坂道は難所である。頭も回っていない状態なのに、肉体を酷使しなければいけないのだから当然だ。

この坂はまさに地獄。

私なりに名付けるなら、地獄坂。

「我ながら、ひどいネーミングセンス……」

空回りする頭と体質を呪う。

下を向いて、地獄坂にため息をいぼすのが、毎日の日課。

と、私は下を向いていたせいか、誰かの背中に頭をぶつけてしまつたようだった。

「あ……すいません。よそ見をしていて」

私は相手が誰であるか確認もせずに、深く頭をたれる。

「あ、気にしないで。痛くも痒くもないから」

それ見かねてか、優しく声をかけてくれる。声から判断するに、男子だ。

……しかも、この声には聞き覚えがある。

「あれ、和輝」

「おはよー、加藤」

顔を上げた私に軽く手を上げて挨拶する。

切れ長の田と、すつきりとした顔の輪郭が、笑みに揺れた。

「珍しく今日は早いね。いつも遅刻してくれるの」

「ま、たまにはいつも田もあるってことかな。今日はなぜだか起きできたから、みんなを驚かせてやろうと思つてね」

私は青空を仰ぎ、横切つていく大きな雲に田を馳せる。

「悪いが、檜は降つてこないぞ」

和輝が口を尖らせる。

わざとらしく空を見つめてみたのだが、どうやら皮肉が上手く伝わってくれたようだ。

「正臣なんか特に驚くんじやない？」

正臣の話題になつたとたん、和輝の顔が一段と華やいだ。

「わうなんだよ。俺もそれが楽しみださ」

彼と正臣はとても仲がいい。

何をやるにもいつも一緒に、なおかつ阿吽の呼吸。羨ましげらしいの友情がそこにはある。

彼ら二人の笑いが教室に響かない田はない、つてぐらいた。

「あんたたち、こつもつむをいんだよね。何がそんなに面白いのよ

私がそう言つと和輝は腕を組んで考え込む。

「布団が吹っ飛んだ」

和輝、『j乱心。

私は戦国武将さながらに、大声を上げようかと思つた。

「面白くないだろ？」

「……良かつた。正常だつたのね」

和輝の肩に手を置いて、知らず安堵の息を漏らした。

「当たり前だろ。でもさ、普通面白くないネタでも、正臣が『いつとす』ぐ面白く聞こえるんだ。アルミ缶の上にある蜜柑、東京特許許可局、いい國つくるう鎌倉幕府……なんでもないことが面白くなるんだ。色がついたみたいに」

「なんで？」

右にかしげた首を、今度は左にかしげて考える和輝。

「さあ、なんでだろうな。俺も面白くなる理由は良く分かんないけど、ただ、正臣といふと世の中を好きになれる気がするんだ。上手くいえないけど、あつたかくなれるつていうかさ。ほら、あいつ誰にでも優しくしようとするとくせに、人一倍優しくされたい奴だから。放つておけないんだよ。……あー、でもなんか違うかな、この……もつとしつくり来る言葉があるはずなんだけどな」

「なにそれ。正臣が女に思えてくるよつた大胆発言。ひょっとして

……

私が和輝の横腹をひじでつつくと、和輝は面白くよつて狼狽する。

「お、おーーー俺はそういうつもりで言つたんじゃないぞ。これは

「親友としての……」

「えー、『町内の皆様！ 永沢和輝は、同性愛者でござりますー。』

私はマイクで演説するように周囲にいる生徒に触れ回る。通学路を歩いている生徒たちが、そんな私たちを振り返っては、くすくすと笑っている。

「加藤！ お前！」

和輝は真っ赤になつて腕を振り上げる。

「暴力？ へえ、和輝は女の子に暴力を振るうんだ？」

「悪いけどな、俺はお前を女だと思ったことは一度もない」

鼻息荒く、腕を腰に当てて宣言する。
なぜだか、その言葉に私の胸が痛んだ。

「あれ……」

私は痛んだ胸を押さえて、また痛みが来るのではないかと待つていた。

しかし、苦痛は和輝が言葉を発した瞬間だけで、それ以降はまったく苦痛は訪れない。

瞬間的な、あの痛みは何だろうか。

「どうした？ 具合でも悪いのか？」

「眠いだけで、そんなことはないはずだけど……なんでだろ？」

私は首を傾げる。

昨日、放課後の部活動練習で素振りをやりすぎたからかな。最近の

ソフトボール部は成績が悪いから、練習量を増やしたのが原因に違いない。加えて、週末には試合もあるし、怪我が発覚するのは非常に困る。

ピッチャー、それも一本柱の内の一本来ある私が、怪我をするわけにはいかないのだ。

「あー、あつたぞ、正臣を表すのに一番適当な言葉が…」

和輝の顔は子供のように無邪氣だ。

親友のことじで、こんなに一生懸命になれる人間を、私は見たことがない。

「愛、だ」

太陽は反対側で輝いているのに、田の前にももうひとつ太陽がある。

本当に朝から眩しい。

「えー、『町内の皆様！ 永沢和輝は、完全な同性愛者でございます！』

私の声は気持ちのいいほど朗らかだ。苦手な朝なのに、なぜか今は清々しい。

「いや、待て！ 前言撤回する！ それに全国の同性愛者に謝れ！」

さつきとは打って変わって気持ちがいい。地獄坂も気にならない。

「男に二言はないでしょ、普通」

和輝が参ったな、と言いたそうに頭を搔いている。
朝がこんなに楽しいと思えたことはない。
毎日がこんな朝ならいいのに。

「……和輝のおかげかな」

地獄坂だけに、地獄に仏、もとい、地獄坂に和輝。

「なにが？」

疑問符を頭に浮かべる和輝。

目の前に迫った校門を背に、私は和輝と向かい合つ。

「和輝、明日もこのくらいの時間に登校しなよ

和輝といふと朝が楽しいから。足取りが軽いから。
だから、明日も一緒にいられたら。

それはきっと素敵なことかもしれない。

「……ん~、俺は遠慮するよ。正臣がいれば別だけどな

また、胸が痛んだ。さつきよりも痛みが大きい。

「それに、香奈もいないしな」

さりに大きな痛みが私を襲う。今度は連續だ。

「加藤、本当に大丈夫なのか？ サツキよりも苦しそうだぞ」
「あはは、何でかな。今日は朝から調子がいいのに……」

鋭い針に串刺しにされるような痛みだ。

部活でいくら練習しても、こんな痛みに見舞われたことはないのに。

和輝が言葉を発すると、決まって胸が痛くなる。
でも、普段の会話では、そんなことがなかつたはず。
もしかしたら、特定の言葉に反応しているのかも。
仮にそうだとしても、私にはなぜ反応するのかが分からない。

靴を履き替えて、教室へと向かう。

「おはよ～」

松葉杖をついた夏美に並んでから挨拶する。

「加藤さん、おはよ～」

さすがに夏美は朝が早い。
でも、本来はもっと早く教室について、自習でもしているはずなのだ。

それが出来ないのは、右足の怪我のせい。

「おはよ～、水野さん」

「か、和輝君？　どうしたの今日は？」

和輝が、驚いた夏美に早起きの説明をしている。
私はそれを一步離れた位置で見つめながら、考えを巡らせる。
和輝といふと楽しくなれた朝の登校。

ある特定の言葉にだけ痛みを発する私の胸。

考えれば考えるほど、Hスパーな方向に想像が飛んでいつてしま

う。

体育会系の頭はこんなものか。
私は大きなため息をつく。

「ま、今日出さなければいけない答えではないし、明日また考えればいいか」

私は楽観的だ。

今日出来ることを躊躇いなく明日に回す。
テスト勉強だって、短期集中型だ。前日の夜に徹夜すればいい。
これで赤点は回避できる。

「加藤さん、さつき聞いたんだけど、今日これから集会なんだって
え、それって授業つぶれるの？」

私の嬉々とした表情に、夏美は困っている。

「授業がつぶれるのを喜んじゃ駄目だよ。次の授業で遅れを取り戻すの大変なんだから。先生も生徒も……」

「ま、それが加藤らしいよな」

笑つて私の肩を叩いた。和輝に触れられたところから、温かいものが私に入り込んでくる。
まるで、最高級の毛布に頬擦りするような、眠くなるような感覚。すこく心地いい。

「正臣早く来ないかなー、驚かせてやりたいよ」

「そうだね、私も楽しみ。正臣君の驚く顔……本当に楽しみだな」

一人が楽しそうに話している後ろで、私はやっぱり考え込んでしまふ。

明日に回していくことなのか。早く答えを出さなければいけない問題なのではないか。

私をせかす、もう一人の私。

私は頬を両手で勢いよく挟みこんで邪念を払う。パン、という子氣味のよい音が一人を振り向かせた。

「よし！ 加藤優理子は、今日も元気です！」

夏美はそんな私を見て笑っている。

「おかしな奴だな」

和輝もつられて笑い出す。

今日一番の和輝の笑顔。目が離せなくなる笑顔。ずっと見ていたいと思わせる笑顔。独り占めしたいと思わせる笑顔。私を温かくしてくれる笑顔……。

集会が始まってから、最後まで、その和輝の笑顔が、私の脳裏から離れることはなかった。

第A・4話・加藤優理子は、今日も元気です！（後書き）

興味を持つてくださつた方、読んでくださつた方、ありがとうございます。
います。次回は、また三人称に戻ります。読みにくくてすみません。
評価、感想、栄養になります。

第A・5話・最初の扉越し

「加藤……なのか？」

水野の友人であり、ソフトボール部員の加藤優理子。声に出した和輝は直後、しまった、という顔をした。

「今、その声は……和輝？ 和輝よね？ 和輝！」

地獄に仮とばかりに、うれしそうな声がドアの向こうで弾む。

「お願い、ここを開けて！ みんな変なの、何かに取り付かれたようだ生徒同士で……それに、見たこともないようなものが沢山いて、襲ってきて、私、怖くて！」

「かと」

和輝は水野の口をふさぐ。喜びの声を中断された水野は、和輝を不思議そうに見上げる。

「今はまだ気づかれてない。今のうちなら、開けても大丈夫だから」「

扉の向こうで加藤が声のトーンを下げる。

体育館に広がる暗闇の中、加藤は和輝たち同様、何者から必死に逃げてきたのだろう。

潜めた息の中には、抑えきれない息切れがあった。

「和輝？ 和輝なんだよね？」

返事が聞こえないと不安に思ったのか、加藤が扉を控えめに

ノックする。

「ああ、和輝だ。聞こえてる」

水野の口を押さえたまま、和輝が厳しい顔をした。刻まれたしわに深い影が落ちる。

「良かった……早く、開けて？ 私ずっと逃げて、みんな狂ったようになつて、もみくちゃにされて……もう逃げられないってあきらめてた……でも、和輝が生きていてくれてよかつた。嬉しいよ……」

扉にしなだれかかる加藤。

そこには、明朗快活で男勝りなソフトボール部員の姿はない。

正体不明の恐怖におびえ、すがるものを見つけた弱者の姿がある。

「和輝く

「水野さん、黙つて」

口をふさごうとする和輝の手を引き剥がす。慌てて真意を探ろうとするが、言葉尻を上書きされてしまつ。

和輝の声には、有無を言わせない真剣味があつた。

「和輝？ 他に、他に誰かいるの？ 生きてるの？」

「いや、誰もいない。中には俺だけだ」

どうして和輝は、自分以外の生存者の存在を隠そうとするのか。水野には理解できなかつた。

「そ、なんだ……。でも良かった。和輝だけでも生きていくれて。私、気がついたことがあつて、どうしても和輝に言いたいこ

とがあつて、和輝に生きていてほしいって思つて

扉を通して痛いほど伝わつてくる綺麗な心。

水野は加藤の気持ちが痛いほど分かっていた。

伝えたい気持ちがある。どうしても、知つてほしい気持ちがある。あの人に、私が大好きな人に。生きていてほしい。一縷の望みだとしても。

だから、私も生きていきたい。

再会して、伝えるまで。思いを伝えるまで、生きていたい。

「ね、だから、ね？ 和輝、お願ひだからこゝを早く開けて？」

加藤の言葉が胸を打つ。水野は視線で和輝に訴えかけた。

加藤さんを助けて。

けれども、和輝は目を合わせることすらせず、扉をじっと見つめたまま。

「あ、あ……氣付かれた……！ 早く！ 和輝！ 開けて！」

切迫した声に変わる。

「いっちに来る……！ 生徒だけじゃない、何……？ 何よ、あれ嫌、来ないでよ……来るな！」

扉に背を預けた加藤が、生徒、そして、未知のものに対しても声を荒げる。

「和輝！ 開けてよ！ 早く！」

背後に迫る集団が耳を貸さない」とが分かると、扉に向き直る。

「和輝！」

扉が叩かれた衝撃で、積まれたアンプが転がり落ちる。一番上に積んであつた不安定なそれは、部品を撒き散らして転がり、睦月の足元で停止した。

睦月は和輝の背中を見つめて 監視して いる。

口を引き結び、隣に立つ生徒会長に視線をくれる。視線を受けた生徒会長は、めがねのブリッジを持ち上げて、ゆつくりとうなづいていた。

それは、確認だった。

「加藤……俺は」

感情を押し殺した声。

「いや……嫌よ……こっち来ないで！」

そんな声が危機迫る加藤に届くはずもなく。

「ねえ、和輝！ 助けて！ 早く開けてよ！ 私、まだ死にたくないの！」

叫び。

友人である水野の胸に突き刺さる。

「まだ、やりたいことがあるの！ 私ね、週末、試合があるの！ 楽しみにしてたの！ あと、あと！ 買い物だつてしまいし！ そ

れにそれにそれに……お父さんと昨日けんかしたままで、まだ謝つてない！お母さんにも、会いたいの！ 夏美に借りたノートも返してない！だからー！」

取捨選択すらできない、生の懇願。

思い立つた順に叫びとして変換される。

水野の心身が震えた。

心が音を立てきしみ、痛みに壊れてしまいそうになる。体から汗が噴出し、扉に向かつて手を伸ばす。

放送機器をビukeて、加藤さんを助けたい。

水野は和輝の束縛から逃れようと抵抗する。

「まだ生きていきたいの！ 死ぬのは嫌！ 死にたくない！」

水野の手が、山積された放送機器に伸びる。

「助けて……助けてよ！ 和輝……和輝！」

裏返る声。

「私は！ 私は！」

こぶしを叩きつける加藤。されど、バリケードと化した扉は開かない。

「気がついたの！」

叫びに涙が混じりだした。

「私、自分の気持ちに気がついたの！」

もがく水野を、和輝は必死に押さえつけようとする。

「朝、話したよね！　ね？　明日一緒に登校しようって、胸が痛くてつて、なんでだろって！　私！　考えて！」

もがく水野を、背後から忍び寄った睦月と生徒会長が押さえつけた。背後から睦月に羽交い絞めにされ、手と口を生徒会長に押さえつけられる。

「怖くって、生きたくて、死にたくない。そうしたら、和輝がいるの！　私の頭の中が和輝でいっぱいになつたの！」

水野の目から、大粒の涙がとめどなく溢れ出した。
目の前の闇に陽炎が立ちのぼり、風景をぼやけさせていく。

「触らないで！　やめて！」

扉の向こうで、加藤が引き倒される音。
醜悪な音が加藤を取り囲む。

「私、私　和輝が好き！　気がついたの！」

魂を搖さぶる加藤の声。

呼応し、水野は叫ぶ。涙を爆発させるよう。

松葉杖はどうに放り出していた。

怪我した足さえも駆使して、扉を開けようとする。けれど、その足でさえ、加勢した佐藤によって拘束されてしまう。

水野の叫喚は、生徒会長の手の中で消失し。
水野の抵抗は、睦月の力の前に押さえ込まれ。
水野の歩行は、佐藤によつてがんじがらめに。
唯一自由を許された涙腺だけが、滝のような涙を流し続ける。
生徒会長の手を涙でぐしゃぐしゃにしながら、水野は心中でわめいた。

加藤さんを助けたい、と。

「初めて誰かを好きになったのー。」

「……加藤、ありがとう」

積まれた電子機器に手を添える。

睦月はあわてて和輝の名前を呼ぼうとする。
……が、声に出る直前、振り返った和輝によつて制された。
声による確認ではなかつた。

生徒会長のときと同じよう、アイコンタクトだけで意思は統一される。

再び扉一枚向こうの加藤に向き直る和輝。

水野はそこに、わずかな希望を見出す。

「……でも、俺は加藤のことをなんとも思つてない」

水野は『ジヤヴを感じた。

「……え、え？」

扉越しの『惑い』は、疑心へ。

「加藤、お前は　俺にとつて領域外の人間なんだ」

「か、ずき？」

やがて疑心は、絶望へ。

「嫌……嫌よ、嫌！ 助けて……お願い、助けて！」

水野は動きを止めていた。

「見捨てないで！ お願い！ 何でもするから！」

すがりつくように、がりがりとつめで扉を引っかく。
死に物狂い。

加藤のつめが扉に食い込み、無残にベリベリと剥がれた。つめが
無くなつた指先は血で染まり、扉は真つ赤な画板になる。

「好きなの！ 和輝！」

友人が悪魔に陵辱される。

友人が好きな人に見殺しにされる。

友人が殺される。

友人が死んでしまう。

「離して！ 觸らないで！ 嫌、なにこれ……化け物……来ないで
！ 近寄らないで！」

布が引き裂かれる音。扉を乱暴に叩く音。

「死にたくない！ 何で？ 私、死にたくないよ！」

和輝は積み上げられた機械の前。動き出す気配はない。

「痛い！ やめてえええつ！ 痛いい！ まだ何もしてない！ 私、
何も悪いことしてない！」

引きずられる音。加藤の肉体を痛めつける鈍い音。

「かづきいいいつ！ 助けてよおおおおつ！」

耳孔をふさいでしまいたい。熱暴走する心臓を止めてしまいたい。
のどを裂傷させる絶叫が響く。

耳に入れば、それは殴られたような激痛へ変化する。

「取つて！ 和輝！ 助けて！ はがしてよおおつ！」

どんなに加藤が叫んでも、和輝は微動だにしない。

「いや……あが……かず、きいつ！」

水野は思い出す。

「私の……ざ、ぐ……腸……ださ、……な……で」

宿題を忘れたことを恥びれず、ノートを見せてと、子供のよくな
顔で舌を出した友人の姿を。

「たすけ……和輝……」

今朝、階段で私を助けてくれた友人の姿を。

「かづきいいいつ……たすけ……て」

うがいをするような脆弱な声。

風前の灯は、言葉通り、水野の意識が途切れる瞬間。

あまりにもあっけなく……

消えた。

第A・5話・最初の扉越し（後書き）

興味を持つてくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

部屋が綺麗になりました。パソコンが壊れました。
でも、頑張ります。

評価、感想、栄養になります。

第A・6話・夢見る少女

夢と現実の境界は、いったいどうあるのだらう。

痛覚があれば、それは夢？ 現実性がなければ、それは夢？ 私はどうちらも現実と夢を分ける根拠とはならないと思ひ。

夢は脳とリンクしているし、痛覚とも関連付けられていてもおかしくはない。現実性だつて、ただの思い込みに過ぎない。誰かに植え付けられた一方的な当たり前を、当たり前と思い込んでいるに過ぎないのだから。

もし、長い、とても長い夢を見ることができるなら。

夢はきっと現実になってしまつたのだと感ひ。

「夏美、じめん！」

加藤さんが私を捕むように手を合わせる。

私は田をぱぱちくつむせながら、片田をつづりておどける友人を見つめた。

「宿題見せて！ 今日、指されるの忘れてました」

「いつのこと忘れたまま先生に指されて、分かりませんって答え、みんなの前で恥をかいたほつが、加藤さんのためになるのかも……？」

「おほほほほ…… 夏美先生、それはないですわよ。この私にそんな羞恥プレイは似合いませんわ」

右手の甲を口に添えて、高飛車娘を演出する。

「それはそつと夏美先生？」「はやはは、この私めに颯爽と宿題のノートを差し出すのが、夏美先生たる器の大きさを見せ付ける絶好の機会であると存じ上げますが！」

極端にへりくだった加藤さんの物言いに、私は思わずほほを緩ませてしまう。

「もう……。夏美先生はそろそろ加藤さんに愛想を尽かしそうです」

私は渋々ノートを机から引っ張り出して、加藤さんに差し出した。

「夏美！ 愛してる！ ああ、夏美！ あなたはなぜ夏美なの…」

「ショイクスピアも怒るよ、加藤さん……」

「加藤よ、お前もか！」

「ショイクスピアも怒るよ、和輝君……」

二人とも、物知りなのかそつでないのか分からなくなる、見事な連係だった。

「べーだ、和輝には見せてあげないもんね」

私の貸したノートを背中に隠して、加藤さんは舌を出した。
まだ十分時間はあるのだから、和輝君に見せてあげてもいいと思うのだけれど。

「いいのか、加藤。こつちには誰も知らない秘密兵器があるんだぞ」「口に出した時点でもう秘密ではないけどね」

口を挟んだ私に咳払い。

「……」ほん。とにかく、俺にもノートを見せてくれたほうが身のためだと思つた。これは脅しではない、取引だ」「和輝君、悪役の台詞だよ……」

「水野さん、いまさら気がついたか。しかし、時すでに遅し！」

和輝君が悪党さながらの不敵な笑みで、こぶしを振り上げる。

「正臣ー！」

「え？ 僕ー？」

胸から心臓が飛び出すかと思った。事を傍観していた正臣君が、話を振られて戸惑っている。

そんな困惑した表情も、どこか可愛いと思えてしまう私は、きっと馬鹿だ。そうに違いない。

「いいか、水野さんのノートを最初に俺に貸すように言つてくれ。いや、言つんだ。むしろ、言え。まあ言え。すぐ言え。疾く言え」

腕を組んだ和輝君が、じりじりと正臣君に迫る。両手を胸の前に広げた正臣君は、頬を引きつらせていた。

和輝君の顔が、よほど悪党面化しているらしい。

「ちよつとー 夏美の弱みをつくのは卑怯よ、和輝！」

「悪役に、卑怯も糞もない。勝てば官軍、手段は選ばん

「弱み？ 水野さん、弱みって何？」

「あ、あの……その……弱みといつか……その」

指を差して非難する加藤さんに、胸を張つて応戦する悪党、和輝

君。

私は正臣君に見つめられて顔が赤くなる。

正臣君の鈍感は、今に始まつたことではない。でも、心の準備がこれっぽっちもできていらない私にとって、気持ちは複雑だけれど、すく助かる。

「夏美が好きだつて知つてるでしょ！ 悪党とかそういう以前に、友人として問題があるわよ！」

「……却下。さ、正臣、言つてくれ。俺のために」

「水野さん、加藤さんが言つ好きつて？」

質問と回答が錯綜して、私の脳がパンク寸前。

「あ……う、その……弱みが好きというか、好きなのが弱みで、えつと、そりゃなくて、正臣君が弱みを握つてているというか、弱みそのものが正臣君といつか……」

頭に浮かんだ言葉の羅列をうまく整理できない。
主語と述語がくるくると回転して、落ちものパズルゲームのよう
に次第にスペースを失つていく。

「み、水野さん？」

「夏美？」

和輝君と加藤さんが、競い合つよひノートの端を持ちながら、
私を振り返る。

私は哀れなノートを取り上げて、ほほを膨らませた。

正臣君が見てるんだから、なるべく可愛い物言いをしなければいけない。

「一人ともそこの正座！ 喧嘩両成敗です！」

腰に手を当てて一人を叱りつける中、ちらりと正臣君を盗み見た。正臣君は、やれやれといった風体で頭をかいしている。少し長めの毛が彼の耳を隠していて、時々現れる耳元にどきりとする。

正臣君は、福耳だった。

「夏美い～……」

「水野さん……」

涙目になつた和輝君と加藤さんが、神にでも祈るよつた両手をがっちりと組み合わせている。正座した一人が私を拌むのを見ていると、教祖様つて案外悪くないかも知れないと思つてしまつ。

「問答無用。両成敗です」

手に持つた松葉杖で、一人の肩を軽く叩く。

「大岡裁きならぬ、水野裁き。いや、名裁き名裁き」

楽しそうに拍手する正臣君に、私は少し照れてしまう。

「あ、ありがとう、正臣君……」

恥ずかしさで首筋がかゆくなる。

「今の感謝するところか？」

「馬鹿にはしていないと思つわよ」

机の横で正座する一人が顔を合わかる。

「水野さん、あんな」と言つてゐるけど
「裏切り者！」

正臣君が私に密告した瞬間、正座した一人が同じタイミングで声を上げた。

第A・6話・夢見る少女（後書き）

興味を持つてくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
います。

気を失つた水野が過去の夢を見ています。視点が、コロコロと変わ
つていて、読みにくいとは存じますが、どうかお許しください。
評価、感想、栄養になります。

第A・7話・放課後の記憶はのちにジャヴに変わる

夕日にかげる夏の教室で、私は参考書のページをめくる。宿題はとっくに済ませたから、残るは明日の予習と、今日学んだ範囲の応用問題を残すのみ。

机に立てかけた松葉杖の影が、いつのまにか長く伸びていた。

窓の外からゆるゆると吹き込んでくる風。夕日で橙色に染まったカーテンを優しくなでる。吹奏楽部の個人パート練習がそこかしこで聞こえ、その間をぬうように、女子ソフトボール部の威勢のいい声が、私の耳に飛び込んできた。

教室には私以外誰もいない。

私はシャープペンシルを置いて参考書を閉じると、松葉杖を使って窓に歩み寄る。

「気がつかないうちに日が伸びてたんだ……まだ太陽があんなところにある」

風に揺れる髪の毛を耳元にまとめながら、遠くに見える山々と、赤く燃える太陽を見比べる。

「紅白試合かな」

グラウンドを見渡した。ちょうどネクストバッターズサークルで片ひざを着く加藤さんが目に入る。

今週末の試合にかける思いが、円の中心で素振りをする彼女から伝わってくるようだった。

「あれ、水野さん？ まだいたんだ」

和輝君が、かばんを持ったまま教室に入ってきた。ぐるりと教室を見渡して、私の机に目を留める。

「勉強していたのか……俺も見習わなきやな
「見習う気なんかないくせに」

「あ、バレた?」

薄っぺらいかばんを小脇に抱えて笑う。
気持ちのいい笑い声だった。「冗談を気持ちよく笑い飛ばせる和輝君が、なぜかうらやましく思える。

「あ、そうだ。正臣と香奈を探してるんだけど、水野さん知らない？」

手のひらを、ぽん、とこぶしで叩くと、私の隣に並んで窓の外を眺める。

「校内を探していらないなら、グラウンドにでも……」
「下駄箱は？ 見たの？」
「靴はなかった。でも、あいつが俺に何も言わずに帰るとは思えないからさ。……香奈は分からぬけど」

和輝君の横顔がかけつたように見えたのは、夕日のせいだろうか。

「お、あのじつい姿は加藤じゃん」

「ひどい。和輝君てば、何気に毒吐くんだね。あとで加藤さんに言つちゃお」

「か、勘違いしてもらつては困るな、水野さん。これは褒めてるんだ。ソフト部としてのがつちりした体格は、対するピッチャーにとつても脅威だ、ってことを俺は言いたかつたんだ。うん」

「今の絶対に後付けだね」

和輝君の慌てた身振り手振りで、そう判断した。

そんなやり取りも露知らず、加藤さんはぶんぶんとバットを振り回すと、体を伸ばしながら右バッターボックスに向かう。ランナーがいないところを見ると、前のバッターはアウトになってしまったようだ。

「最近、加藤さんと仲いいよね」

「……ん、そうか?」

数秒の沈黙を苦にしたわけではないけれど、私は開口していた。

「私にはやつ見えるよ」

加藤さんが、一球目を見逃した。余裕を持って見逃したボールは、キヤツチャードが要求したボールよりも高めに外れていた。まずワンボール。

「正臣の隣の席だから、話す機会が多いだけだよ」

和輝君は真っ直ぐに加藤さんの打席を見つめている。表情のない顔からは何も読み取ることができない。

「でも、加藤さんと話しているときの和輝君は、とても楽しそうに見える」

二球続けたストレートを、待つてましたとばかりに鋭く振り抜く加藤さん。芯で捕らえた打球は、ヘッドスピードが勝ってしまったのか、サードベースを巻き込んでファールになる。これで、ワанс

トライク、ワンボール。

「きっと和輝君と気が合つんだね。男性の話題にもすゞく溶け込んでるし、次々に話が飛び出してくる感じで……相性ぴったり。みんなそう思つてるんじやないかな？」

加藤さんの圧力に恐れをなしたのか、三球目は外に大きく外れてツーボール。

キャッチャーの指示だったが、ピッチャーは納得がいっていないようだった。

「水野さんは、俺に何を期待してるの？」

「え……？」

和輝君の瞳が私の顔を映す。

不覚にもどきりとしてしまった。

悪いことをしたわけでもないのに、罪悪感にさいなまれてしまう。

「和輝……君？」

夕焼けの微風が、窓から入り込む。

和輝君の前髪をなびかせ、耳元でまとめた私の髪の毛を散らす。風に乗って、ミットにボールの収まる音が聞こえた。聞髪いれず審判のストライク「ホール」。

私の記憶が正しければ、加藤さんはツーストライクで追い込まれたはずだ。ツーボールということもあって、次が勝負球となる。ボールひとつ遊ぶことができるという余裕は、逆に命取りになる。だから、次がどちらにとつてもウイニングショット。

「クラスのみんなや、加藤自身、そして」

和輝君の声に申し合わせたように、吹奏楽の演奏も止む。放課後とは思えない静寂が、緊張感を生みだした。

「水野さんがどう思つているかは知らないけど」

胸に痛みが走る。和輝君の表情が怖いくらいに冷静だった。

「俺は加藤のことなんとも思つてない」

ストライクバッターアウト。
審判の声が私の耳に届いた。

「どうしてそんな言い方……」

和輝君の瞳を見ていられなくて、視線をグラウンドに逃がす。三振した加藤さんが、夕陽を背負いながらベンチに引き下がつていく姿が見えた。

その背中が、ひどく小さく見える。

「もつと別の言い方してもいいと思つ」
「だったら、どう言つたらいいの？」

和輝君は微笑みながら聞いてくれる。
でも、どこかその微笑みは作られたもののような気がした。オレンジ色の光がそう錯覚させるのだろうか。

「そんなの、私に聞かれても分からなによ……」

「『めん、水野さん。でも、俺はね』

かばんを小脇に抱え、両手はポケットの中。夕日に田を細めて、ゆっくりと息を吐く。

そんな和輝君の横顔は、一枚目だと思える。正臣君も素敵だと思うけれど、和輝君はおそらく誰が見てもそう答えるくらい格好良い。

「 香奈が好きなんだ」

悲哀をたたえた微笑。

好きという気持ちを誇る、といつよりは、どうして好きになってしまったんだろう、といつ後悔のほうが強い。少なくとも、私にはそう感じられた。

「 水野さんが、正臣を好きなようにね」

いたずらにウインクして見せた。

「 やつぱりバレてたんだ……」

「 うん、バレバレ。おそらくクラスで知らない奴は、正臣本人を残すのみだと思うよ」

クラスメイトの態度から薄々感じてはいたから、いまさら驚きはしなかつた。

そう考えると、最後まで気がつかない正臣君は、もう超が冠に付くくらい鈍感で、鈍感で、鈍感だ。

女心が分からぬ、という冠もおまけで付けたいくらい。

「 気がつかなかつたな。和輝君が香奈さんを好きだったなんて」

「 隠していたつもりはないんだよ。ただ、俺の周りには、積極的に好意を態度で示す人間が多くてさ。木を隠すなら森の中というか。意図せずにそうなつたみたい」

「香奈さんも……そつだもんね」

グラウンド上では、スリーアウトで守備と攻撃が入れ替わる。それを一瞥した和輝君が、興味を失つたように窓から離れて、教室の出口に歩いていく。

話は終わり、背中から和輝君の声が聞こえてくるようだった。

「香奈は正臣が好き。水野さんも正臣が好き。俺は、そんな香奈が好き」

出口近くで立ち止まつた和輝君が、香奈さんの机を見下ろしている。

「俺の親友はさすがにモテるな。でも、あいつは……」

「正臣君は？」

私は思わず声に出していた。正臣君のことになると、耳を手のひらより大きくすることができるのに、私の隠れた特技 悪い癖だ。

「…………あいつの好きな人って誰かな、と思つてさ」

でも、に続く言葉としては不適格だと思う。

とつさに言おうとした言葉。それが禁句であることが分かつて、あわてて取り繕つた。

私の第六感は教えてくれた。

「和輝君は知つてるの？」

「…………知らない」

平板な声は、これ以上の言及を許さない。

「でも、もしも、あいつが他の誰かを好きだとしたら……」

和輝君の言おうとする言葉が、テレパシーのようご私の脳に伝わった気がした。

でも、それは幻聴に過ぎなくて。

テレパシーはシンパシーに過ぎなくて。

「 救われないな、俺たち」

肩越しにその言葉を残して、和輝君は教室を出て行く。
和輝君の言葉に負けそうになる私がいた。

引っ込み思案で、香奈さんのように積極的になれない私。
勉強しか取り柄がなくて、正臣君を笑わせる冗談も思いつかない
私。

和輝君の言う通り、救われないのかもしれない。

正臣発見！ かなり探したんだぞ！ それこそ掃除用具入れ
の中まで！

そりそり、体中縛られて、口にはガムテープ……つて、いじ
めかよ！

遠くから、正臣君と和輝君が出会い声が聞こえて、私は自分のこ
とのように嬉しくなる。

「生きてこむ限り、可能性はゼロじゃないよ……きっと」

攻守の交代したグラウンド。
ピッチャーマウンド上では。
バッターから三振を奪った加藤さんが、天に向かつてグローブを
突き上げていた。

第A・7話・放課後の記憶はのびてジャヴに変わる（後書き）

興味を持つてくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
面白いものって何でしょうね……自分の小説を読んでいて、面白いと感じたことがないのでそれが分かりません。プロットに沿つて書いていると、時々流れ作業になっていることに気がつきます。第三者になって、自分の小説を読んでみたいですね。迷いました。

評価、感想、栄養になります。

第A・8話・キスが痛みに変わった日

第一棟の三階。

廊下を直進した突き当たりにある観音開きの扉を開けると、そこはパラダイス。

広大な読書スペースには、大きな卓上の机が点在していて、卓の中央には仕切りのための板がある。誰の視線も浴びずに読書や勉学に集中できる点は、さながら専用の個室のよう。

奥には、本棚がまるで碁盤の目のようにぎっしりと林立していて、そらにその向こうの扉の中には、持ち出し厳禁の貴重な本まで置いてある。博物館にあってもおかしくないほどの大貴重な初版本や、すでに発禁、または生産終了となっている本まで、まさに宝の山。自分の通う学校に大きな図書館があるなんて、本当に幸せだと思つ。

……そつ思つているのは、私だけかも知れないけれど。

「夏美～、奥からこの本取つてきて～」

間延びした声で、隣のクラスの中山由美がカウンターから声をかけてくる。

図書委員を通して知り合つた子で、自由奔放で茶目っ氣たつぱり。けれど、どこかいつも気だるげ。

面倒くさがりの彼女は、いつもそつ言つて面倒事を私に押しつける。

それでも、飽きもせず私と一緒に活動を手伝ってくれる彼女は、どこかで活動を楽しんでゐるのだろうか。

相変わらず気だるそうにしているけれど、田が合えば微笑む彼女に、私はそう思えた。

……憎めないのが憎たらしい。

そんな言葉が私の辞書に書き込まれた。

「『』の本って言われても、どの本なのか分からな『』よ。……」「『』めん『』めん、『』B』『』R』の『』一五四』の本～」

やはり彼女は面倒くさそうだった。

「分かった。すぐ持つていくな

唐突だけど、私は放課後の図書室が好き。

誰もいない図書室に差し込む夕日、揺れる白いカーテン、野球部や、ソフトボール部の威勢のいい掛け声、吹奏楽部の音あわせ……まるで映画の一ページにいるような気分になる。
セピア色に彩られた空間は、太陽の余熱でほのかに暖かく、眠気さえ覚えてしまう。
まさに夢心地。

私は、貸し出し厳禁の本がぎっしおと詰め込まれた、奥の部屋に入る。

「えつと……『』B』『』R』『』一五四』は……」

図書委員の私には、大体の場所が分かっている。

可動式書棚のクラシクを回すと、大きくて長い書棚が、ゆっくりと動いていく。こんな大きな書棚が、小さなクラシクひとつで動いてしまうのだから驚きだ。

その昔、この書棚にはさまれて死んでしまった生徒がいるそうで、学校の怪談のひとつに、この可動式書棚の隙間から漏れ出てくる血、というものがあつたらしい。らしい、というのは過去の図書委員が残した日誌に挟まっていたメモを、先日偶然にも見てしまったから。私は身が震えるような思いでさつさと目的の本を発見すると、その場を後にした。

「ねえねえ、夏美～」

「何？」

私は持つてきた本を中山さんに渡しながら、次の仕事に取り掛かる。毎日のよろづに繰り返される書庫の整理。

「見て、窓の外」

すでに図書室は閉館しているので、私たち一人以外誰もいない。私は、中山さんの言葉に耳を傾けながら、脚立に足をかけた。手には大量の本。

「あれ、正臣君じゃない？」

「え？」

私は慌ててしまつて、危なく脚立から落ちそうになりながらも、窓の外に目をやる。

「なんか、いい雰囲気」

中山さんが指差した方向には、確かに正臣君がいた。そして、その隣には、いつも正臣君のそばにいる女の子。

……中井香奈さん。

「あの二人、いつも一緒にいるよね。付き合ってるのかな~？」

私は一人が寄り添う風景から田が離せない。

正臣君は私たちに背中を向けているので、表情は確認できないけれど、正臣君の正面に立っている香奈さんの表情は、はつきりと確認できる。

普段は静かに微笑を浮かべている香奈さんが、信じられないような幸せな笑顔を浮かべていた。

そんな風に正臣に笑いかけている様子を見ると、胸が締め付けられるように痛み出す。

「付き合ってるよね~、なんかお似合いって感じ」

「……似合ってなんかないよ。香奈さんが一方的につきまとつてただけ」

冷たく、感情のない声を出してしまえる私に驚く。

中山さんもそんな私に気がついたようで、脚立の上で本を抱えたままの私を振り返る。

「どうしたの?」

「え……あ、ううと、幸せそうだね。あの二人」

本をぱらぱらと床に落としながら、私は答えた。

「その反応~……こまどりドラマでも見かけないんだけど

薄ら笑いを浮かべる中山さん。

私は大げさに胸の前で手をふり続ける。

中山さんのアンニコイな空気が、いつの間にやら霧散していた。

「ち、違つ違つ。私はそんなんじゃ……」

「へへ、怪しいなあ」

半眼で見上げてくる意地悪な視線に、私はひるんでしまつ。

「違つてば。中山さんが思つてはいる感情なんて、私にはないよ」「うんうん。分かる、分かるよ、その気持ち」

「……話、聞いてくれてる?」

「この中山由美、水野夏美のために一肌脱ぎましょー。」

「あ、あの、私の話を……」

私の力なく伸ばした手は、脱アンニコイを果たした中山さんに届かなかつた。

「なんと偶然にも、男のハートをがっちりつかむ、いい方法があるのよ」「

窓の外の一人は、なにやら楽しそうに話をしているようだつた。和輝君と一緒にいる正臣君とは違う、普段見慣れない彼に、私の胸がざわめき立つ。

「夏美、男なんてね、結局は単純なものなのよ。正臣君もしかり

腕を組んだ中山さんが、胸を張る。

「……名付けて、おまじない作戦～！」

なんともメルヘンチックな作戦名。

ビルが鬱蒼と生い茂る現代には似つかわしくない作戦名に、私は

肩を落とす。

一方の中山さんは、一人で拍手をしながら、満足そうに納得していた。

満足のいく命名だつたらしい。

「まあまあ、そう肩を落とすのも分かるわ。でも、最後まで聞いてから判断して頂戴な」

よほど自信があるのか、中山さんは鼻息が荒い。

「まずは、一人つきりになる」と

「それが一番難しいんだつてば……」

心の中でつぶやいた言葉が、つい口から漏れてしまう。中山さんは耳にしているはずなのに、相手にはしてくれなかつた。どこまでもマイペースな人だ。

「そして、次に甘えたような視線で、下から見上げる。」

両手を祈るように組み合わせると、脚立の上の私に、懇願するような眼を向けてくる。子猫のように目を潤ませるじぐさは、確かに可愛らしげ。

「ねえ、正臣……元気になるおまじないがあるの……」

脚立の上の私を正臣君に見立てているようすで、視線を絡ませるよう、猫なで声を上げた。

「……」

私は「ぐりとつば」を飲み込む。同性なのに思わずときめいてしまいそうになった。

「俗語はどつともなるわね。要は、ケースバイケース。相手が落ち込んでいるようだつたら、今の言葉を使えばいいし。一人つきりで緊張しているようなら、『落ち着かせてほし……』とかでもいいかな~」

「でも、変な女に思われないかな?」

「大丈夫。男心に訴えるから、そんなこと思いやしないって、それに、夏美はただでさえかわいいんだから、一人つきりになつた時点で、半分はもう成功したものよ」

ウインクする中山さん。漫画ならハートが飛び出しているかも。

「半分なんだ……」

「あり、意外と贅沢なこと」

中山さんが、驚いたようにまばたきする。

「あ、違うのー。もつと自分に自信があるとか、そんなのじゃなくて、その……もつと確率が高くなつてからじや駄目かなつて」「夏美、それじゃ、正臣君を取られちゃうよ~?」

「そ、そうかもしれないけど」

「何かを失うことなくして、何かを得ることは出来ない!」

拳を高々と突き上げる、脱アンニコイド中山さん。

「あ、純粹さを失つてらっしゃい」

お先にどうぞ、という風に私に手のひらを差し出してくる。

「失うのは、純粹さなんだね……」

どういった基準で純粹さが失われてしまうのか詳しく聞きたかったが、中山さんはやはりマイペース。

「私が脱げるのはここまでかなー。これ以上は、別料金ね~」

どうひすでこ一肌は脱いだらしい。意味深な言葉を残して、図書室を出て行こうとする。

「と、いつまで、后は頼みます」

ペーじ、と私に一礼して図書室を出て行く。

「え……え?」

私はよどみのない動作の連續に、あっけに取られて引き止める暇もない。仕事を私に押し付けて帰つたときがついたときには、すでに中山さんの姿はなかつた。

「寧に彼女は、仕事と一緒にアンニュイな気分も置いていったらしい。

その証拠に、私は今までに倦怠感に背中を押しつぶされそうだった。

「や、やられた……」

私の周囲には私が落とした本が散乱している。そしてそこ、手も付けられていらない本の山が、床に山積みになつていた。
窓の外に目をやると、正臣君はいない。

一人で仲良く会話をしていた姿は、すでにビームかへ消えた。山の向こうに消える太陽のように、恋人同士のような二人も街の中に消えてしまったのだろうか。

仲良く手を握り合つて、体を寄せ合つて、公園のベンチに座つたりして、唇と唇が接近して……。

「そんなのヤダよ……」

急に涙が出そうになる。妄想に火がついてしまって止められない。

……窓の外で会話をしていた。

たつたそれだけの情報なのに、私の心はそれより先を想像して止まない。様々なパターンを想像しては、ありえない、と否定していく。

危機管理シミュレーション。

そんな言葉が、私の頭をよぎりてしまつて、私は自嘲した。

「何かを失うことなくして、何かを得ることは出来ない……か」

期待して待つているばかりでは、正臣君はいつまでたつても私のことを見てくれない。ただの一人のクラスメイトのまま。自分から積極的に近づいていく香奈さんに、彼を取られてしまうのは、確實。私は自分の唇に触れてみる。

「頑張れ、水野夏美！」

脚立の上で、自分で励まして、今度は別のシミュレーションをしてみる。

「正臣君……私ね……」

田をつぶつて、教室の一角で一人きりになつた風景を想像する。

放課後の教室、校庭からは野球部の掛け声、金属バットがボールをはじく音が入り込んでくる。オレンジ色に輝いた夕日が、教室に差していく、正臣君の反対側の頬には淡い影。穏やかな風が、開けつ放しの窓から入り込んできて、一人の間を軽やかに駆け抜けていく

「……元気になるおまじないがあるの……」

媚びるよつた声を出してみる。

瞳をまぶたの裏に隠して、ドキドキする胸を押さえて、少しだけ背伸びする。唇を正臣君に向けて、私は来るべき時を待つ。

正臣君の手が私の両肩に置かれて、二人は禁断のキスをする。

「水野さん、話があるついで、中山さんから言われたんだけど？」

それは、もつと前の段階。今は、キスのシーンなんだから、その会話はおかしい。

私は脳内で映画監督のように女優に叱咤した。

女優といっても、私なのだけれど。

「水野さん？」

雑念が入り込んでいるようだ。

私は、シミュレーションに集中するために、首を横に振った。もう一度最初のシーンから。

監督が女優にかける言葉のように、私は心の中で念じた。

……放課後の教室、校庭からは野球部の掛け声、金属バットがボ

ールをはじく音が入り込んでくる。オレンジ色に輝いた夕日が、教室に差していく、正臣君の反対側の頬には淡い影。穏やかな風が、開け放しの窓から入り込んできて、一人の間を軽やかに駆け抜けていく

再び背景が鮮明に脳裏に描かれる。

「正臣君……私……」

「うん。何?」

リアルだ。非常にリアルだ。

私は想像の天才。

正臣君の生声を想像できてしまふ私は、きっと妄想の天才だ。それだけ彼に惹かれていることが理解できて、胸が苦しくなる。

「元気になるおまじないがあるの……」

「おまじない? 元気になるって?」

……なんだろう、この私の想像を超えるアドリブは。

「それより、水野さん、脚立の上でつま先立ちするのは、危ないからよしたほうがいいと思うよ」

「……え?」

私は、つま先立ち、唇を斜め上方に向けて尖らせたままの姿勢で、薄目を開ける。

脚立のそばには、窓の外にいたはずのあの人人がいる。

……中山由美、曲者なり。

一滴の汗が、額から頬に流れていくのが分かつた。

見られた。絶対に一部始終見られた。彼は見てた。彼に見られた。見られてしまった。

「あの！ これは！ 決して、そういうやましいことではないんです！」

慌てて体勢を戻して、頭を下げようとした。

「水野さん、危ない！」

気がついたときには遅かった。不安定な脚立の上でバランスを崩した私は、図書室の床に急降下する。

現実は、かくも厳しいものか。

正臣君が、私を受け止めてくれることはない。そんな超反応が出来る人間は、ドラマの中だけにしか存在しない。

転びそうになつた主人公を抱きとめるとか、銃弾に撃たれそうになるのをかばうとか、そんなことは実際には起こりはしない。

正臣君が、私を助けようと必死に体を動かしてくれるのが、視界に映つた。

それだけで、私は十分嬉しかった。

彼の頭の中には、今、私を助けようと氣持ちしかないのだから。
そんな小さなことでも嬉しいなれる私。

なんて哀れ。

でも、これでさつきの奇行は忘れてくれるかな。帳消しになつてくれるかな。

私はスローモーションのように流れれる視界の中で、そんなことを思っていた。

病院に運ばれた私に伝えられたのは、右足骨折といつ診断結果だった……。

第A・9話・大切なものの

朝の昇降口。

松葉杖をつきながら、そんな過去の苦い　　痛い　　思い出にふけつていた私。

松葉杖のことを考え、いつもより朝早くに起きて登校することが日課になってしまってからは、自分の馬鹿さ加減を呪うように、毎日のように思い返していた。

あれは、きっと日頃から積極的になれない私への戒めなんだ。今ではそう思ひようにしている。

「おはよー」

隣に並んできた加藤さんが、私に挨拶してくれる。考え方につけていたからか、時間はすでに加藤さんが登校していく時間になってしまった。

「加藤さん、おはよー」

落ち込みやうになる心を隠して、加藤さんに挨拶する。

「おはよう、水野さん」

驚いたことに、加藤さんの後ろから出ってきたのは、正臣君の親友である、万年遅刻常習者の和輝君だった。

「か、和輝君？　どうしたの今日は？」

歩くペースを、松葉杖の私に合わせてくれる和輝君の心遣いが、

嬉しい。

「ん~、なぜだか早起きできたんだよね。神様の思し召しかな。日
じろから模範囚のよくな俺への」

「……すでに、投獄されてるんだね」

和輝君の、冗談が本氣か分からぬ言動に、私は笑わされてしま
う。正臣君がいつも楽しそうに笑っているわけが、分かつた気がし
た。

「正臣君、きつとびつくりするね。和輝君がこんなに早く登校した
ことを知つたら」

「やうなんだよー。俺もそれが樂しみでや。正臣のヤツ、俺が遅刻
していくといつも馬鹿にするからわ。今度くらいは、あいつのこと
馬鹿にしてやるつもり」

正臣君の話題になると、本当に嬉しそうな顔を見せる和輝君。

それは、私にとつても同じ。

和輝君から聞ける正臣君情報は、私にとつては何よりも有益なも
の。

有益さで比べたら、学校の勉強内容なんて、正臣君情報の足元に
も及ばない。

……ふと気づくと、いつもなら嬉々として会話を参入していくはずの加藤さんが、後ろを黙つてついてきていた。

「加藤さん、わざと聞いたんだけど、今日これから集会なんだって

樂觀主義者の加藤さんにしては珍しく深刻な表情で考え込んでい
たので、私は心配になってしまつ。だから、教室に行けば嫌でも知
ることになる今日の集会の予定を、話しかける材料にした。

「え、それって授業つぶれるの？」

授業がつぶれて欲しくない私としては、加藤さんの喜びよつは、正直言つてとても複雑だった。

「授業がつぶれるのを喜んじゃ駄目だよ。次の授業で遅れを取り戻すの大変なんだから。先生も生徒も……」

「ま、それが加藤らしいよな」

笑つて加藤さんの肩を叩く和輝君。

「正臣早く来ないかなー、驚かせてやりたいよ

憂鬱だつたはずの朝が、正臣君の驚いた顔を想像するだけで払拭されていく。

「そうだね、私も楽しみ。正臣君の驚く顔、楽しみだな」

突然、パン、という平手打ちのような音が加藤さんから聞こえてきたので、私は驚いて振り向いた。

「よし！ 加藤優理子は、今日も元気です！」

体育会系らしい加藤さんの元気の出し方に、私は笑つてしまつ。

「おかしな奴だな」

和輝君もつられて笑い出した。

「水野さん、正臣ってどれぐらいに登校してくるか分かる?」

「うーん、普段は、大体今の時間くらいかな。今日は遅れているみたいだけど……」

「それなら、俺も今ぐらいいに登校するかな……。そうだ、加藤、さつきは断つたけど、お前も一緒に登校するか? 俺一人では起きれないけど、お前と二人なら、連帯責任のようで起きれるかもしれないし」

和輝君の何気ない問いかけに、加藤さんは飛び跳ねるよひに喜ぶ。

「する! するする! 登校する!」

「よし、そうと決まつたら、明日から早速な

「まかせてまかせて」

拳と拳をつき合わせて、意思の確認をする一人。
私は、そんな二人を見ていて羨ましくなる。
私が正臣君とそんなことが出来るとは思えない。
きつと、これからもずっと……。

「水野さんもびいづ~」

「……え?」

誘われるとは思つていなかつたので、私はびっくりしてしまう。

私は怪我をしていて、松葉杖で、人一倍登校に時間をかけなければならぬ。そんな私に合わせながらの登校は、一人にとつて負担でしかないから。

だから。

「私は、いいよ。早めに登校して予習したいから。だから、ごめんね」

「……そつか。それじゃ、正臣にも、やつれておくれよ」

和輝君が何を言っているのか図りかねる。

「正臣さ、最近数学分からないつてぼやいてるから、水野さんが教えてやつてよ」

和輝君が、笑みを浮かべて、松葉杖で階段を上る私を手伝ってくれる。

「正臣も喜ぶと思つよ」

私は涙が出そうになるのをこらえながら、大きくなづいた。
「ついでに私からも言わせてもらひえなが、夏美はもっと積極的になつたほうがいいと思つよ」

加藤さんが、白い歯を見せる。

右から支えてくれる和輝君。その反対側を、加藤さんが支えてくれている。

私は一人に挟まれる格好だ。

二人とも大変なはずなのに、喜んで、笑顔で手伝ってくれる。一人の何気ない厚意に、じわじわと胸が熱くなつていく。

「…………がと…………ありがと…………」

加藤さんの言う通り、少しだけ積極的になつてみよう。

少しだけ勇気を出してみよう。

少しだけ自分勝手になつてみよう。

少しだけ大好きな彼に近づいてみよう。

たとえ結果的に救われないとしても、何もしないまま救われない自分を後悔したくないから。

「気にしない気にしない」

右を支える和輝君が朗らかに笑う。

「これぐらい遠慮しない！ 友達なんだからさ」

左を支える加藤さんが、元気に笑う。

私を支えてくれる人がいる。

こんなにも優しい友人がいる。

だから、私の大好きな人の人にも、こんな優しさを伝えられたなら。

彼を思いやることが出来たなら。

支えることが出来たなら。

それはどんなに素晴らしいことだろう。

素敵なことだろう。

救われなくても構わない。

片思いでも構わない。

「……水野夏美……頑張ります……」

流れてしまつた一滴を、私は止めることができなかつた。

きつと今日という日は、私にとって大切な日になるに違ひない。

だつて、こんなにも優しさに囲まれていることに、気がつくことができた。

だつて、あんなにも消極的だった私が、人生の階段を一步、踏み出すことができた。

私は生涯忘れない。

和輝君と、加藤さん、そして、大好きな人の人と出会つことがで
きた喜びを。

私は、生涯忘れない。

第A・9話・大切なものの（後書き）

興味をもつて下さった方、読んで下さった方、ありがとうございます。

久々の連続更新でした。

今回投稿した朝の登校風景は、加藤さん視点のものとリンクしています。……はい、ダジャレです。

面倒ですが読み比べてみると面白いかもしれません。あくまで、かもめ、です。

それではこれからも細々と頑張っていきます。
評価、感想、栄養になります。

夢と現実の境界は、いつたいどいにあるのだね。痛覚があれば、それは夢？現実性がなければ、それは夢？私はどちらも現実と夢を分ける根拠とはならないと思つ。夢は脳とリンクしているし、痛覚とも関連付けられていてもおかしくはない。現実性だつて、ただの思い込みに過ぎない。誰かに植え付けられた一方的な当たり前を、当たり前と思い込んでいるに過ぎないのでだから。

もし、長い、とても長い夢を見ることができたなら。夢はきっと現実になってしまつと思つ。

そして、もし、現実から覚める、といつ頃葉があるのなら。

私は、今すぐにでも、現実から覚めたかった。

「夢じやないんだね……私が見ているのは現実なんだよね……？」

甘く、それでいて、心地の良い映像の連續だつた。

「…………水野さん」

「加藤さんは……加藤さんは、どうなつたの……？」

仰向けになつて倒れてしまった私の背中を支える和輝君。

「加藤は……」

語尾を濁しながら、真一文字に引き結んだ唇。その先の言葉を紡ぐのを拒否するように、和輝君は下唇を噛み、縫い合わせた。

「死んだわよ」

腕を組んで、ぶつかりぼつに言い放つたのは、睦月さんだ。

「死、んだ……？」

鈍器で殴られたような衝撃。

痛みを感じない衝撃は、私の視界を多重に分裂させた。

私の背中を支えてくれる和輝君の体が強ばる。

「……なんで？ なんで助けてくれなかつたの？ 和輝君…… 加藤さんはね…… 加藤さんは！」

甘い夢の残り香。

私はまだ現実にどどまり続ける夢の映像をつなぎ止めた。

和輝君と会話した放課後の風景、休み時間のノートを巡る攻防：

青春と呼ぶにふさわしい、青く切ない出来事。

「友達だよね？ 今日だつて、一人で一緒に登校しようつて約束を

「

拳を付き合わせた一人の笑顔がよぎる。

「彼氏に文句を言つのは、筋違いもいいとこ」

彼氏ではない、そんな訂正をすることすら億劫に感じられる。体の中に、血ではない黒く濁つた液体が流れ込んできた。関節の動きを鈍化させるぬるぬるした液体。

私はそれを振り払おうとする。

取り付かれたら、飲み込まれたら終わり。

自分でも気付き始めている黒く、悪寒すら感じる物体に、私はあらがいたかった。

「一隻のボートがあるじゃない？」

組んだ腕をほどいて、世間話のように話し始める睦月さん。

「アンタはそれに乗ってる。定員は三人」

睦月さんの三本の指が私に突きつけられた。

教師が駄目な生徒に何とか理解させようと、仕方なく同じ説明を繰り返すように、それは特大の倦怠感を呉わせた。

面倒臭い、そんなわざわしそうな臭い。

「で、近くに三人が溺れていて、一人助けられる。全員助けたら、定員オーバーでボートは沈み、全員助からない」

私の体を浸食する、黒い液体の勢いが早まる。

「アンタならどうするわけ?」

生徒会長が、軽く鼻で笑っていた。

馬鹿な質問をしたものだな、と言いたそうに、めがねの橋を持ち上げる。

「参考までにやこの日和見主義者、答えてみなやこよ」

睦月さんににじまれた佐藤君は、驚いて自分の背後を振り返る。もちろん、背後には誰もいない。

「アンタよ、アンタ。他に誰がいるつていうのよ」

「……ぼ、僕のことなのか?」

自分を指さして、心外そうに眉根を寄せせる。

確認するように生徒会長の目の色をつかがつたが、残念ながら生徒会長は取り合ってくれないようだった。

「そりよ、当たり前じゃない」

「……へ」

奥歯をかみしめる耳障りな音。

「定員が、三人なんだ。一人助けるしかないだろ?……」

佐藤君の答えに眉一つ動かさず、睦月さんの視線が生徒会長に動いた。

「質問の意図が分かりかねるな。その質問は……百人が百人、同じ答えにたどり着く。まあ……溺れる者は糞をも掴む、と言つから、

助けようとすれば其相応の危険も伴うわけだが。そう考えれば……溺れる者をすべて見捨てるという答えもありだな」

さも当然とばかりに、口元に笑みを浮かべた。

「そ、そうだ！ それに、ボートで救助する状況が曖昧だ！ 溺れている人間の体型とか、性別とか、判然としていないぞ！」

佐藤君がこれ見よがしに、睦月さんの揚げ足をとろろとする。佐藤君にすれば、睦月さんの、凶星を突かれた、という苦い表情を見たかつたにちがいない。

「痛いところを突いてくるわ」

佐藤君の頬の筋肉が、満足そうに動く。しかし、言葉とは裏腹に、睦月さんは痛みどころか、かゆみすら感じていないうだ。

「……って、聞きたかったようだけど、一度死んだ方がいいわね。馬鹿は一度死ななきや治らないし。まして、一度あることは三度ある。念のために、三回死んだ方がいいんじゃない？」

佐藤君の意氣が、簡単に崩れ始める。

「そんな屁理屈は、どこかの某匿名掲示板にでも書き込めば？ ま、アンタならすでにやつてそうだけじ。荒らしとか得意そうだし」

抵抗する人間は、容赦なく叩き潰す。

「力では対抗できない軟弱な人間の末路ね。社会的には弱者のまま」

「元膚無きまで。」

「話がそれだけど、彼氏はビツなの？」

呪詛を唱える佐藤君を無視して、陸川さんは和輝君に問いかける。

「俺は彼氏じゃない」

「悪かつたわね、それじゃ、ナイト」

「……」

私の背中を支えてくれる和輝君が無言を貫く。
相手をするだけ無駄だと感じたのだろうか。

「そつか、聞くまでもなかつたのを忘れてたわ」

私に近づいてきたかと思つと、片膝を着いて顔と顔をつきあわせる。

鼻回士が今にもぶつかりそうなくらい。

睦月さんの長い漆黒の髪が揺れると、今まで気がつけていたの無かつた芳香が私の周囲を覆い始める。

女らしく上品でありながら、雨上がりの午後のよつな爽やかな香り。

「ナイトのしたことは、正しーのよ」

漂つ香つはこれほどまでに優しこの二、突きつけられた葉には、
一歩の優しさもない。

「放送機材を抜けて、あの女を助ける……素晴らしいこの友情

ね。聞いてるだけで涙が出るわ。でも、その後はビツビツする奴?「

睦月さんの香りは、そのまま彼女のテリトリーであるかのよう。壁際に追い詰められたネズミは、自分の不運を呪うしかない。配役を考える必要がないくらい、私はネズミ!そのものだった。鋭すぎる視線で射抜かれて、声も出ない。

「あのタイミングでもう一度ドアを閉めて、さらに放送機材を積み上げる時間があった?」

満員のボートの上に私はいた。

その下で加藤さんが溺れていた。

加藤さんが無我夢中で伸ばした手を、私は。

「答えは、ノーよ」

私はそばに落ちていた松葉杖を素早くつかんで、睦月さんに振り下ろしていた。

右足の痛みはすぐに私を襲つたけれど、後悔はしていなかつた。怒りに身を任せることだが、心地よいとすら思えたから。

「分かつていいようだから、もう一度言つわ

私が振り下ろした松葉杖をいとも簡単に受け止めて、さりに顔を突きつけてくる。

ネズミは、どんなにあがいても、ネズミ!でしかなかつた。

「私たちが助かるためには、あの女を見捨てるしかないのよ

私に突きつけてくる眼光は、まるで死神の鎌。

「それ以外に選択肢はないわ。ボートの例もそう。余った一人を見殺しにするのが正しい選択よ。それが人間だもの。見捨てることで罪悪感にさいなまれるのは、少しだけ分かる気がするわ。でも、アンタは言い訳できるわよね？ ナイトと違つて」

ちらりと和輝君を見る。

「私は助けようとしました。でも、周りがそんな私を拘束して、助けられないようにしました」

鳥肌が立つくらいの猫なで声。
聞いているだけで腹部が煮えたぎつてくる。

「だから、私は助けたくて、助けられなかつたんです。私は悪くないんです」

一オクターブ高い睦月さんの声は、私の声真似なのだろうか。
語尾を上げる抑揚。それでいて男にこびを売るような。
温厚なはずの私にも、生まれて初めて堪忍袋があることを知つた。

「……でも」

突如、睦月さんの表情が、声とともに一変する。

「ナイトは違う。ナイトは、名前を呼ばれてしまった。因縁を作ってしまったのよ」

和輝君は、加藤さんに存在を確認されたときに、しまった、という顔をした。

あの顔の訳。

「命の危険が迫れば、人は常軌を簡単に逸する。見苦しいことだつて平氣でする。なんでもするから助けて。そういう奴を助けても、そいつは何でもなんてしないわ。助かるためなら、嘘でも平氣で言う。使える手段は何でも使う。そう 」

松葉杖を受け止めた手に、握力が込められるのが分かつた。
それは睦月さんの言葉に熱がこもつている証拠だった。

「すがれるものなら、どんな人間だろうとすがるのよ。罪悪感を作れるだけ作つて、自分を助けて欲しい状況を作らせる

松葉杖を握りつぶさんばかりの握力は、彼女のどこから出でてくるのだろう。

少なくとも突発的ではない気がする。
太古から心の奥に寄生し続けているような、そんな過去の記憶に根ざしているように思えた。

「……あの女もそれが手だったのかも」

「違う！ 加藤さんは違う！」

突発的だったのは私の方だった。

……一方で、その突発性が私を少しだけ安堵させた。

少しでも思考してしまつたら。迷つてしまつたら。即答できなかつたら。

それは、少なからず加藤さんを疑つてしまつたことになる。
信じていないとこになつてしまふ。

「言つておくれけど、一番つらいのは、アンタじゃない」

私の思考を呼び戻すように、詰め寄つてくる。

「一番つらいのは、名前を呼ばれたナイトなのよ。アンタは助けを
求められなかつただけ幸せ。見捨てたことはならないもの。ただ、
見てた、だけ」

屁理屈だと言つてやりたかった。

けれど、彼女の言つことは、なぜかすんなりと頭の中に入つてく
る。

それどころか、私がんじがらめにしようとする黒い液体に、力
を与えられた。

「でも、ナイトは違う。助けて、そう言つて伸ばされた手を振り払
つた。因縁を作つてしまつたナイトは、見てるだけではなくて、見
捨てなければならなくなつた。もちろん、それは呼びかけに答えた
ナイトの落ち度だけど、名前を呼ばれたからには、罪を犯さなくて
はならなくなつたのよ」

助力を得た黒い液体が、私の血に混ざり、私自身を黒くしていく。暗鬱とした気分が、私の思考を黒くしていく。

「……もういい」

背中を支えてくれる和輝君の、押し隠すよつた声も聞こえないほどに。

「力もない。案もない。それだけならまだしも」

睦月さんも聞こえなかつたのだろう。いつそう凄みを増した炯眼で、私の脆弱な心を射る。

「出来もしないのに、そつやつて良い人ぶるの止めてくれる？ 何にも分かつてないくせに」

ああ……彼女は知つていて。

私が優等生であると。

口から出る言葉と、心の奥に秘めたものが、少なからず異なつていることを。

同様に、笑顔の裏にあるものや、優しさの裏にあるものも。

「虫酸が走るのよ。いかにも正しいことをしています。正しいんで
す、つて顔して、被害者面……」

痛みは、鈍痛へ。

骨折した右足よりも激しい。

打ち身……違う。もつと胸の奥。

鈍痛は、激痛へ。

心臓……違う。もつともつと胸の奥。

「被害者は扉の外で死んでる女、ただ一人なのよ。残りは加害者で
しかないわ」

……そう、これは、私の心が傷ついている痛み。

友人を助けようとして、実は助けることができないと知っていた。

右足が不自由な私に、あのとき何ができるのか。

たとえ、加藤さんの呼びかけに答えたとしても、私一人では積み

上げられた放送機器を取り除くこともできない。

仮に、取り除くことができて、扉を開けたとする。

でも、その後は？

足手まといである私が、加藤さんを救うなんてできただろうか。伸ばされた手を取ることができただろうか。

加藤さんのように襲われ、辱められ、なぶり殺しにされるかも知れないと考えただけで、私は身が震える思いだというの。」

私が加藤さんの立場じゃなくて良かった。

心の奥で、黒い液体が渦巻いた。

白くて、きらきらしていたはずの心の奥が、汚されていく。

正田君じゃなくて良かった。

いや、違う。

白いと思っていたはずの心は、遙か昔にすでに汚れていて、輝いていたはずの心も、同じく光を失っていたのではないか。

まだ清いままだと、自分勝手に思いこんでいただけではないのか。見よづとななかつただけではないのか。

「私は……私は……」

松葉杖を取り落として、私は自分の手のひらを見つめた。暗闇も手伝つてか、両手はうすらと黒い。がたがたと震え、病人のよ。

「加藤さんを助けられないと理解していく……でも、助ける振りだけしたくて……それで……」「

袖の隙間から、黒い触手のよつなものが飛び出してくる。それはムカデのよつに無数の足を持ち、ゴキブリのよつに長い触覚を揺らし、蜘蛛のよつに鋭い手を持つている漆黒の影。べたべたと這い回り、蠢き、私の手を黒で埋めぬくす。まるで、血塗られたよ。

「……みんなが私を引き留めてくれて……口をふさごでくれて、良かつたつて……止めてくれなかつたらどうしようか……そう思つて……！」

私の手が黒く染まつていぐ。

心の奥にある真っ白な家は、廃墟のよつに真っ黒だ。

その中には倒れている真っ白な私がいて、そばで見下ろしている

黒ずんだ私もいる。

黒い手にはナイフが握られていて、返り血を浴びている。

白い私が呼吸を失つていくのが分かつた。

落ちたガラス細工のように、心が壊れしていくのが分かつた。

「私は自分が好きだから……みんなに悪い子だつて思つて欲しくなくて……」

黒い私は、見ている私に気がついたのか、ナイフを振り上げたまま近づいてくる。舌なめずりしながら、面白がるよつに獲物である私に焦点を合わせる。

「嫌われたくないで……助けようとしたふりでも見せねばって……」

黒い私が、ナイフの柄に力を入れた。
きらりと光ったナイフの切っ先には、すでに乾き始めた血の紅。
狂氣に頬を歪めながら、私の目の前へ。

……問答無用。

黒い私がナイフを横様に振り抜いた。

「水野さん！ もういいんだ！」

ナイフの切つ先は、私の首筋をかすめていった。

「俺が加藤を見殺しにしたんだ！ 水野さんは悪くない。悪いのは俺だ。俺が殺したんだ！」

和輝君が私を後ろから抱きしめる。

「俺は知ってる。今言ったことは、水野さんが考えるようなことじゃない。暗い気持ちにとらわれたら駄目だ。そんな気持ちに負けちゃ駄目だ！ 水野さんは水野さんの意志で、優しい心で、加藤さんを助けようとしたんだ」

力強く、それでいて、深く。

「 とつとに出た優しさは、打算なんかじゃない！」

白い私が、力を振り絞つて立ち上がる。腹部から血を流しながらも、黒い私に歩み寄っていく。

「水野さん……水野さんの優しさは嘘なんかじゃない」

白い私に抱きしめられた黒い私は、まるで灰にでもなったように空に立ち上つて消えた。

「きつと正臣も、分かつてくれる」

その言葉が最後だつた。

大好きな彼の笑顔が私の心に広がつたかと思うと、温かく清らかな液体が心臓から送り出される。

水を得た魚のように駆けめぐつたそれは、黒い液体をあつと/or>間に洗い流した。

「だから、そんなこと言つもんじやない」

排出は、涙腺から。

ため込んだものが流れていく。

黒く染まつていた心の家が、少しだけ白さを取り戻す。

人は生まれながらにして善、と孟子は言った。
人は生まれながらにして悪、と荀子は言った。

汚れしていくのか、それとも、綺麗にしていくのか。

私はどちらなのだろう。

でも私はどちらともあつて欲しかった。

たとえ汚れしていくと知つても、人は償うことができる。

償うこと、汚れをぬぐうことができる。

そう思いたいから。

たとえ、真っ白にはなれないとしても。

私は白くなりたい。

「言ひちゃ駄目なんだ、水野さんだけは……」

その始まりの涙が、私の握りしめた両手を濡らしていく。

第A・10話・白と黒（後書き）

興味を持つてくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
アクションがないですね……。いつになつたら、アクション部分までたどり着けるのでしょうか……。これは、ライトノベルなんです。誰がなんと言おうと、娯楽アクションのつもりなんです。そんな作者の自己満足でした。

今回の執筆につき、ローリング・ストーンズの「P a i n t i t b l a c k（邦題「黒くぬれ」）」を聞いていました。そのせいが、思いつきり黒だと白だと比喩的に使つてしましました。歌詞は関係ないんですけどね……。

影響されやすいのは駄目ですね、反省です。
長々と申し訳ありません。

評価、感想、栄養になります。

第A・最終話・彼女が見つけた結晶

真夜中に蛇口から落ちたった一滴の露。
蛇口の先につらりのよひるつと水がたまつていつて、やがて……人知れず落ちる。

涙のよう、一滴、ぽとり。

無人のキッチンに響くその清澄な音は、長い時間をかけて溜まつていつた無為なものなのに、なぜか胸が締め付けられるように寂しく心に響いた。

真夜中に目が覚め、窓から差し込む白刃のような月光が、キッチンに差し込んでいる。

恐ろしいほど静寂と、張り詰めた空気。

不意に私はそれが不気味に思えてならなくなる。

寒くもないのに身震いしたかと思うと、急に不安に襲われた。私はしっかりと蛇口を閉めて、水漏れのないようにする。

それは、私の心と一緒にだから。

確たる自分を持つて、きつちりと閉じておかないと。
だから、すぐに揺らぐ。すぐに、染み出す。

長い時間かけて一滴は落ち続け、気が付けば大河になっていた。
大河になれば、もう止めようがない。

心も、涙も。

私がこぼした涙はまさにそれで、最後の一滴は、時間が止まったかのようにゆっくりと落下し、和輝君の袖に染みこんでいった。

「格好いいわね、さすがナイト」

私が放棄していた松葉杖を、和輝君に突きつける。

「女の扱い方も、心得てるのね」

和輝君は、心底忌々しそうに睦月さんを見上げた。

「俺には、守りたいものがある」

松葉杖をつかむ。しかし、睦月さんは離さない。
二人の間に、意志の火花が垣間見えた気がした。
お互いに譲ろうとしない視線での戦いは、和輝君の先制攻撃で幕を開ける。

「それを守るために、どんな犠牲だって厭わない。たとえ世界中
が敵になつても、世界を犠牲にしても、俺には守りたい大切なもの
がある」

松葉杖を握りしめあつ膠着状態。

「そのためなら……もし、そのときがくれば……俺は迷わず」の場にいる全員を見殺しに出来る」

周囲の飽和した空気が動き出す。

生徒会長は興味深そうに頷きながらメガネをなおし、佐藤君は和輝君の言葉に少なからず動搖していた。睦月さんは、均衡していた松葉杖の競り合いをあっさりと止めて、立ち上がる。

「……アンタ、和輝つて言つたわよね」

私は真っ赤に晴れ上がってしまっただらう田をこすり、一人を見比べた。

お決まりのポーズなのか、鷹揚に腕を組み、和輝君と再び視線を重ねる。

重ねると言つても、恋人のように甘い視線の絡み合いではない。かといって、剣戟のように火花散るものでもなく。

「そういうの、嫌いじゃないわ」

まるで握手でもするかのような、敵同士、健闘を誓いつゝ行為にも思えた。

もちろん、馴れ合いなどは微塵も存在しない。

「私も似たようなものだし。他人を助ける義理なんて、もうのもあげるのも嫌。ま、そんな私でも、売られた喧嘩は高く買つけど。もちろん、格安で売つてあげてもいいわ」

鼻で笑う。

「勝手にしてくれ」

「ええ、言われなくとも勝手にこなせばいいわ」

組んでいた右手を軽く振つて、和輝君を見下した。

「……水野さん」

私は腫れぼつたい目をぱちくりとせじ、後ろから抱きしめてくれた和輝君を見上げた。膝をついて座り込んだ私を労つて、背中を支えてくれている。

抱きしめてくれた、と一言で言つても、女らしい部分には直接触れよつとはせず、そこを避ける形で抱きしめてくれていた。

「和輝君？」

右手は私の首元から回すように、左手は腹部を回すように。私が正臣君を好きだと知つているからなのか、じたばたであつても無遠慮なことはしない。

私が自分を見失いかけたときでも、和輝君は慌てずに、そこまで頭を回転させていたのだ。

逆に言えば、その冷静さ、思慮深さが、和輝君の聖域内に私がいることを隠すのに役立つ。

そして、その証から導き出される結論は、先ほど和輝君が宣言したとおり。

この場にいる全員を見殺しにする準備が出来ている、ということ。

流れ落ちたはずの汚れ。

白い家に、未だわずかな黒ずみが残る。

「今はそのときじゃない。だから、それまでは……」

無理しないで。

そう言つてしまひたかつた。言つてあげたかつた。
けれど、足手まといの私には、自分一人で出来ることなど極端に限られていた。

和輝君の手を借りずに、大好きな人には会える可能性はゼロに近くで。

私は、本当にずるい人間。

和輝君の優しさからくる責任感や罪悪感に、みつともなくすがりつくしかない情けない人間。

分かっていて、おんぶにだっこをしてもらつしかない弱い人間。

甘えていいと、和輝君は言つてくれた。

だから、甘えてもいい。

甘えてもいいんだ。

そのためには、右足が骨折していることを悲しげな顔で訴えて。大丈夫だよと、あえて強がりを言つて。時々、わざと口に出して痛んで見せて。弱者であることを、庇護してもらひつゝとを当たり前のようにならかなければならぬ。

弱い人間には、弱い人間なりの処世術がある。

図書室で中山さんも言つてくれたように、私は確かに可愛い。かも知れない、なんて世間體を氣にした言い回しはしない。

私は可愛い。

鏡を見て、時々、可愛い顔で良かつたな、と微笑んでいる醜い自分がいるから。

口では、可愛くなんかない、と遠慮してみせるが、自分が可愛いことぐらい誰よりも自分自身が知つていて。

男子の態度を見れば一発で分かる。ある種の、バロメーター。クラスメイトの男子が、すぐにでも駆け寄ってきて、助けてくれることに優越感を抱いたりもした。そうでない女の子が確かにいる

ことに優越感を抱いたりもした。そうでない女の子が確かにいる

から。

比較すると、余計に分かる。

そう……弱くても、私は可憐いから、優等生でみんなに優しくしてきたから。

誰かが必ず助けてくれる。恩を返してくれる。

たとえ下心があつたとしても、誰かを味方に出来る。

出来ないよりは、出来る方が何倍も心地いい。

弱者は、群れないと生きていけないから。

誰もが、睦月さんのように孤高でいられないから。

「……和輝君、ごめんね」

情けは人の為ならず。

私は、私のために誰かに優しくしているんだ。次に助けてもらうために。

私が助けた人に、罪悪感と、後ろめたさを植え付けるために。

ぬるま湯につかるような心地よさを持った集団、馴れ合いの集団を作るために。

それが弱者の生き方。弱者なりの生き方。

私の生きる術。

「もういい。もういいんだよ……」

私。そんな私。

自分が好きで、どこかで他人を見下してもいて、打算的で、和輝君が言うほどの優しさもない私。

それを必死になつて隠し続けて、優等生を演じてきた私。

みんなに、大好きな人にはかれようと、必死になつていていた私。寂しさに殺されないように躍起になつていていた私。

こんな私でも、和輝君はそのときまで守ってくれるという。私は領域の外側にいるのに。

「ありがとう……ありがとう、和輝君……」

和輝君のたくましい腕を通して、彼の守りつとする意志が、ぬくもりとなつて伝わってくる。

かけがえのない、あるイメージを伴つて。

「私……今すぐに正臣君に会いたい」

自然にこぼれだしていた。

「……うん、俺も正臣君に会いたい」

和輝君の腕が震えた。

「正臣君に会つたら、こんな気持ちもなくなるのかな……？」

正臣、という確たる名前を出したことで、和輝君の力がほどけていくのが分かつた。

今なら、和輝君の心の内側に入つていけそうな気がした。鎧を脱いだ生身の心は、それこそ傷つきやすい鏡面体。

人間なら誰しもそうであるように、和輝君も支えられなければ生きていけない脆弱な部分がある。

手を伸ばせば触れられるような気がした。

入り込んでしまえば、和輝君は最後まで力になってくれるかも知れない。

「ああ……きっと無くなる。あいつなら、すべてを許してくれる。
一緒に悩んで、傷ついて、最後には特大の笑顔をくれる」

でも、それだけは出来なかつた。してはいけないと思つた。
和輝君の声は、切に正臣君を求めていて、私の心にも響いてくる。
これほどまでにずる賢く、打算的で、薄汚れている私でも、一つ
だけ純粹な、真っ白な気持ちがあるから。

嘘偽りのない想いがあるから。

だから、彼の聖域に踏み込んではいけない。

「分かるよ……和輝君の気持ち」

正臣君が、恋しい。

「欠点も多い奴だけど、その欠点を補つて余りある優しさを持つた
奴だから」

焦るとすぐに失敗して、慌てて謝つて、でも最後には笑顔で終わ
る。

「鈍感だけどね」「……補つてくれるわ」

何だか、心が温かい。

「だといいな」

素肌を通して染みこんでくる郷愁。

ぽかぽかして、太陽の下にいる感覚。忘れていたノスタルジー。幼い頃、畳の上でお腹を出して寝てしまつて。

そんな私に、やつと毛布をかぶせてくれた優しさ。

薄田をあけると、そこには正座した母がいて、幸せそうな丸い顔があつて。私を起こさないよう気遣いながら、ゆつくつと薄い毛布を掛けてくれる。

じぱらく微笑みながら、愛しそうに、本当に愛しそうに私を見下ろしていた。

そこには、血口愛も、ずる賢とも、打算もない。

あるのは純白の想い。

ただの、愛情。けれど、この世で唯一の汚れなき心。

ずっと、忘れていた。

……いつぞ、思い出せなかつただけ。

生きることの難しさに、埋もれてしまつていただけ。

友人間のしがらみや、醜聞や、体裁、心の探り合い、騙し合ひ…

…そんな細かいテクニックに忙しく時間を費やしていくせいで、考えることさえなくなつていた。

思い出せば、いつももあった。思い出せなくとも、心の中で息づいていた。

たつた一つ、誰にも譲れない、純真無垢な私自身。

うまく言葉で言い表すことが出来ないけれど、私はそれを、正臣

君に伝えたい。

伝えたくて、知つて欲しくて仕方がない。

「正臣君のために」

「正臣のために?」

私は背中を向けていた和輝君に向き直る。

「私は生きるよ」

和輝君はそつと微笑んでくれる。

「私達は……に訂正してくれるか?」
「え……」

私が疑問符を浮かべる間もなく、和輝君は言葉を紡いだ。

「正臣のために」

私はすぐに気付いて呼応する。

「正臣君のために」

一人の共通の想いを誓い合いつ。

「俺達は生きよう」

「……うん」

私が頷くのと時を同じくして、和輝君が勢いよく立ち上がった。

「あ……」

「どうしたの、和輝君？」

「黙つて！」

自分の口元に人差し指を持つてくる、沈黙のジェスチャー。

私と和輝君のやりとりをつまらなそうに傍観していた他の三人も、それぞれの反応を見せる。

睦月さんは、皮肉ろうとした言葉をいらだたしげに飲み込み、生徒会長は、直したメガネが再びずり落ちていた。

佐藤君に至っては、二度、両肩びくりと跳ね上がらせ、尻餅すらついていた。

そんな三人とは対照的に、和輝君は細心の注意を払いながら耳をすませる。

「……聞こえた」

道の先に待つのは、生か、死か。

外側から施錠された扉を見、和輝君が静かに審判を下す。

「……今、あいつの声が聞こえた」

幽靈にでも取り憑かれたように、扉から身を離す和輝君。

「ちよっと、どうする気?」

取り憑かれたと言つても、その姿はまるで東大寺法華堂に飾られた金剛力士像のよう。

今まで失つてきた何かを帳消しにするような起死回生の姿。和輝君にだけ聞こえた声は、よほどのものなのだろう。

「引いて駄目なら、押してみる。押して駄目なら」

自らの身を省みないで、和輝君が加速した。

「……ぶち破るだけだ!」

扉から十分に距離をとると、低い体制で、弾丸のよう飛び出す。一步、二歩、三歩。

それは、自動車で言うところのギアチェンジ。

一速、二速、三速。

爆発的な燃料を搭載したまま、急加速を経て、和輝君はドアを突き破った。

「正臣! 香奈!」

真っ暗闇だつた放送機器が詰められた部屋に、満を持って外光が差し込む。

私はあまりのまぶしさに眼をつぶるしかない。

……まぶたの上にかざした手の向こうで、和輝君の歓声が聞こえた気がした。

「え？ 人間？ 人間なの？」

「睦月、早く行け！ 邪魔だ！」

「早く、ど、どいて！」

なだれ込むように外に転がり出る三人の背中。光をうまく制御しつつある私の瞳孔は、よつやく失われた景色を取り戻す作業に入る。

「佐藤君、大丈夫です。まだ十分もちますから、あわてないで」

足下に転がっていた松葉杖を何とか拾い上げ、私は転びそうになる佐藤君に続いて外へ。

長いようにも、短いようにも思えた悪夢からの解放。

暗闇からの脱出は、一時的な解決に過ぎないのだと分かつていても、私は胸を撫で下ろさずにはいられなかつた。

白く靄がかつた景色が、日常を取り戻す。

体育館の外は、入場したときと何も変わらない。

学校が崩壊したわけでもなければ、血みどろの戦争があるわけでも、世界が荒廃しているわけでもない。

外界には悪夢など無く、すすめが木の上で楽しげに鳴いていて、太陽光がさんさんと降り注いでいる。心地よい風が私の首元をなぞっていくと、木製の体育館らしい木の匂いから、学校を囲むみずみずしい新緑の香りに変化した。

まるで悪夢が嘘のよつに。

すずめが飛び、風が髪を揺らし、太陽の暖かさを感じ、愛しき人の姿を目に宿す。

夢にまで見た姿は、当たり前のように列挙した中についた。

枯れたはずの目から、熱いものが流れ出るような感覚。

当たり前なのに。

全てが当たり前のはずなのに。

でも、今となつてはすぐ愛しく、待ち望んでいた当たり前がそこにある。

少し長い髪が微風と遊べば、寝癖らしき跳ねつ返りは逆うつひうつに揺れる。

きつと寝坊したに違いない。

寝癖のせいではつきりと見える福耳は、今日も今日とて健在。氣だるそうなまぶたが、優しい瞳を隠そうと重くのしかかる。

今にもあぐびが飛び出しそうな口元は、扉にうつぶせになる和輝君のせいだ、開け放しだ。

少だけ笑つてしまいそうになる。

これが日常。ずっと、私が欲しかった日常。

苦しみが、悲しみが、醜い自分の黒ずみが吹き飛んでいく。
けれど、その隣で微笑む小柄な少女を見つけてしまう。少女の瞳が、漆黒よりも深い闇変わつた気がした。

目が合えば、相変わらず微笑む少女の静かな佇まいは、触れるまで認識出来ない、まるで静電気のような雰囲気をまとっていた。
しかし、私はそんな些細なことよりも、今は再会の感動を味わいたかった。

「あ、正臣君に、香奈さん、無事だったんですね！ よかつた……」

一瞬、和輝君と目が合つ。

彼の目には、正臣君に対する慈愛と、過保護にすら思える思いやりが混同していた。きつと、加藤さんのことを見つめているのだと、私は直感した。

知らないことが幸せ。

もし、その選択肢の後に、知ることの不幸が加われば、人は必ず後者を選ぶ。

和輝君の目は、選択肢にすら上らないことを以心伝心させていた。二人共通する正臣君への想いが、そうさせたのかもしれなかつた。

正臣君のために私は生きる。

過去からの声が聞こえ、不意に私は見つけた。

「和輝、それよりも何やつてるんだ？ 僕、今日は学校ないようだから、これから帰ろうとしていたところだぞ」

和輝君は正臣君のあまりの間の抜けた問いかけに我を忘れている。

「学校なんてどうでもいいー。」

それは、突然。本当に突然に、私の心に去來した。
私は心中で繰り返す。
思い出せば、いつでもあった。思い出をなくとも、心の中で息づいていた。

たつた一つ、誰にも譲れない、純真無垢な私自身。
私は心中で繰り返す。
繰り返して、欠片を拾い集めて。
たつた一つの言葉に結晶する。

「今はとにかく」

正臣君に伝えたい。見せてあげたい。
自分でも綺麗に、上手に出来たから。

そうか、これがそうなんだ。

生まれて初めて分かつたよ。

これが。

この結晶が

愛、なんだね。

第A・最終話・彼女が見つけた結晶（後書き）

興味を持つてくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

このような経緯を経て、彼らは正臣という人間と出会い、あるいは、再会したのでした。少々後付感は否めませんが、実際に後付なので仕方がありませんね。元々、こういった番外編を書くことは想定していましたので……。

さて、次回からはまた別の視点、時間でお送りします。今度は一体誰になることやら……

評価、感想、栄養になります。

第B・1話・翼（前書き）

新しい「アナザーストーリー」です。前回を引き継ぐわけではありませんので、注意ください。

翼を失つた鳥は、大地に落ちて一体何をなすのだろう。

大空を自由に飛び回り、飛ぶことの出来ない他者を悠々と見下ろしていたときには、ついぞ抱くことの無かつた思考。

両翼を広げ、風に乗り、誰よりも高く、早く飛ぶことの出来た者が大地に落ちたとき、彼の者は一体何を糧として生きるのだろう。飛び立てず、大空を見上げ、過ぎた夢を見るだけだろうか。過去に思いをはせるだけだろうか。

傷ついた翼はただの足かせに過ぎない。

翼をいやすこともままならない今、大地をはいざり回るしかないのだろうか。

「……先輩」

私は傍らで眠る先輩の額をタオルで拭う。

先輩の長い髪の毛が、苦しそうに寝返りを打つ度、真っ白な額に執拗に張り付く。私がそれを丁寧に取り除いてあげると、再び先輩の苦痛に歪む美顔を見ることが出来た。

「苦しいんですね」

こんなにも美しく、此の世に永劫称えられるべき芸術品である先

輩が、どうして苦しまなければいけないのか。

考えるだけで、やるせない思いに支配されていく。

「どうすれば、先輩を救うことが出来ますか？ 痛みを取り除いてあげることが出来ますか？」

先輩の耳元でしゃべりこみ。いつものも睡眠学習とこいつのだらうか。

「もしも、取り除くことが私に出来たなら、先輩は私を心の中に加えてくれますか？」

先輩がどうして苦しみ、どうして私の前で泣いたのか。

「加えていただけたら、私はきっと欲張りになってしまつ」

涙を流す姿など、誰にも見せたことなどないのに。

「先輩、私はきっと先輩の全てが欲しいんですね」

圧倒的な強者である先輩が、私に対して弱みを見せてくれたことはとても嬉しかった。

心の奥が締め付けられるような愛しさに襲われ、その場で卒倒してしまいそうだった。

でも、そくななかつたのは、先輩の弱さを知つてしまつたという、幻滅の心もあつたから。

幻想が壊れ、裸の先輩を見ることへの嬉しさと、自分が思つていた以上に幻想にすがつっていた私の搖らぎ。

「ねえ、先輩……？」

幻想か、それとも、真実か。

そのせめぎ合いの中で生まれたのは、私がかつて持ち得ていた愛しさを上回る、狂おしい感情の本流。異常とも思える感情だった。

「もし先輩が私のものになつて、私に表情の全てをくださるのなら、心の全てを、体の全てをくださるのなら……」

想像しただけで心臓が高鳴り、真っ赤な溶岩が私の心を埋め尽くす。

他の感情を全て溶かし、灼熱で上書きしていくどうじとした流れ。

何物をも溶かす絶対的な熱量を持つた心。

「……いいえ、違つ。先輩は誰のものにもならない。孤高で、絶世で、それでいて誰よりも美しい輝きを持った人だから、きっと誰も先輩を手にすることなんか出来ない。でも、ならせめて……」

先輩の唇が開かれ、苦しそうに呼吸をする様は、嗜虐心を刺激させられる。

苦しむ姿でさえ艶やか。

細い眉の根元に刻まれるしわも、歪む頬の筋肉も、鎖骨に流れ込む汗の水滴も。

その全てが欲情をかき立てる。

「先輩の……睦月先輩の心のそばに、私を置いてください」

先輩が苦しそうにうめいた。

汗はいつの間にか噴き出していて、私は慌ててそれを拭う。

閉め切られたカーテンから差し込む月の光が、先輩のまぶたを切り裂いた。どうやら、覆われていた月が、雲の中から逃げ出したらしい。

私は先輩の眠りを妨げてはと、静かにカーテンを閉める。

右手に持った、先輩の汗を吸収してぐつしょりと濡れたタオル。鼻元に持っていくと、女らしい香りの中に、わずかに野性的な香りが混じっているように感じられた。フレグラスの内側に隠された先輩自身の香り。

名残惜しく思う自分を封印して、新しいものと交換しようと先輩に背中を向ける。

「……真由？」

「先輩、目が覚めたのですか？」

「ええ、そうみたいね。ひどく気分が悪いわ」

忌々しそうに歯を食いしばる先輩。

「何かお食べになりますか？」

「いらないわ、何も」

「では、飲み物は……？」

「いらないって言つてるじゃない」

口調が強くなるのが分かつたから、私は静かに引き下がる。

「……申し訳ありません」

深く頭を垂れて、先輩の汗がしみたタオルを握りしめる。

「真由」

「はい」

謝罪に曲げた腰を真っ直ぐに戻すと、先輩の顔は陰を減らしていった。

「ハツ当たりだから気にしないで。水が飲みたいわ」

「すぐにお持ちしますね」

タオルを握りしめた握力をゆるめ、私は小走りにキッチンへ向かう。

心が晴れていくのが足取りで分かった。

ハツ当たりされれば誰でもむつとするはずなのに、私はそれが嬉しかった。鼻歌が飛び出しそうなくらい。

単純な思考だと人は馬鹿にするかもしないけれど、きっと私のように思い入れが強ければ強いほど、簡単に揺れ動いてしまうのだと思う。

まるでショックを吸収するバネが私と先輩を隔てているよう。衝撃を与える者に近づけば近づくほど、バネは縮んでしまい、吸収する余力を失ってしまう。結果、私は直接衝撃を受け、揺れ動く。

思い入れが強い私を例えればそう。

でも、もし思い入れが強くなれば、距離は離れているのだから

バネは衝撃を吸収する余地を多大に持つことになる。

その分、衝撃を簡単に吸収し、結果私も揺れ動くことはない。

風変わりなたとえかもしけないけれど、心躍る今の私には十分適合するたとえだと思つた。

そんな発想を胸に秘めながら、綺麗に磨かれたコップに氷を一個投下し、冷蔵庫に買いだめしているミネラルウォーターを注いでいく。

「先輩、お持ちしました」

「ありがと」

コップを受け取ると、元気よくのどを動かして一気に飲み干した。のど元があらわになり、カーテンから透ける月光を浴びて淡く光る。

余った氷のうち一つを指でつまみ、口の中に入れる。濡れた指の先を軽く口に含んで水分を拭う様は、妖艶さすら感じられて、あまりにも絵になりすぎている。

月光に光る唇の隙間から指を抜き出したとき、先輩の瞳が私をとらえた。

「私がそんなに可笑しい?」

「違います! 瞳月先輩が……あ、あまりにも綺麗なものですから

……」

「知ってるわ。腐るほど言われてきたから

呆れたようにため息をついて、乱れた髪を手で整えていく。

「申し訳ありません。でも……」

両手に力が加わる。

「そんな睦月先輩が、どうして苦しまなければならぬのですか？」

私の問いに答えるための熟考なのか、それとも単に答えるのが面倒なためなのか、先輩は自らの汗で濡れたベッドから立ち上がり、カーテンを開くまで、言葉を発することはなかつた。純白の月光が先輩を包み込む。

「真由……確かに言つたわよね。昔好きだった人がいたって」

「……言つました」

光を背負いながら、先輩が自分を抱く。自嘲するように口を笑みの形に曲げると、ちょうど背負つ月の形に似てこじこじに気がつく。美しき一つの月はなおも輝き続けようとするが、やがてどちらも雲に隠れてしまつ。

「 私にもいたわ

「聞きたくありません」

即答していた。

反応したのは脳ではない。脊髄が反射的に返答していくよつだつ

た。文字通り骨の髓まで、私の感情が染みこんでいるに違いない。
だからこそ、これほどまでに即座に答えることが出来たのだろう。

「いたのよ。たつた一人だけ」

小さな雲を払いのけ、月が再び顔を出す。

つぶやいた先輩が窓を開けて外気を取り入れた。

月からの使者を思わせる外気は、そつと先輩に寄り添い、汗で濡れた長い髪と遊び始める。

右に揺らし、左に揺らし。

まるで、つかの間のチークダンスを踊つてゐるようだった。

「先輩、止めてください」

幻想的な光景には無粋な私の声。

「好き……違うわね、愛していたわ」

過去形でつづられた言葉だとしても、終わっているのだとしても。
先輩の口から紡がれる、愛、という言葉に、私は体をかきむしり
たくなる。

「睦月先輩！」

先輩がそこまで心を許してしまえる、傾けてしまえる人間が存在
していることが悔しかつた。

一度耳に入り込んだその言葉は、もつれりと私の心からは出て行つてくれない。

「愛していろと、初めて口に出したわ。手で、体で、心で、結びついた。何度も……それこそ、すり切れるくらい。痛むくらい……確かめ合つた」

海馬が、シナップスが、四方から鎮でつなぎ止めて、一生記憶の牢獄に閉じこめておくに違いない。先輩の一言一句を。そして、私は忘れることが出来ずに、ずっと苦しみ続ける。

先輩には、愛を注いだ者が存在していたという事実に。

「……でも、違つた。理解したのよ」

開け放つた窓から、先輩が手をのばす。自分の手を丹にかざし、手のひらを眺める。

表、裏。

手のひら、手の甲。

「ぬくもりを抱いた日々はもう終わり。そして、新しく始める……過去の私に戻つて、そこから始める」

丹を握りつぶし、私に向き直る。

帰る場所を無くした 自ら退路を断つた かぐや姫は、不敵な笑みを浮かべながら、冷徹なまでの意志で私に問う。

「真由……アンタはどうするの?..」

決まつている。改めて自問自答などしなくとも。

「私は睦月先輩のおそばにいます。こたせてください、最後まで」

窓のそばにたたずむ先輩の足下で膝をつき、ゆっくりと抱きしめる。

先輩の腰は高く、膝をついて抱きしめても顔は腹部には届かない。それでも私は先輩の臀部の綺麗な形を感じ、太もものなめらかさを感じた。

「本当に馬鹿な子」

かしづく私の頭に先輩は手を置いてくれた。

「はい、私は本当に馬鹿な子です」

馬鹿でも構わない。愚か者でも構わない。

異常者とののしられても、常軌を逸しているときがすまれても。

「大馬鹿」

「はい……」

それでも先輩のそばにいたい。

彼女の右腕の代わりになりたい。右足の代わりになりたいと思える。

「馬鹿

「はー……」

私の頭に置かれた手は、撫でてくれるためにそこにあるのではない。慰め合つために触れるのではない。優しさを『えないと明言しているから、撫でずにただそこにあるのだ。

「馬鹿

「はー……」

先輩を苦しめさせた元凶を、涙を流した原因を私は知らない。力強く、天空へ羽ばたくことの出来る先輩から、翼をもぎ取り、大地にたたき落とした者がいる。

それだけならまだしも、愛を注いだ先輩を悲しみの奈落へ突き落とした者がいる。

私はそれから先輩を守る。身をていして、人間の盾になつて守りたい。

たとえ先輩に選ぶれることはなくとも、私を瞳の中に納めてくれなくともいい。

そう、私は愛されなくてもいい。

ただ私が愛した人に限りなく近づく」とさえ出来れば。
先輩が高く羽ばたくための踏み台になれねば。

私は愛されなくても本望。

「馬鹿」

「はい……」

千日手のように繰り返された同じ言葉の応酬。
つざつたそうに私を引き離した先輩が、バスルームに吸い込まれるのを見届けて、私は遙か高空で輝く月を仰いだ。
兎が餅をつく、というファンタジーはとうの昔に捨て去った。同じように、夢や希望も。

「由美お姉ちゃん、大君……私、三年前のように、もう何も失いたくないの」

一人も、きっとどこかである月を見上げているのだろうか。

「最後までそばにいたいから、一人なら私のわがままを許してくれる?」

闇夜に流れた一条の星は、一人の返答が肯定であるような、そんな気がした。

窓から吹き込む風の冷たさに、気がついたように身を震わせる。

しつかりと窓の鍵を閉め、少し離れたクローゼットの引き出し開

けると、そこから大きめのバスタオルを取り出した。

先輩の整った肢体に勢いよくぶつかる水の音。

私は先輩の体を包むだろうバスタオルを抱きしめながら、足早にバスルームに向かう。

第B・1話・翼（後書き）

興味を持つてくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

この一話のみですが「スクール・オブ・ザ・デッド」から二作目をつなぐエピソードです。また、ちらほら出たりします。続編のちょい出しが思つていただけると嬉しいです。……といいますか、解説している時点で不手際が多すぎる作者です。

次回から、ある姉妹とある幼馴染みの「スクール・オブ・ザ・デッド」を始めます。よろしくお願ひします。

評価、感想、栄養になります。

「お姉ちゃん！　由美お姉ちゃん！」

ノックもせずに開けた扉の向こうに、一面の赤い景色が広がっていた。

真っ赤なカーペットに足を踏み入れ、少女はゆっくりと深紅のベッドに歩み寄つていく。

「……お姉ちゃん？」

身動き一つしない姉を見下ろしながら、少女はそっと手を伸ばす。

「ねえ……お姉ちゃん……」

そつと姉の肩に触れ、赤く染まつた姉を振り動かした。わずかな揺れでも皿を覚まそうとしない姉に、少女はあせりを覚える。

「起きてよ……」

あせりは、すぐにふくれあがつた。

「お姉ちゃん……起きててばー。」

赤に囲まれた姉はなおも動き一つ見せない。

激しく振り動かしても、幾度となく名前を呼んでも。

時計の秒針が時を刻む。

耳の中に入つていき、あせる心を加速させる。

一秒が一秒だと思えないほどに、その一時が伸長していく。

「お姉ちゃん！」

叫びにも似た声は、やつとベッドに横たわる姉に届いたらしく。びっくりと痙攣した姉は、妹のあせりをよそに、ひどく下手くそな言葉を形成した。

「オ……ねが……い

姉の返事にほつと胸をなご下ろすとした瞬間、いきなり飛び起きた姉に遮られた。

真っ赤なカーペットに尻餅をついて倒れた妹は、意識があるのか無いのか判然としない姉を驚いたように見上げるしかない。

「お、お姉ちゃん……」

信じられないといった表情を浮かべる妹と、機械のようになまい動きを繰り返す姉。

「オ、オ……ね……がい」

「お姉ちゃん!」

絶叫が、真っ赤な室内に破裂した。

「……お願い、もう少し寝かせて」

姉はばたりとベッドに倒れ込んだ。

「駄目! 遅刻しちゃうだしそー!」

あせりを満面にたたえて姉をベッドから引きずり出すと、カーペットに転がす。

「うーん、カーペットもふかふか……」

お気に入りの真っ赤なカーペットにまおずりしながら、まぶたを落していく。

「お姉ちゃん! 今用意してあげるから、もう少しだけ、もう少し
だけ意識をしつかり!」

ヒマージュンシー。

緊急事態。

任務内容。

姉が眠るまでに、着替えを見つける。

妹の頭にそんなテロップが流れ出した。

時間は限られている！　いいか、ヒラッコども！　可及的速やかに、任務を遂行せよ！

鬼軍曹が、言葉汚くほえる幻想のおまけ付き。妹は心中で答える。

サー、イエッサー！

「真由……お願い……もつ眠らせて……私、とっても眠いの」

「お姉ちゃん！」

姉の上下のまぶたが、つぶらな瞳を覗かうとする。

「見つけた！　お姉ちゃん！　これ、モルヒ……じやなかつた、着

替え！」

クローゼットの引き出しがから、パンツやソックスやジャージやうを取り出して、姉に放り投げる。

ふわりと舞つた緋色のそれは、見事にカーペットにまおずりして

いた姉の目の前に着地する。

細かい刺繡が入った赤い下着。

上下おそろいであり、なおかつ薄手の生地は、どこか蠱惑的だ。

「……く、なんで」

人知れずつぶやいた妹。

姉に気付かれないように、投げる前にちらりとサイズを盗み見ていた。

……残念ながら、僅差での敗戦。

カツプ一つの差だった。
けれど、そのカツプ一つが大きい。

たとえるならばアジアチャンピオンズリーグと、ヨーロッパチャンピオンズリーグぐらいに、カツプの規模と質が違うのだ。
下唇を噛む妹は、ウエストの勝負に持ち込むことにした。

寝る子は育つもの。

ウエストという土俵で、ぐうたら、かつ面倒くさがりな姉に負け
るわけがない。

間違いない、勝つてているはず。
重ねて言えば体重もだ。

そんな自負を胸に秘めながら、妹は壊れかけたプライドを何とか
修繕するのだった。

一方、妹の複雑な乙女心など我感せぬの姉はと言ふば。

田の前に舞い降りた自らの下着を、寄り田になつて見つめていた。

「……今日まへ、勝負の口じゅなこわよへ、真由へ」

おしりを突き出した格好で寝そべる姉が、論点のずれたことを言ひ。

「寝ぼけたこと言わないで！ 毎日が勝負よー 私にとつてはー。」

しづしづドリマや映画などで、寝ぼけたことを囁つな、ところづ合詞がある。

妹は思つた。

おそらくこれが正しい使い方だらつゝ。

「……今、妹が大胆発言を」

「違う！ 方向性が違う！」

もううん、毎日時間と勝負しているのである。

「……真由、脱退するの？」

「私はメンバーを捨てて一人歩きするボーカルじゃない！」

「冗談よ～、もう真由つてば……朝からテンション高いアルよ」

油の切れた機械のように姉の動きが鈍くなる。

「中国人っぽく言つたつて駄目！……つて、そこー。私が丁寧につつこむのをいいことに寝ちゃ駄目！」

「…………チツ」

「舌打ち！？ 起こしてあげた妹に舌打ちしましたよー。このお姉ちゃんはー！」

うちひしがれる妹などお構いなし。

姉はなおもお尻をふりふり、カーペットに頬をすりすり。よほど睡眠にご執心と見える。

睡魔が視認可能な動物だとすれば、おそらく姉は睡魔に上から覆い被さられているに違いない。

蛇足だが、きっと睡魔の姿は溶けかかったパンダのような格好をしているに決まっている。

姉は寝惚け眼のまま大きなお尻を右に左に揺らすと、みっともない格好で、お気に入りの真っ赤なパジャマを脱ぎ始めた。

立つことを知らないのだらうか。

どこまでも面倒くさがりな姉に、妹はがっくりと肩を落とす。

人類が立ち上がりつてから、気の遠くなるような時間が過ぎたのに、姉は無様にも退化している。

田の前でカーペットにはいざり回っている姉は、妹にとつてビニ

かナメクジを連想させるものだった。

妹の想像は、もはやほ乳類ですらない。

「あ～……脱げないよ～～」

睡眠時間を得るために、わざともたもたしている姉を見て、妹が心中で一句。

じりす姉、理想の就職、ストリッパー。……字余り。

「うへん……脱げない～」

なおも姉の格闘は続く。

「……脱げない……脱ゲナ」

パジヤマのズボンを半分脱いだ格好のまま、とぎれた言葉尻とともに停止する。

「お姉ちゃんが、抵抗するのを放棄した！？」

……妹は強く確信した。

「」の姉の面倒くさがりな性格は、一生かかっても治らない、と。

「駄目だよ、お姉ちゃん！ 頑張つて！ お姉ちゃんならきっと出
来るよ！ あきらめちや駄目だよ！」

「むむ、あれ駄目これ駄目それ駄目……妹はさうやつて姉のフリ
ーダムを奪おうとする～」

「私はお姉ちゃんのフリーダムを奪おうなんて思つてないよー。」

ナメクジに化けた姉が、屁理屈の鬼と化す。

「妹よ、そんな君に……ジャステイスはあるのかね～？」

半眼で指を突きつける姉。

言葉とは裏腹に、全く威厳がない。

「フリーダムもジャステイスもないよ！ 私がナーバスになつて
るのは、マイシスターが、タイムにルーズで、トゥーバッドだつてこ
とだよ！ ハリーアップ！ ゲットアップ！ スタンダードアップ！
これ以上は、さすがの私も、堪忍袋がブツトアップウイズできなく
なるよ！」

息を切らせた妹の耳に、窓の外でおしゃべりをする小鳥たちのさ
えずりが入り込んでくる。

室内の喧噪に比べ、窓一枚隔てた向こうは平和そのもの。
肩で激しく息をしながら、妹は小鳥たちをとてもうらやましく思

つていた。

「……姉は今の言葉の半分以上を理解できなかつた……」

「……妹も言つて何が何だか分からなかつたよ……」

一人称を変えてため息をつく姉妹。

姉は自分の英語力の無さを呪い、妹は虚無感で目にじんわりと涙を浮かべた。

「真由、私、決めたよ。起きよつと思つんだ」

決意の朝。

姉の勝負下着である真つ赤な下着が、握り拳からはみ出している。

「うん……うん……私もそれがいいと思つ」

目に浮かべた涙を指先で拭い、やつと進化してくれた姉を感動のまなざしで見つめた。

ナメクジから、人類へ。

前向きに考えれば、途方もない大進化だ。

後向きに考えれば、やつと人並みに戻れたと言つことか。
妹はそれすらも度外視して感動していた。

「少しだけ待つてて、すぐに着替えるから」

次の瞬間。

妹は、驚きに目を見開くことになる。

姉が着替えていた。

なにより、一人で出来ていた。

問題なくパジャマのボタンを外すことも出来た。

姉は、進化したのだ。

やつと人間に戻れたのだ。

一人で着替えられるようになつたのだ。

「真由……」

登校の準備を整えた二人は、お互いに頷き合ひ。

「お姉ちゃん……」

さあ、一日が始まる。

「パンツをはかないで行くのは止めてね」

三姉リーダをいくつ使っても足らないくらいの沈黙を経て、姉は頬を指でかきながら、笑って見せた。

「面倒じゃない」

「面倒じゃない！」

「だよね～！ 同意してくれるなんて、お姉ちゃん嬉しい～」

血の両手をがつちりと合わせながら、大きな皿でウインクを飛ばす。組んだ手を頬のわきに添え、絵に描いたようなしなを作る姉。

「…………あー、お、お姉ちゃんの愉快な冗談でした～、あ、あはは～」
「…………」

姉の趣味である真っ赤な装飾を施した真っ赤な部屋。温暖化がコンセプトの赤い部屋に勝るとも劣らない、真っ赤な妹の憤怒に、姉は慌てて睡魔を捻り潰した。

……一分後の玄関。

「ち、ちあー 行くわよ真由ー 遅刻遅刻ー！」

王道ともいえる食パンをくわえた姿で、元気よく玄関を飛び出していく姉。

そんな姿も、どこか面倒くさがりな姉らしい。

翻ったスカートの中には、姉の大好きな色である赤い下着があり、鞄には赤いキー ホルダー。携帯電話も、もちろん赤。

赤には食欲増進の効果があると色彩心理学でも証明されているけれど、ハンバーガーが好きな姉ならばそれも頷ける。

放課後にふらふらとハンバーガー店に入店する姉。

彼女は黄色と赤で彩られたファーストフード店の田舎見に、まんまと乗せられているというわけだ。

「 もひ……由美お姉ちゃん……調子良すわねよ」

そんな姉にどこか頬がゆるみそうになる自分を慌てて訂正して、妹は振り返る。

「お母さんー お父さんー 行ってきますー！」

奥から聞こえた優しい両親の声と、前方で手招きしながら走る姉の呼び声。

その中心で、妹は知らず微笑んでしまうのだった。

興味を持つてくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

そして、ごめんなさい。今回は至ってコメディーです。私にとっては、以前書いたコメディー小説を思い出すよつで楽しい執筆となりました。少なからずいい経験になつていてるよう思います。慣れないうことに挑戦したかいがあるというのですね。

もちろん、今まで完全なるシリアス路線で來たので、ふざけるな、と言つ方がいらっしゃるかもしれません。もちろん、苦情も謹んで受け付けます。

そういうふた様々な点でまだまだ未熟な作者ですが、これからも頑張ります。

評価、感想、栄養になります。

第B・3話・弓道場の一人

早朝の弓道場。

射場に立ち、盛り上がった安土を見つめる一人の男。

射法八節をゆっくりとを行い、弓を引き分けた。

自らの動きを脳裏に描きながら、流れるように射法に従うその姿は、袴姿といふこともあって実年齢よりもだいぶ大人びて見える。弦が引き絞られると、まるで心まで張り詰めていくようだった。

引き分け……会。

弓を引き絞る極限の状態が、男は一番好きだった。

矢を放ち、的の中心を射る瞬間にも、もちろん爽快感や達成感はある。けれども、男は思うのだ。

精神、身体、弓矢。

その三者が渾然一体となり、今まさに爆発しようとしている。度重なる段階を、礼節を経て、やっとたどり着ける爆発の時。

その先に待つであろう解放感。

己の中にみなぎる気迫をたたえ、隅々まで伸ばした自分の体に行

き渡らせる。

足袋をはいたつま先から、ゆがけをはめた指の先まで。天と地に届くようなイメージで体の隅々を伸張し、発射の機をつかがう。

無意識のうちに体の奥底からふくれあがつてくる透明な力。

有視界が限りなく狭まつていき、やがて視界は的と矢をつなぐ一本の線のみとなる。

肌にまとう袴でさえ、億劫だ。

弓が体と同化する。そんな極限までたどり着きたい。

そのためには、まだ。

まだ、何かが足りない。

男は大きく息を吐く。肺が酸素を失つてしましみ出す。
遠く離れた的の中心が、残像を伴つてクローズアップしていく。
集中力を帯びた目がそうさせるのだろう。
手を伸ばせば、的に触れることが出来そうだった。

吐く息を止めた。

力はまだそこにある。

求める力ではない、解き放つ力。
抑圧、その先に満を持す解放。

カタルシス。

だが、まだ……まだそのときではない。

もう少しだけ、もう少しだけ待てば、極限にたどり着ける。
今までずっと追いかけて、手の中からすり抜けていったもの。

あと、ほんの少し待てば。

きつとこの手の中に、抱くことが出来るはずだ。

理解できるはずだ。

けれど、手ですくつた水が、指の隙間から流れ落ちていった。
カタルシスを待つ男の意志に、初期微動が走る。

限りなく膨張させた精神と身体が、我慢できずに『』と矢からあふ
れ出したようだった。

均衡を失い、暴走する。

ゆらりゆらりと動き始め、均等に行き渡っていた力が身勝手な方
向へ。

まるで綱渡りだった。

一度バランスを乱せば、立ち直るのは容易ではない。

男の迷いは、そのまま『』へと伝わる。

抑圧された戦場では、たつた一発の銃弾が、戦争の引き金となる
ものだ。

本人が望んでいなくとも、恐れる心が、震えた指先が、誤つて引
金を引かせてしまう。

極限とは、一步間違えば破壊にも、再生にも変わる。

いわば未知のエネルギーの集合体。

男のアンバランスな心が、指先を動かす。

今。

男は望まない引き金を引いてしまつたのだ。

離れ。

一瞬遅れでやつてくる脱力感と、的に命中する音。それは、銃声のよつに男の耳に届いていた。

快哉を叫ぶ声はそこにはない。

残心の中に、やりきれぬ思いを抱きつつ、男はゆっくりと息を吸い込んだ。

久しぶりの酸素に、体が喜ぶのが分かつた。

「アンタは離れるまでが長いのよ」

的の隅にかろうじて命中した矢尻がぶるぶると震える。

「一矢射るのにそんなにもたもたしてたら、射る前にアンタは失格。そんな奴は矢を欠ける必要なんて無いわね。練習用のゴム弓でも引いてるのがお似合いよ」

ふてぶてしい態度で壁により掛かっている女。腕を組んで、小さな口をつり上げた。

「睦月、そんなことを言ひ前に上級生に対する口の利き方を少しあ学んだ方がいいと思つた。もっと言葉遣いをしようとするとか、田上の者に敬意を払うとかだな……」

残心を十分な時間をかけて解除すると、男は睦月に向き合つた。矢尻の揺れが止まるのと同時に、朝の少し冷ややかな風が、射場に吹き込んでくる。

朝露のみずみずしい匂いに混じつて、弓道場独特の匂いが戻つてきていった。

木と汗が長年かけて培つてきた匂い。たとえるなら、神社の境内のそれ。

「私は誰にもこびたりしない。それに、高く買う価値もないのに、払う敬意なんてあるわけないじゃない。逆にこっちに払つて欲しいわ。それとも、アンタには私に敬意を払わせるだけの価値があるって言うの？」弓道部副部長、暁大あかつきたいセンパイ

センパイ。

そう言つた睦月の言葉には、込められるだけの皮肉が込められてゐる。日本全国どこを探しても、その発音の仕方は見つからないだらう。

「ああ言えばいつ言つう女だな……」

大は困つたよつに眉根を寄せるが、それ以上に感情が高ぶつたりはしなかつた。

田頃から困らせられている。

そんな気配すら漂つあきらめがそこには漂つっていた。

「アンタがつまらない」と言つかりでしょ」

「……俺はそれ以前に、睦月が面白いと思つことがあればそつちが

知りたい

「この世に存在するかどうかすら怪しい睦月の面白いこと。

大も睦月と同じく皮肉を込める。

「アンタが吠え面かいて土下座したあと、安土に横たわって頭の上に的をのせるのよ。それで、私がその的に向かって射るわ。生と死の紙一重つて興奮するし、どんなショーより面白いわ」

腕を組んだまま、大の横に並ぶ。

「お前はウイリアム・テルか」

「睦月雲よ、私は

「知ってる」

「ならいちいち間違わないで。痴呆症?」

「……ボケが通じない奴」

無遠慮な言葉の応酬の中で、幼馴染みの姉妹を思い出す大。

物心ついたときから隣に住んでいて、機会さえあれば一緒に遊んだりした遠慮の知らない幼馴染み。

どうやら、睦月との遠慮のない会話が思い出のトリガーになつたようだつた。

中山姉妹。

中学を経てからは、男女間のプライバシーやら、社会への体裁から、大手を振つて それこそ本当に手をつけないで 遊びに出ることはなくなつたものの、今でも交流が途絶えることはない。他人に話せば本気ともとられかねない「冗談」でさえ、言葉の機微を感じ取つて「冗談だと即断できる腐れ縁」。

中山姉妹。

姉、中山由美。

一見ぼけつとしているが、興味のあることには積極的。珍しく放課後も図書委員の活動をこなしているらしいが、ただ単に恋に悩む委員仲間にいらぬお節介をかけているだけという噂がある。

面倒くさがりは子供の頃からで、背負った荷物 責任 をよく周囲に押しつけていた。

することは子供っぽく、どうでもいいことに頭を使うことが得意だ。そのくせ、体だけはしっかりと大人びていて、グラビアもつとまるのではないかという反則技。

体は子供でも、頭脳は大人。

そんな少年探偵とは正反対な彼女は。

頭脳は子供でも、体は大人。

面倒くさがりな人間だからこそ、そこまで育つたのだろうかと首

をかしげたくなる。

寝る子は育つ……とは、よく言つたものだ。おそらく、全国の婦女子が聞いてつらやましがる成長の仕方だろう。

中山姉妹。

妹、中山真由。

母体から早く取り出されたために、妹というレッテルを貼られてしまつた哀れな子羊。

面倒くさがりな姉をことじとくフオローしてきたために、人一倍精神年齢の成長が急速だった。

料理は、小学校に入学した頃にはすでに熟練の域に達していて、背伸びをしながらキッチンに向かっていた。その後姿は、驚嘆通り越して尊敬の域。

ぶかぶかのエプロンを花嫁衣装のように床に引きずる様は、本当の意味での幼妻だった。

掃除機の口にほっぺたを吸い込まれて大泣きしたのは、今でも良い笑いの種。

興味のあることだけに熱心な姉とは大違いで、何にでも一生懸命。さらにはある程度こなしてしまつせいか、器用貧乏などころもたまにきずだ。

……最初に母体から取り出したのが真由の方であったのなら、周囲の納得する良いお姉さんになれただろう。

そんな絵に描いたような姉妹と、そして、幼馴染みの構図。

今時ドラマでも流行らない、時代錯誤な設定の元で成長してきた。

幼い頃、公園の帰り道。
夕焼けに染まる空の下で、電柱にぶら下がっている電灯に少し早
めの明かりがともる頃。

大ちゃん、今日はカレーだよ！

右手には姉由美の手があつて、わがままぶりを象徴するかのよう
にぐんぐんと先へ進む。

由美お姉ちゃん、早いよ！ 大君だつて苦しそうにしてるの
に！

左手には妹真由の控えめに握る手があつて、自分も苦しいはずな
のに中央の俺を思いやつてくれる。

とても心地の良い、幼き頃の思い出。

今でも、思い出さずにはいられない、淡く懐かしい思い出だ。
微笑みが無意識のうちに作り出されていく。

「大……アンタ、何を薄ら笑い浮かべてるのよ。気持ち悪い」

大は射場からのぞく早朝の空に、いつのまにか過去を投影してい
ることに恥ずかしくなる。

急騰。

大の顔が燃え上がつた。

第B・3話・弓道場の一人（後書き）

興味を持つてくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
区切りが悪いので、今回は二話に分けてしました。申し訳ありません。アクションパート……あと少しで……たどり着きます。久しぶりにアクションが書きたいです。
そんな作者ですが、これからもぼつぼつと頑張ります。
評価、感想、栄養になります。

第B・4話・的中

「心の中で、私を裸にするのがそんなに楽しい？」

呆れたように両腕を広げ、肩をすくめる睦月。

「ば、馬鹿を言つな！ 誰がお前なんかを裸にするか！ ……って」

肩をすくめた睦月の胸を凝視する。

もちろん、その形の良い胸が気になつた訳ではない。

「あ、そうだ。そんな奴と話しに来たんじゃなかつた。とんだ時間の浪費。私としたことが、今更思い出したわ」

制服の上から胸当てがされていた。

胸当ての中に押し込められている胸は、ビリか窮屈そうだ。

「これ、後で返しておいて」

「……ふざけたことを言つな」

そんなことをすれば、間違いなく変態副部長のラベルが貼られるに決まつている。

副部長は、誰より早く『道場を訪れ、鍵を任せているのを良いこと』、部員の胸当てで、あんなことや、こんなことをしてしまつた……。

「ま、とにかくアンタがそう言つても、私はこれ置いていくけど。後は野となれ山となれ。アンタが適切に処理しないと、結果的には

同じじ」とよ

大はいくつもの言い訳と打開策を浮かべながら、奥歯をかみしめた。

「……それは我慢してやる。けどな睦月、弓道には」

礼儀、礼節を重んじる『道にあつて、睦月のしている行為は無礼千万に値する。

目上の者に対する敬意や挨拶はもとより、弓道場に入室し、靴を脱ぐ最初の段階。

普通はそうした多くの礼儀と礼節を重ねて、射場に立つ。射場に立つまでの心構えから、射的し、残心を解いてからも、それは当たり前のように保たれていなければならない、いわば生きるための必須行為。呼吸に必要な空気のようなものだ。

「大、弓」

「……ほらよ。一回きりだ。それを射たらさつさと帰れよ

「言われなくとも」

『』と矢をむしり取るように受け取ると、鼻唄まじりで、射場へ向かう。

大は睦月を注意する気力も失せていた。

射場ではもつと静かにしろとか、邪念を払えとか、礼儀を重んじろとか。

田の前にいる睦月零という傲慢な美少女には、規範とするものなどないかのようだった。

制服姿のままで、あまつさえ鼻歌を歌いながら、髪の毛を結おう

ともしないで、時々吹き込んでくる朝の風に遊ばせてくる。

睦月は、誰かの作った道を絶対に歩こうとしない。

自分の歩んできた道こそが、ただ一つの正しい道だと信じて疑わない。後塵を拝することを何より嫌い、常に唯一無二であろうとする。自己中心的で救いようのない思想だが、どこかつむぎやましいとさえ思える。

「文句が言いたそうね」

「当たり前だ。お前は何物にも縛られなわけない」

制約という鎖だけで思ひよに身動きのとれない世界。法律、ルール、暗黙の了解……他者との絆だつてそつだ。友情ですら時に足を引っ張り、家族ですら小さな箱庭に押しじめる足かせに過ぎない。

「荒縄で縛られたことはあるけど、変なプレイされると、次の日の学校に響くから止めて欲しいのよね。だから今日は比較的スカートの丈が長いわけ」

社会に至ってはもうとひどい。

「……そうか?」

誰もが仕事に追われ、問答無用で経済を動かす歯車にされる。仕事、責任という重しを両肩に乗せられ、家族を養うという責め苦を負わされる。もちろん、それはとても悲観的な物の見方にすぎないが。

「冗談よ。あからさまにスカートを見る口実を作つてあげた私に、

感謝しなさいよ

「誰がするかよ」

しかし、そう考えれば、確かに何物にも縛られない睦月は自由であるとともに、絶対的な個の強者だ。

誰もがそんな世界で、苦しみ、悩み、あがき続けるのに。涙を流し、痛みにもだえ、自由を叫び続けるのに。

睦月雲だけは違う。

ただ一人、鎖を簡単に引きちぎり、背中に生える巨大で美しい翼を羽ばたかせる。

睦月のいた場所を見れば、大地を蹴つて、飛翔する姿があった。重力に引かれ、飛び立てずにいる大衆を見捨て、大空からあざ笑う。

そこには、何物にも縛られない代わりに、永遠の孤独を覚悟した女。

……たった一人の、睦月雲。

唯一無二だから、誰も追いつけず、同情すらもされない。もちろん、彼女自身も願い下げだろう。

「睦月」

「何?」

執り弓の姿勢に入ろうとする睦月に、思わず声をかけてしまう大。睦月は視線を的に集中させたまま、大に言葉の先を促した。

「寂しくはないか?」

「寂しいって何?」

睦月の言葉尻は、そのまま矢尻のように鋭く、尻もそれ同様に鋭い。

「男が体を求めてくる理由?」

射法八節をつつがなく進行させていく睦月。

足踏み、胴造り、弓構え、打起し、引分け、会、離れ、そして、

残心。

それらにあたっては、始めから終わりまで一貫性をもつていなければならぬ。

八つのパートに別れてはいるが、それはつまるところ一つなのだ。たとえるならば、一射は一本の青竹のようなもの。

この一貫した青竹に八つの節があるのと同じ。八つの節は相互に関連する一本の竹であるけれども、また異なった八つの節なのだ。

全ては一つであり、一つはまたその全てである。

「私を唾液だらけにして、指を入れて、自己満足に快感を『えよ』
とすること？」

睦月はそれらを全て見よう見まねで、習得しているのだろう。
田をこらせば、それは睦月独特の流れであることが分かる。違和
感を覚えるのと同時に、睦月の堂々とした振る舞いに、自らが間違
つてしているのでは、という疑念すら浮かんでしまう。

「男の敏感な部分を勃起させて、私の中に突き入れること？ 必死
に腰を振り続けて、快感に逃げること？」

一方的に言葉を口にしながらも、射法八節を問題なく行う。
引き分けた姿勢に移行した睦月を見計らって、大はあえてその言
葉を口にした。

「……睦月、そんな風にしか考えられないお前が寂しいんだよ」

矢が離れ、風を切る音とともに視界から消える。
矢の行方は、見ずとも分かつた。

「大のくせに、私にもの申そつて言うの？ きまじめな童貞男の
くせに。それとも、私としたいからそういうこというわけ？」

人をいらだたせようとする睦月の気配が伝わってきたので、大は

あえて水を掛け合おうとは思わず、身を引いた。

「イラつくなよ。悪かった、今のはなしだ」

どうしてか、睦月にはあえて人をいらだたせて、大事なことから話題をそらそろとするときがある。

時々朝の弓道場で顔を合せるぐらいの付き合いだが、何となくそうではないかと推測をたてることが出来た。

あえて汚い言葉を使ってみたり、他人の傷をえぐってみたり、態度にしてもそうだ。

そんな睦月を見ていると、思う。

睦月雲は、何かを恐れているような、そんな気がする。

弓道部副部長の勝手な妄想かも知れないが。

「だつたら、最初から言わないで。アンタみたいな馬鹿を相手にするだけ疲れるし、イライラする」

胸当てをたたきつけて、大の弓を放り出す。

射場に転がった弓を大がため息混じりに拾い上げたとき、睦月はいらだたしげに足を踏み鳴らして退場するところだった。

「まつたく……睦月の奴」

弓に傷がないことを確かめると、大は睦月の気配が残る道場内を見回してみた。

何度も改修を繰り返してきたのだろう。弓道場の至る所に、新旧

が入り交じっている。

時代を経た檜の板は、ちょうど両足を踏みしめる位置の色がはげている。

それは、数多くの人間が弓を引いてきた証拠だ。
雑念を払い、無心を求め、そして、己の中心を射抜いてきた。
心頭を滅却し、明鏡止水の境地を探求してきた。

「すごい女だな」

強さと暖かさを増した早朝の光が、的の設置された安土を照らす。

睦月の放った矢が、寸分の狂いなく的の中心を貫いていた。

話しながら、さらには、いらだちながらも中心を射抜く技量。集中力を確實に超越している腕。

頭で考えていることと、行動は別物とはよく言われる。
しかし、その行動でさえ、二つ以上を同時にこなしているわけで。
睦月零は、人間離れもはなはだしい。

良くも悪くも 睦月零は翼を持つ者なのだ。

……が、どうやらそんな彼女にも、一部人間らしいところもあるらしい。

大は関心が半分、呆れが半分の微笑みをこぼす。

「図星……いや、『道らしく予想が“的中”といったところかな』
的の中心を貫いた矢。

皮肉にしては、出来過ぎだった。

第B・4話・的中（後書き）

興味を持つてくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

現在、二作連載中ですので、更新が遅れますこと、大変もつしわけございません。二兎を追う作者をお許しください。

評価、感想、栄養になります。

第B・5話・引き絞られた想い

……私は何をしているんだろう、と思ひ。

少し大きめのため息をついてみても、肺がきしむだけで、内側にため込んだもやもやに晴れ間はささない。

私はどんよりと曇った空の下、いつやつてくるかも分からぬいある人を、偶然を装いながら待っていた。

もう何十回目かも分からぬい予行演習を終えて、何十回目かも分からぬ自己嫌悪にため息をつく。

鞄の中には、出番を待つ一枚の映画のチケット。

石造りの厳つい校門に背中を預けると、ひんやりとした感触を制服越しに感じる。鞄を足下に置いてハンドミラーを取り出すと、周囲の視線を自意識過剰気味に受け止めながら、そつと自分の顔をのぞき込む。

そこには、少し疲れたような自分の顔があった。

ふつくらとして血色の良い姉の顔に比べて、やせこけた印象のある青白い顔。

長くて綺麗にカールした姉のまつげに比べて、力なく気持ち程度の上向き加減。

ぷるんとして潤いのある姉の唇に比べて、リップを何度も塗らないとすぐに乾燥してしまつかさかさの唇。

小さくてしみ一つない姉の鼻に比べて、鼻の穴の形が氣にくわいいし、一回りも大きい。

なめらかで化粧ののりの良い姉のもち肌に比べて、ファンデーションすらうまくのつてくれない乾燥肌。

分けた髪の隙間からでも分かる形の良い姉の額に比べて、少し広すぎるとさえ思える私の額。

「お姉ちやんばかり……」

ハンドルバーを乱雑に閉じて、足下に置いた鞄にしまつ。胸ポケットに入れておいたら、また自己嫌悪を誘発する元になるから。

「はあ……あ、またつこちやつた」

知らず知らずのうちにため息をついてしまう。

ため息をつく度に幸せが逃げていく、なんて言つ人がいるけれど、実はそれは迷信なのだ。

夜に爪を切ると親の死に日に会えない、というのと同じで昔から語り継がれてきたもので、これといって根拠がない。

さりに、最近読んだ書物によれば、ため息は、体の中にたまつた悪い氣のことで、吐かずに溜め込んだままにしておくと、ストレスが蓄積し、不安感や自信の喪失などのマイナス思考を引き起こすのだそうだ。

つまりは、ため息により体の中から悪い氣が吐き出され、その反動で深くゆっくりと酸素を吸い込むことで、内臓の動きが活発になり、血行が促進される。そして、全身に新鮮な酸素が行き渡り、心身ともにリフレッシュすることができる……とかなんとか。

「でも、やっぱりため息をついている自分は、幸せから疎まれている気がするよ……」

根拠や、実説を並べ立てて、前向きといつ方角を向いてみる。残念ながら、その方角にあつたのは空虚な曇り空だけだった。

曇り空のようによじて、自分の心から逃げようと、今度は足下に視線を落とす。

ふと視界に入ってしまった自分の体に、またコンプレックスが膨らみ出す。

制服の上から、自分の胸に手を当てる。お椀型で形は悪くない。

……少し外向きなのは気になるけれど。

一方で、手のひらサイズなので大きさは悪くない。

近年上昇しているバストサイズの平均だって、まだからうじて上回っているんだから。

本音を言えば、膨らんでいくコンプレックスのように、バストサイズも膨らんで欲しいところだけだ。

「でも、お姉ちゃんは……」

タオルを用意し忘れて、バスルームに飛び込んでしまった姉が、私を大声で呼んだときときだ。

私は田課になつているため息をつきながら、バスルームの扉から半身をのぞかせる姉に目をくれる。姉は舌をぺろっと出して、申し訳なさそうに片目をつぶる。

そんな姉の姿を見て私が真っ先に浮かんだ感情は、他でもない、嫉妬心だった。

大きさに似合わず形の良いバストは、誇らしげに、上向きにその存在を主張している。ウエストはモデル顔負けのくびれ具合だし、ヒップですら重力を無視した向上心に溢れている。

けなす言葉が見つからないほど、姉は魅力的だった。

濡れた髪の毛が鎖骨を通り、胸の谷間に張り付く様は、女の私、妹の私ですら、息をのんだ。

……その夜、バスルームの鏡の前で滑稽。ポーズをとりながら、姉に反抗する自分がいた。

バスタブの中であまりにも悶々と考えすぎて、のぼせてしまったこともある。

「本当、情けないな……私」

足下の鞄をそつとつま先でこづくと、鞄はバランスを崩して簡単に倒れた。ちょっとしたハッタリだった。すると、鞄の取っ手につけられたキー ホルダーが鞄の外側に付いたポケットから飛び出す。ずっと昔、ある人が私にプレゼントしてくれたものだ。

私と姉、その人。

三人でみたホームビデオ。そのすり切れたビデオテープの中で、キー ホルダーのモデルとなつたキャラクターと、私は運命の出会いを果たした。

真つ黒な姿で、丸い目で、つぶらな瞳で、人見知り。

一見すると真つ黒な綿あめか、真つ黒なわし。

森の中に住んでいる空飛ぶ毛むくじやらの巨大動物や、猫のバスが人気の大半を占めた映画だったのに、私の心は彼
彼女かも知れないが、に首つ丈になってしまった。

それを見かねたその人が、後日そつと手渡してくれた。

「ごめんね……蹴っちゃって。痛かったよね」

私は校門前に座り込んで、倒してしまった鞄にぶら下がったキー ホルダーを優しくさすってあげる。もつ何年も前のもので、黒い塗装がはげてしまっているけれど、大事に鞄の外ポケットにしまつてあるせいか、老朽化はそれほどでもない。

私は無傷で住んだキー ホルダーをじっと見つめ続ける。

「……ドラマだと、こんなところを大好きな人が見つけてくれて、こういつてくれる筈。

「……そのキー ホルダー、まだ持つていってくれたんだな」

そう、こんな感じで。

「それさ、だいぶ昔に俺が買つてあげたヤツだよな。それだけ気に入ってくれると、贈つた俺としても嬉しい」

事実は小説よりも奇なり。

いや……少し違つかな。

私はドキドキする胸を押さえて、慌ててキー ホルダーを所定の場所にしおう。

「好きなキャラクターだもん。当然のことだよ」

「確かに。真由は物持ちも良いし。……誰かさんと違つてさ」

右肩に担いだ口を抱え直して、夕暮れの景色に笑顔がこぼれる。私はそんな彼から視線をそらしながら立ち上がった。

「で、その誰かさんはまだ現れないのか？」

「……え？」

「あ、いや、だから由美を待ってるんじゃないのか？」

校門から校舎を眺めていた彼は、見当違いであることに気がついて、私に視線を戻す。私は、予行演習を思い出す。

「あ……う、うん、そうー、お姉ちゃんを待つてたら、たま、たまたま大君が通つて。あはは……偶然だよね、ほんと偶然偶然」

なんのための予行演習だったのだろう。噛んでしまっては練習の意味などない。

「どのがうらー待つてるんだ？　あいつ図書部員だから、そんな時間がからないはずじゃないか。真由は帰宅部だとしても、一時間以上は待つていた計算になるぞ」

携帯電話を取り出して時間を確認する大君。困ったように眉をハの字に曲げて、お姉ちゃんへの愚痴をこぼす。

「つたく、出来た妹を持つと、姉がだらしなくなるつていうのも考え方だな。約束してくるんだうつこ」

「あはは……本当にお姉ちゃんには参つちやうよ

「ごめんなさい、お姉ちゃん。

こいつかポテトのレササイズをおいります。なんなら、ドリンクもつ

けます。

「真由也」

「うん？」

夕陽を背中に背負いながら、大君は頬をぽりぽりとかく。

「由美のことはいいから、一緒に帰らないか？ 三人一緒にやないつていうのも新鮮でいいだろ」

鞄の取っ手をつかむ私の手が汗ばんでいく。

緊張しちゃ駄目だ。

緊張したら、言葉につまずいてしまう。

つまずいたら、もう一度と繰り返せなくなりそうで怖い。
だから、緊張しちゃ駄目だ。冷静に、慎重に。かつ、普段の私の
調子で。

「大君、その、あの……」

……あつと、つまずいたよね、今の。

本当、コンプレックスだらけ。

「あ、駄目だよな。由美と約束してるんだもんな。悪い悪い今のは
無しだ」

私はうつむきをつになる顔を、慌てて右に左にぶんぶんと振り回

す。

「違うの… 私もね、もうお姉ちゃんのことあきらめて、帰ろうとしていたところだから。だからオッケーです。もうオールオッケーなんです！」

私は人差し指と親指で円を作り、大君の顔をその中に納める。

大君の愁いを帯びた顔が、夕陽の下で笑顔に変わっていく。大君の表情を変えてしまえる自分が嬉しく思う。

コンプレックスだらけの私が、ほんの少しだけ自信家になれる瞬間だ。

自信家というよりは、策謀家かな。

こぼれてしまった微笑みに、大君が疑問符を浮かべる。

「どうしたんだ？」

「なんでもないなんでもない。帰ろうよ、大君」

「ん」

大君が、手を差し出してくる。

「いいよ、鞄ぐらい私が持つよ。大君だつて、鞄と『、持っているんだし』

さしだされた右手を丁寧に辞退する。

「ん」

それでも大君は右手を差し出し続ける。

「だから、大君、気持ちは嬉しいけど鞄ぐらいどりつてことないよ」

私はダンベルよろしく手に持った鞄を上下させる。案外軽いかと思つたけど、鞄を上下させるのは重労働だった。最近、運動不足だから、仕方がないのかも。

「鈍い奴め……仕方がない。真由、今から俺がマジックを見せてやる」

大君が困った顔を浮かべている。私の腕力の無さが見抜かれてしまつたのだろうか。だとしたら、情けないかも。

……それはそれとして。

「えと、マジック?」

「そうだ。世にも奇妙なトリックだ。あらかじめ言つておくけどな、種も仕掛けもない。いいか、真由、俺の手のひらを良く見つめるんだ」

真剣な顔だ。弓を引くときと同じかそれ以上の面持ちだ。

「うん、わかった」

私は頷くしかない。

大君の手のひらは、大きくて生命線が長い。「じつじつしているその手も弓道の産物だと思うと、自分のことのように誇らしげになる。指の付け根が黄色く、堅くなっているのは、豆がつぶれて新しい肉が付き、だんだん厚くなつていったためだ。

別名、努力の証とも言ひ。

野球部ほどバットを振るわけでもないのに、そんな手のひらになつてしまつてゐるのは、それこそ何千、何万という練習の積み重ねの結果だった。

「では、真由の手を俺の手のひらの上にのせる」

大君が宣言する。

私は、おそるおそる大君の手のひらの上に自らの手のひらを重ねる。

やつぱり、大君の手のひらは硬かつた。

大きくて、堅くて、でも、斜陽のように暖かくて、たくましい……まるでお父さんの手のよづ。

「そして、俺はゆっくりと真由の手を握り、十秒待つ」

大君が驚いたような声を上げ、私に微笑みかけた。

「さて、帰るか」

「…………え？ 帰るつて大君！」

「なんだ？」

何食わぬ顔で笑い、白い歯を見せる。

この顔は、分かつていて馬鹿にしている顔だ。幼馴染み経験から推測する。

「マジック！ 起こつてないよー。」

「怒ってるだろ」

「意味が違うのー。こいつ、コインが消えてなくなるとか、何もないところから取り出すとか……そういうのがまだ、起こ……現出してないよー！」

しつかりと私の手を包んでいる大君の暖かさに、思わず大げさに照れ隠し。

「起こつたと言わずに、現出と言いつといふのが、何とも冷たいな。ボケを未然に防いでいる」

』】を抱ぎなおしながら、大君が笑った。

「だから、違うんだってば！」

「なあ、真由」

大君が私を引き寄せた。握りあつた手……私もつい握り返してしまった手を少しだけ強引に。

抱きしめあつたわけではない。体を触れあわせたわけでも、口づけあうわけでもない。距離が少しだけ縮まつただけ。夕陽の下で、学校の校門前で。

放課後にだけ許される少し危険な距離。

「真由と手をつなぎたかった」

大君の目が私の瞳を吸い込み始める。視界に広がる大君の顔が私の記憶に否応なく、すり込まれていく。夕陽の下といつシチュエーションはこの上なくムードだ。

私もムードに弱い女の子だと言つことが再認識せられる。でも、きっとそれは大君だけのはずだから。

心の中ですっと引き絞つてきた私の想い。

すでに淡くなく、濃厚な一色に染められた感情の矢尻。いつ解き放たれても不思議ではないくらい引き絞られている。私の心中で磨き上げられてきたこの矢が、目の前の彼の心を打ち抜くことが出来るのかは分からぬ。

ずっとじずっと引き絞つてきた。

弦が切れてしまふんじやないかってぐらいの力で、長い時間をかけて極限まで引き絞つてきた。

もう、駄目だよ。

こんなことされると、溢れそうになる。矢を放ちたくなる。他でもない、あなたに向かつて。

「だから、真由さえ嫌じやなかつたら。」いつくて、荒れた手で申し訳ないんだけど

「……」つくて、荒れた手じゃなかつたら、大君の手じゃない。頑張り屋の手がいい」

胸の中が暖かさでいっぱいになる。

締め付けられて、こぼれそうになる。胸の中で引き絞り続けた矢が、言葉となつて口から……「うん、体中から出たがつてる。

もう、いいよね。我慢しなくて、いいよね。

「大君、私……」

「うん?」

バッグを落として、大君の制服をつかむ。足下に落ちたバッグは音を立てて倒れた。

「私、私ね」

「うん」

大君は優しい笑みを浮かべながら、私の言葉を受け止めようとしてくれる。

「私!」

小さな頃から。

「小さな頃から」

大君が。

「大君が」

好きでした。

「あれー、二人とも待つててくれたの？ お姉ちゃん嬉しいな～」

弓につがえたはずの矢が、足下に転がった。弦は切れ、極限まで伸ばされたそれは、鞭のように私の頬を打つ。頬からは血がでて、私の唇を赤く染めた。舌でその赤い液体をなめとつてみると強烈な鉄の味がした。

吐き気を催すような鉄の味。

「由美！ お前な～、真由をあれほど待たせるとはどうこう根性してるんだよ」

大君の手が素早くほどかれる。

「え？ 私、約束なんて、したつけな……？」

ふりほどかれた手から温もりがゆっくりと抜けていく。

さらには、夜に変わろうつという町から抜けてきた冷たい風が、私の手から加速度的に大君の温もりを強奪する。

私は、その温もりをわずかな間だけでも噛みしめたくて、わずかな間だけでもすがっていたくて、自らの手を強く握りしめた。

第B・5話・引き絞られた想い（後書き）

興味を持つてくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
作者多忙のために、一ヶ月ほど作品を更新できませんでした。
大変申し訳ございません。

これからは、しばらく定期的に作品を更新していくと想います。
こんな作者ですが、これからもよろしくお願いします。
評価、感想、栄養になります。

「全く、これだから由美は…… 真由もこんな薄情な姉を持つて不幸ものだな」

「こら、大！ 言つて良いこと悪いことがある！ 大はなんて言うか、こんな可愛い幼馴染みをもてて幸せだー、とかそういう感謝が足りないよね～」

姉の朗らかな笑みが、大君に向けられている。

大君も、そんな姉に、先ほど私に対しても向けていた笑顔と同じ……いや、それ以上の笑みを向ける。

二人で笑顔を共有し、楽しさを共有し、幸福な領域を作り上げる。

そこには、私の入る余地などないような気がした。

「可愛い？ それはまあ……否定できないところではあるけどな」

姉の頭からつま先まで、視線で行つたり来たりさせると大君はため息をついた。

確かにお姉ちゃんは、可愛いよ。私なんかとは違つて。

だから、大君の言つていることに間違はない。

でも、どうしてそんな当たり前のことを私は否定したくて仕方がないんだろう。

「ふむふむ、幼馴染みの暁大は、姉妹どんぶりを狙っているわけですか……いやいや、なんと破廉恥！ この変態！ スケベ！ 口リコン！」

「おいおい、ここ校門前なんだけど……それに口リコンって、年一つしか違わないだろうが」

「ああ、弓道部副部長は、私の豊満なボディをなめ回すように見て、脳内ハードディスクに記憶……そして、カラー・ジュー写真のように脱がせたり、すぐ替えたりして、きっと今晚のおかずには！」

姉が体をくねらせながら、大君に軽蔑のまなざしを突き刺す。もちろん、そこには本当の軽蔑なんて微塵もない。姉特有の冗談がふんだんにちりばめられていた。

「……もう、大のえつち」

「黙れ、変態女」

肩に提げた弓で、姉の頭に面を入れる。主審が一本と勝敗を告げ
そうな勢いで。

「痛、痛い！ 大君、仮にも乙女に向かつてその暴挙は～」

頭を抑えた姉が、大君の後ろに回り込み羽交い締めにする。

「おわ！ 由美！ 止めろ！」

大君よりも背の小さい姉は、後ろからぶら下がる格好だ。
体を惜しげもなく密着させて、チョークスリーパーに移行する。

校門の前で、恥ずかしげもなくとっくみあいを繰り広げる姉と大君に、通りかかった弓道部員がはやし立てていた。

暁先輩！「」ちやうさまです！

これからは、一重の意味で大先輩と呼ばせていただきます！

これは姉フラグ成立だな。

「あはは……お姉ちゃんも、大君も、止めてよ。恥ずかしい。お似合いなのは分かつたから」

乾いた声でそう言つてしまえる自分がいた。
心の中で壊れてしまつた弓を足下に破棄したまま、矢を再度つがえる力もなくて。

私は心に鍵をかけた。

「ほら、みんな見てるし、早く帰らう！」

「むう、我が妹の温情に免じて、大を無罪放免とする」

密着させていた体を離して姉は腕組みをした。

「つたく……」

刹那、大君は何かに気がついたようで、私と姉に背中を向けた。

「うひつとも、めざと自分自身に、本当に嫌気が差す。

大君は自分の体に起こうした変化を隠そうとして背中を向けた。

グラビアモデル顔負けのスタイルを持つ姉に、後ろから抱きつかれて、あまつさえその柔らかい谷間を背中に押しつけられた。

大君は、気持ちよかつたのだろうか。嬉しかったのだろうか。もつとこうしていたと思ったのだろうか。

大君は、反応してしまった男性自身を、見られたくないかったんだ。

そんな自分が格好悪くて、背中を向けたんだ。
つまり、大君は、姉の女としての魅力によって、男性の象徴を固くしてしまった。

……大君は姉に対してそういうた欲望を持っている。

私ではなく、姉だから、大君は感じた。おおきくしたんだ。
大君は、きっと姉をそういう目で見てているんだ。

姉と比べて、姉と比べて、由美と比べて。

私には魅力がないから。

「セツセツ。真由、『めん！　私本当に覚えていないんだよ～……だからさ、どんな約束をしていたのか教えてくれない？　馬鹿なお姉ちゃんにもう一度、ね？」

両手を合わせて懇願してくれる。ウインクが様になつてこむ。

「馬鹿と重なつては、ボケだな」

瞬間、姉の鋭い眼光が大君に突き刺さり、大君は両手を挙げて降参のポーズ。正面を向いているところから見て、どうやら男性自身の高ぶりは鎮まつたようだ。

「お姉ちゃん、あのね。約束なんだけど……あ、そうそう、思い出した！」

私は落ちた鞄を開けて、中から一枚の映画のチケットを取り出す。

「映画のチケット？」

私の手元をのぞき込む姉。

「うん、一枚あるんだけど、お姉ちゃん行かない？」

「え、いいの？」

姉の顔が喜びに染められていく。

「ま、大君にもあげるよ」

「いや、俺は……」

「お姉ちゃんと姉妹水入らずで行こうと思つてたけど、私用事が出来ちゃつて行けないの。だから私の代わりに大君が代打。土曜日、大君暇でしょ、知つてるんだから」

予行演習なんてしなくても、言える。自分にひとつマイナスになると分かっているのに、いつも口がくるくると回る。肝心な言葉は言えなくて、本当は言つべきではない言葉はすんなりと出てくる。

裏腹な心は、私を自己嫌悪の海に引きずり込む。

「真由、どうして俺が暇だつて……」

「道部員に聞いたからに決まってるじゃない。」

「分からぬ、ただそつじやないかつて思つただけだから。気にしないで」

「いや、でも真由……」

大君と一人で行きたくて、部員にこつそり練習の予定を聞いて。計画を練つて。

旅行は計画を練つているときが一番樂しいって言つけれど、あれは本当だった。

だって、心臓が高鳴つて眠れなくなつたんだから。

「あ、さては大君、お姉ちゃんと一緒だから恥ずかしいんだね？」

「そこはほら、一つ年上なんだから、大人なところ見せてよ」

「真由……まさか」

毎日毎日……空想の中を泳いで、にやにやしたり、恥ずかしさにもだえ苦しんだり。

「あ、それと、お姉ちゃんにえつちなことしたら、妹の私が許さないから！ いくら大君だつて、両者の合意なくそんなことしたら犯罪なんだから！」

本当……私、馬鹿だ。

「だから、一人で行つてきて。映画の感想、聞かせてね」

「……分かつた。由美、その日大丈夫か？」

「私は大丈夫、予定はナッシング」

私は必死に微笑みを作り続ける。

「じゃ、決まりだな」

「大と二人でデートか～、悪くないかな」

悪いはずないよ。むしろ一人なら、きっと素敵なものになる。

「本当にお似合いだね、妹として鼻高々」

デート中、一人は仲むつまじく手と手を繋ぐに違いない。

「ほらほら、今から手を繋ぐ練習！」

私は姉の手と大君の手を取つて繋がせる。そして、一人の背中を乱暴なくらいの力で押してやる。

「あれ〜、大、恥ずかしいの？ 顔が真っ赤」

「うるさい、中山姉。慣れていないんだ、仕方がないだろ」

「慣れていない、大は慣れていない、と。にしし、ではこれはどうかしらん？」

脳内にメモ書きした姉が、おどけたような古文調で、大君の腕に自らの腕を絡める。

確信的に自分の胸に腕を押しつけている。

大君の腕に押しつけられた双丘は、簡単に形を変えた。今、大君へは、姉の持つ凶悪な柔らかさが存分に伝わっているはずだ。

太陽の半分が山の向こうに消えてしまった夕闇の中、身を寄せ合つて体温を共有する二人は、まるで恋人のように見えた。

「真由ー！」

「真由ー！」

うつむいてしまった私と、太陽と一緒に山の陰に隠れてしまいそうになる私の心を、一人の声が呼び戻す。

二人とも笑顔で手を振っている。大君は坦いでいた弓を振つて大きくアピールしていた。

私は十メートル以上間隔を開けられてしまった二人に、走つて追

いつこうとする。

慌てて足下に落としてしまった鞄を拾い上げた。

夕暮れを覆つた暗闇の中で、何かが転がるのが見えた。

「あれ……？」

嫌な予感がして、鞄の取っ手を見る。
いつもあつたものが、なくなっていた。
チエーンだけが、虚しくぶら下がっている。

「あれ……？　あれ？」

私は伸ばした膝を、汚れるのも構わずに地面に付け、コンタクトレンズを落とした人間のように、地面に手をついて探し始める。

辺りはすでに暗闇が支配している。

もとより黒いキー・ホルダーだ。皿をいくらいしても、手でアスファルトの上を探しても、土下座するように這いつぶつても見つからない。

涙をたたえながらも、笑つてしまいそうになる。

「……あれ？　……あれ？」

「おかしいな……？　見つかないと……」

きつとこれは罰なんだ。自分勝手にならつとした罰。

姉の想いも、大君の想いも。

全てを出し抜いて、自分の幸せを求めた罰なんだ。
だから、宝物はどこかへ消えてしまった。

「見つからない……大事にしてきたのに……ずっとずっと宝物だつ
たのに……」

私の様子がおかしいことに気がついた一人が、引き返してくる。

「どうしたの？ 真由？ 何か落とした？」

姉の優しい言葉が、私の悲しみを、滑稽さを増大させる。
姉がいなければ良かつたなんて、いなくなつてしまえなんて、少
しでも考へてしまつた自分に、さらなる自己嫌悪が押し寄せた。

「よし、俺達も手伝うぞ」

二人が差し伸べてくれる手。

大君は荷物を置いて、腕まくりをした。姉も鞄を置いて、やる氣
十分だ。

「……あ……でも、もういいの」

私は、その一つの手をやんわりと断つて、立ち上がつた。

「そんなに大事なものじゃないから。もう、あきらめたから

そこに私の心があつたのだろうか。

限りなく無感情に近い声。まるで薄暗闇を吸収したかのようだ。

一人の優しさに、私は決心するしかなかつた。

私は……もう気持ちを吐露しない。

一人はお似合いだから。私が勝手に想つて、悩んで、そして、自滅しただけ。

変わらないことがあつたつていい。想い続けることがあつたつていい。

姉は大君が好き。大君だつて、姉が好きなはずだ。

一人の幸せを祈ることが、いつかきっと私の幸せになる。

……でも、そんな日は決して訪れるはずがないと、私は不意に思つてしまつ。

私はその日、姉と大君、二人から半歩遅れて歩こうと決めた。家に帰つて、未練たらしくぶら下がつてゐるチエーンを捨てようと決めた。

もう、決めたの。

第B・6話・決心（後書き）

興味を持つてくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
います。

久しぶりの連続更新です。この調子で、どんどん書ければよいのですが……。

評価、感想、栄養になります。

幕間・事件の朝、彼女が感じ、彼女が思つたこと

携帯電話を開き、暗証番号を入力。再度メールの内容を確認する。

「とつとつこの日がきちゃったね……」

そこには、私にしか分からぬ文章がつづられていた。私の頭の中で速やかに暗号は解読される。知りたくもないのに、メールは計画の決行日が今日であることを告げている。

組織にとって、今日は重大な転機。

組織の人間なら、誰しも十分に承知している。もちろん私も例外ではない。私が組織の中で育つ過程で、嫌というほど、頭に、体に叩き込まれてきたから。

孤児だつたらしい私が、餓死寸前のところで組織に引き取つてもらつて、そこで初めて人生の歯車が回り始めた。

孤児だつたらしい……とは、幼い頃の自分の記憶でさえ、私は持つていなか。餓死寸前で引き取られたということも、実は文字上のことだけで、私の記憶にはない。好奇心として組織にその疑問をぶつけて、初めて私は自分がこの場所にいる理由を知つた。

もちろん、母の記憶も、父の記憶も、家族の記憶も皆無。生まれてから初めて記憶した風景は、私が知る限り、白、だつた。

無ではなく、白。

上下左右、東西南北、喜怒哀楽。

今では当たり前に思えるそう言つた事柄でさえ、私には新鮮に思えて仕方がなかつた。

そんな私。

自意識が芽生える前の段階で、命を散らしていたはずの私。その私をここまで育ててくれた人。父とも呼べるその人のために、私は尽くさなければいけない義務がある。

それは結果的に、組織のためもあるし、その人のためもある。それは結果的に、私にとつての恩返しもあるし、親孝行でもある。

瞳を閉じて、私はその人の姿を脳裏に浮かべた。

誰よりもたくましい、鋼のような肉体。多くの屈強な部下を従えながら、先陣をきるその人の姿。誰もが羨望のまなざしで見つめる彼は、組織特殊部隊の部隊長。私と大好きな彼を迎えてくれる人……。

深い思いから抜け出して、瞳を外界にさらした私の目前には、アパートがある。そのうちの一室。扉の前にたたずむ私は、メールの履歴画面を下にスクロールさせていく。

画面に現れるのは、色の異なつた二つの手紙。

組織からの通達メール。
大好きな人からのメール。

その二つのメールが、交互に入り混じつている。

組織からのメールは定期的に届くけれど、大好きな人からのメールはなかなか届かない。

何度も何度も勇気を振り絞つてメールを出して、やつと手に入れることができる彼の意思。そつけなく、面倒くさそうにメールをうつたであろう彼のたつた一言が、今では私の生涯で唯一の宝物にな

つた。

私はまるで馬鹿の一つ覚えのように、彼からのたった一言を音読して、彼の表情を、声音を想像する。暗記してしまった彼からの数少ないやり取りは、この世のどんなものよりも深く私の心を打つた。寄せては返す波のように、飽くことなく私の心をかきたて、胸を高揚させる。

私は彼のアパートの呼び鈴を鳴らした。

「……大好きだよ」

つぶやいてみる。

メールを受け取る度に、私は今すぐにでも彼の元へ飛んでいって、私だけのものにしてしまいたくなる衝動に駆られた。
彼に全てを捧げてもいい。

彼の望むことなら何でもしてあげたい。

どんなことをされてもいいから、彼のそばにいたい。
どんなことをしても、彼のそばに居続けたい。

ただそれだけの望みのために私は生きている。

組織から下された命令は、もちろん実行しなければならない。
でも、重要度で言つたら、この町に派遣されてきた当初から比べれば、雲泥の差。そう断言できてしまつほど、組織の命令よりも、
彼のことのほうが大切に思える。

だから私は、組織に、父と呼べる人に、最初で最後のお願いをした。

大好きな人ができました。その人を助けてもいいですか？

きっと本来なら許されないことなのだと思つ。

でも、組織はそれを許してくれた。完璧な教育をされた私が、ここまで執着したことが初めてだったから、少しだけ興味を持ったのだろうか。

いや、それ以前に、計画実行の段階まで来て、最適任者である私が裏切ることを恐れたのだろう。

計画の齟齬は、即組織の瓦解を意味しているから。

過程はどうあれ、私は彼を手に入れることを、彼と一人で生きることを許された。後は、彼と心を共有するだけ。

私のわがままを許してくれた父は、そんな私の頭を優しくなでてくれた。

生まれて初めてだつた。

私を張り倒すことはあつても、決して優しく手を伸ばしてくれたことはなかつたその手。仮頂面は相変わらずだが、手のひらの大きさと、温かさだけはいつまでも消えることはなかつた。

今でも、頭の上にはその大きな手の感触がある。

私は寄りかかった扉から体を起こし、彼の登場をひたすらに待つ。彼が一向に出てこないのを訝しがつて、私は玄関前をうろうろしたりしてみたが、彼が出てくる様子はない。

……計画実行までの時間は残り少ない。

地域担当者である私は、バッグの中にあるものを、体育館に放り込むという使命を帯びている。彼が遅刻することは、私があらかじめ仕組んだこと。でも、もし彼に会うことができなかつたら。

愛は、一瞬で途切れてしまひうことになる。

考えるだけで、心が刻まれるよつに痛い。

「はい、今開けます」

待ち望んだ声とともに、彼と私を隔てていた扉が開かれた。

「……何をやつてるんだ?」

長く伸びたぼさぼさの髪をなでつけながら、彼が顔をしかめる。
そんな彼が、なんだかとても可愛い。

「あれ、正臣も遅刻? 奇遇だね」

私は自分ができる唯一の感情表現を、満面に浮かべる。

「奇遇だね……って、香奈も遅刻か。珍しいな」

「うん、なんか完全に遅刻つて分かつたら、あわてるのも億劫にな
っちゃって」

本当は違つ。でも、今は普通の一人でいたいから。

「和輝は?」

私は首を横に振る。

「今日は雪でも降るのか? いつも遅刻してるあいつが遅刻しない

なんて……」

「同感」

すべては計画通りに進んでいる。和輝が遅刻をしなかつたのも、正臣が遅刻したのも。

この町で組織が自由にならない」となんてない。

「にしても、だ。遅刻した人間が、どうして俺の家の前にいる」

「うーん、なんでだる。正臣も遅刻するような気がしたんだよね」

自分で言つて本当に馬鹿だと思つ。でも、そんな嘘も正臣となら本当に楽しく思える。計画なんてそつちのけで、日常に戻つてしまつたみたい。

でも、正臣はそんな私に不満げだ。

「あ、置いて行かないでよ、つれないなあ……」

私の言葉を無視して通り過ぎる。頬を強張らせて、怒ったふりをしている正臣が、ますます愛しい。

「正臣、髪の毛切つてあげようか?」

無視される度に、彼が意地を張っているのが分かる。

「私としては、短い髪の毛のほうが好みなんだけどな

正臣の髪の毛がゆりゅりと揺れる。

「やつにえれば、陸田さんが、正臣のいる……」

私の切り札に、正臣は足の動きを止める。

「……なんて言つた?」

「髪の毛切らせて貰れる?..」

本当に出したくなかったこの話題。正臣は誰にでも優しくから、そんな正臣をみんな好きになってしまつ。

でも、本当に正臣を分かつてあげられるのは私だけ。

「……短すぎないよ!」

渋々承諾する正臣が、唇を尖らせる。

「どんな髪型にしようかな……」

正臣の髪型候補が、私の頭の中をぐるぐると回る。

「……で、その、陸田さんの件。なんて言つたんだよ」

言われなくても分かっていたけれど、私はあえて忘れていたふりをする。正臣と二人きりなのに、他の女の話なんてしたくない。

「聞きたいの?」

「決まつてるだろー」

無人の通学路に正臣の大声が響き渡る。

「……そんなに大声出さなくたっていいじゃない」

どうして正臣は私がいるの、他の女の事を考えるのかな。

「悪かったよ……」

やつぱり、正臣の周囲を軽くしてあげないと私を見てくれないのかな。

「睦月さんは……いつましたとれ」

でも、じめんね。

睦月さんは、正臣には気がないみたい。

「東城正臣？ 知らないわ」

私がそのときの光景をリアルに演じながら、正臣に伝える。正臣はまるで世界の終わりでも訪れたかのように、顔を真っ青にする。
えようもないけどね

「……は？」

「本当にそれだけ？」

「本当にそれだけ。『東城正臣？ 知らないわ』」

正臣に分かつてほしくて、私は繰り返す。

「『東城正臣？ 知らないわ』」

正臣には私がいる、他の女なんていらない。
ね、分かるよね。

「『東城正臣？ 知らないわ』」

「聞こえてるー。」

「……あら」

「いや、当然といえば当然の結果だよな。かたや、学校一の優等生にして、スカウトの目にもかかるほどの美女。かたや、ただの男子高校生だもんな……」

正臣が肩を落として私の前を歩いていく。

「正臣……だいぶ落ち込んでるね。でも、いいじゃない。私がいるんだし。ほら、慰めてあげるよ。この大きな胸に飛び込んできなさいな」

私は正臣に向かつて両手を広げる。いつでも正臣を受け入れる準備はできてる。あとは、正臣次第なんだよ。

「そんなに胸大きくないだろ」

「あ、セクハラ」

確かに、胸は大きくはないけれど、小さくもないはず。

「正臣……。私、胸、小さいのかな」

「気にしてたのかよ」

「正臣がそう言つから、気にした」

私は制服の上から胸の大きさを確認する。手のひらサイズで、形もいいし、きっと正臣に気に入つてもうえると思つていたのに。

「じゃあ、例えば俺が髪の毛の短い子が気になるつて言つたり?..」

「短くする」

正臣がそう思つなら、私は正臣が思つがまま、私を変えるよ。正臣が好きになつてくれるなら、私は自分の色を正臣の色に染め替えるよ。いつでも、どんなときでも。

私には、その準備がある。

「厄日だな……これは」

正臣が、校舎に向かつて黒いため息をつく。

「厄日なんかじゃないよ。きっと最高の一日になる」

私は立ち止まり、正臣の背中に向かつて精一杯の感情を届ける。

「だつて今日は、一人にとって人生で一番大切な日になるんだから

!」

私は正臣が好き。大好き。

誰よりも、何よりも、この世界よりも。

この愛は、誰にも止められない。

そして、私はその愛を止めるつもりもない。

「それが中井香奈なんだよ」

幕間・事件の朝、彼女が感じ、彼女が思つたこと（後書き）

興味を持つてくださつた方、読んでくださつた方、ありがとうございます。

最近、気がついたことです。

現在「スクール・オブ・ザ・デッド」、「多重人格な彼女」を同時連載しているのですけれども、作者は作品ごとの読者数というものが分ります。ちなみに、この二つの作品でいうと、実は「多重人格…」の方が「スクール・アナザー」よりも、二倍以上の読者数があります。ホラーとラブコメディの差でしょうか。作者的には、力を入れているのは、「スクール」なのですけれど……もともと悲しいお話好きですし（笑）それが気がついたことです。どうでも良いことでしたね。それでは、評価、感想、栄養になります。

第B・7話・デート

「これで一日だぞ」

「はい、十回目へ、大台突破」

呆れ顔の由美は、テーブルのあるストローを口にくわえる。ストローがオレンジ色に染まるのと同時に、オレンジジュースの海から氷が顔を出す。

大は、例えとしては場に不適切だと分かつていただが、輸血のチューブを通る血液のようだ、と心の中で想像し胃を収縮させた。

「ねえ、大き~、せっかく真由が映画のチケットをくれたんだよ? 真由が楽しんできてつて言ってくれたんだから、楽しまなきゃ理由にも私にも失礼だと思つんだけどな~」

氷山が崩れ、清澄な音が会話の間を取り持つ。

「そりだけどな……その真由は一体どこに行つたんだつていうんだよ?」

大は注文した飲み物も飲まずに、ウインドウの外に視線をくれている。
ふくれつ面なのは、決して二人のデートが楽しくないからではない。

事実、思つていた以上に一人のデートを楽しんでいた。

当たり前のように待ち合わせに遅れてきた由美に悪態をつくのすら、大はどこか初々しく恥ずかしげだったし、途中で立ち寄ったアクセサリーショップだって、店員を冷やかしては思う存分指輪をは

めたりした。

確かに楽しかった。

一人が予想していた以上に。

でも、それは一人でいる時間が少なかつたから、そう思えたに過ぎない。昔から三人で行動するのが通例となっていた幼馴染み達は、一人欠けただけで新鮮な空気を味わうことが出来たのだ。それがゆえに、楽しく思えるのも今のうちだけだといつことに、大と由美はうすうす気がつき始めていた。

「分からぬ」

由美も視線のやり場に困つて外の風景を目に移す。

「姉だろ?」

由美はその言葉に少しだけいらだつ自分が理解できた。

「姉だからって、妹の全部が分かるなんて、そんなの傲慢すぎー」

口をとがらせながら、窓の外を歩く恋人達にしかめつ面を見せてやる。

窓の外を歩く恋人達は、そんな渋面には一切気が付く様子もなく、お互いの顔を見てはにこにこと楽しそうにしている。

「……つたく、一体どこに行つたんだ真由は……」

大の手元に置いてあるウーロン茶は、すでに結露でびしょ濡れだ

つた。一口も口をつけられずに、水かさだけが増していく。

「分からぬ

「由美に言つたんぢやない」

結露はやがて互いにより集まり一滴となる。グラスの表面を駆けていき、「コースター」にぶつかる。「ゴルク製のコースターは、大量の水が染みこんで薄黒く変色していた。

「私に言つてゐるよつに聞こえる~」

窓の外に目を向けたまま、由美はストローを口にくわえる。飲み物が底を尽きかける証拠に、溶けた氷で薄まつたオレンジが舌の上に微妙な後味を残した。

「悪い、なんか俺いらつゝてるな

大は大きくため息をついた。そして、今更ウーロン茶に気が付いたかのように口をつける。

「映画、行くの止めよつから~?」

「……そのほうがいいかもな

軽口のつもりで言つた台詞を、真正面から、真つ正直に受け止められる。

「む……やつぱり行く。絶対に行く

頬を膨らませて、ストローに唇をつける由美。グラスの底を吸い上げるストローが、うるさく音を立てる。

「うひなつたら、意地でも行くんだからね~」

大はストローの立てる音を聞きながら、真由と一緒に歯医者に通っていたときのことを思い出す。唾液を吸い上げる機械が、今の音と同じ音を立てていたのを思い出したのだ。

「止めるとか、行くとか、どっちなんだよ

「行く。いいく~の。今の大を見てたら、意地でも行きたくなつた」

「勝手なヤツ。ま、今初めて知ったわけではないけどな

鼻で笑い、濡れたグラスを持ち上げる。グラス越しに見える由美の顔が、年齢よりもだいぶ幼く見えた。

「……真由、一日も家を空けるなんて、何かあつたのかな。由美にも何も言わずになんて、今までそんなことなかつたのにな

「むむ……知らない

十回を数えた段階で、由美は数えるのを止めた。

会話が途切れた後は決まって真由の話題だ。大が真由を心配するのは分かる。仲の良い幼馴染みだし、真由が誰かに心配をかけることは希だから。

でも、大が真由を心配するのは、それとはまた違つ毛色のような気がする。

由美はふと思つ。

真由の立場が私になつたとして、同じよひに心配してくれるのか
な、と。

だからこそ、由美は大に対して意地悪をしたくなつた。

「大つてさ、真由のこと好きでしょ」

「ああ」

意外にも、即答だつた。

「私のこと好き？」

「ああ」

同じタイミング、同じ音量、同じ抑揚。
その一つに何らの違いも発見できない。
由美の中ではさらなる嗜虐心が溢れていく。

「じゃあ……私のこと愛してる？」

「馬鹿か」

ウインドウの外に視線を向けていた大は、大きく右手を振つて、
付き合つてられないといった風だ。

氷の溶けたグラスに口をつけ、今更のぞを潤している。

「真由のこと愛してる？」

「……馬鹿だろ」

グラスを口の手元で止めて由美をにらむ。由美は口元をグラスで隠した大の表情を読み取ろうと、にらみつける大に応戦するように視線をぶつけた。

拮抗する視線の探し合い。

大はグラスを下げるのも忘れ。
由美は瞬きをするのも忘れ。

二人は互いの瞳の内側に映る景色を読み取ろうと、レントゲン写真のように視線の色を変える。

「やつてられるか」

先に折れたのは大だった。

グラスを下ろし、やり場に困った視線を、奥に座る初老の女性に投げかける。

瞬間、由美は大の内側に隠れていた本心を読み取る事に成功する。大は、互いに譲れないはずの、譲ってはいけないはずのつばぜり合いの中で、あろうことか背中を向けて逃げ出したのだ。

「冗談だとされても、由美は一向に構わなかつた。にらめっこだと勘違いをして、大が吹き出しても怒るつもりはなかつた。それはそれで良かつたのだ。

ただ一つ。

ただ一つだけ、由美にとつとして欲しくないこと。それが目をそらされることだった。

「そんな馬鹿な質問に真面目に答えてられるか

由美は、一人の幼馴染みの間で揺れていたはずの心が、片一方に傾いてしまったことを、大の態度から知ってしまう。

何が違つたのか。何を間違えたのか。何がきつかけだつたのか、何を動機としたのか。

大はいつから、私ではなく、妹の真由を見るよくなつたのか。

いつから、どうして。

「真由のヤツ……一日も帰つてこないって事は、外泊してるつて事だよな。友達のところだつたらいいけど、そつじややなかつたら、金錢的にも限界つてものがあるぞ」

大は再びウインドウの外に目を向ける。

こうして何度も何度もウインドウの外を眺めるのは、きっとただの退屈凌ぎや、人間觀察ではなく、ある一人の女の子を捜しているから。

雑踏の中で揺れる真由の陽炎。

お気に入りの髪留め、お気に入りの黒いオーバーニーのソックス、お気に入りのNのアルファベットが入ったスニーカー、お気に入りのバッグに、お気に入りの黒いキー ホルダー。

大は、それら全てを雑踏の中に溢れる一人一人に重ねていく。犯人を捜す鑑識のように。指紋を照合するように念入りに。

「月曜日は大事な全校集会があるつて言つのに……サボつたらどうなるか分かつたもんじゃないぞ。あれだけ先生方が厳しく言つんだから、きっとただごとじやない」

大は残つたウーロン茶をぐいっと一気に飲み干すと、テーブルに手をついて立ち上がる。

「おしつこ?..」

水の染み込んだ「ースターは、まるで由美自身を表すかのようだつた。

由美はそんな自分を嫌い、太陽のように明るく振る舞おつとする。

出来るならば、濡れた「ースターを、「ースター」と蒸発させてしまおうと。

「……ああ、まあ、そうだよ。……といつかな、女なりせめてお手洗いと言つてくれ」

大は残念そうにため息をつき、後頭部をぼりぼりとかく。

「ふうん、じゃあ、大、だね？」

「……。名前ネタはもう耳が腐るほど聞いた」

口を真一文字に結ぶと、撫然としたまま背中を向けようとする。

「小学校の頃、それでいじめられたりしたもんね～、っていうか耳、もう腐つてただれてたりして」

由美は自分の耳を引っ張つて、猿のよっこおどけてみせる。

「女の子なり、せめてもつとおじょやかになれ。ついでに言えば、身近なおじょやかである妹を見習え」

今日で何度も分からない。

大の口から発せられた、真由、といつ固有名詞。

「おじょやか！ 大、それは前時代的な考え方といつものだよ～、今時、ジエンダーとか、男女雇用機会均等法とか、夫婦別姓とか、男女の垣根はなくなつてきているんだから。といつことで、私はおじょやかじやなくても良いんですね～」

「真由が聞いたらきっと嬉しくなる。姉が難しい言葉を覚えました、つてな」

まだ。また言った。

真由。

今まで何千、何万回と聞いてきたはずなのに、なぜか今になつて憎らしく思えてします。

流麗な明朝体だったそのフォントが、おどろおどろしい字体へと変貌していく。

「それに、由美は由美。真由は真由。由美が由美じゃなかつたら、大はきつと悲しむと思うな~」

大好きな妹。

いつも私に振り合わされて困つたように付いてきた妹。

泣かせたこともあつた。喧嘩したこともあつた。でも、どんなに怒っていても、そっぽを向いてしまつても、謝ればとびきりの笑顔をくれた。抱きしめたくなるほど可愛い……いや、何度も何度も両手で強く抱きしめた、たつた一人の可愛い妹。

なのに。

「口だけは一人前だな」

「あらやだ。一人前なのは力、ラ、ダ、もですよ奥さん」

「誰が奥さ…………由美、俺をお手洗いに行かせない気が？」

「されましたよ？」

「俺に問い合わせる意味が分からん」

なの」「。

「……まったく、由美と話しているといつまでも経っても目的が達せられる気がしない」
いつから。

「ふふ、用を足してらっしゃいな。」「おそれなく、ビザーっとね」

「真由が聞いたら妹であることを悔やむな」

大は由美に背中を向けて店の奥へ。

弓道を長年続いているせいか、その背中は真っ直ぐと伸びていて
揺るぎない。由美は時々見かける大の執弓の姿勢を思い出す。
由美はその姿勢の名前を知らない。

しかし、その姿勢を持つ大を、その大の持つ瞳を、その大の瞳に
映る少女を、その瞳に映る少女の持つ、澄んだ眼差しの先を、その
眼差しに映る執弓の姿勢を……由美は知っている。

そして、一匹の蛇は、互いの緒を食らい始めるのだ。

メビウスの輪のように未来永劫終わることのない想いのビワビワ
めぐり。

互いが互いを追いかける思恋のおいかけつけには、実はどちらかが

振り返れば簡単に終わる。

しかし、その一人の、本来絡み合はずの視線を遮るより、この少女は立っている。

「……私のせいなのかなー、やつぱり」

喫茶店の天井で回るプロペル空調機を眺める。レトロな映画に出てきそうなアンティーク具合。

的に向かって一直線に飛んでいく矢のように潔い背中が、ドアの向こうに消える。まぶたの裏に思い描くのは、長身の大だからこそ表現できる大きな背中。

広い肩幅も、たくましい腕も、大きな豆だけの手のひらも。きっといつかは誰かのためだけに広げられるのだらうか。

「真由~……『めんね、こんなお姉ちゃんで』

氷だけになつたグラスの中。溶けてバランスを崩せば、纖細な音が胸に入り込んでくる。

それは、今までずっと変わらず保ち続けてきた幼馴染みのバランスそのものだ。いつから、想いは熱を持ったのだろう。燃え上がり出したのだろう。

例えてみる。

きつと幼馴染み三人の足下は氷だったのだ。

姉妹の思いが、大の想いが、淡いものからきちんとした熱を帶びるものに変わる頃、足下の氷は溶け出した。それが分かつていて、私達は幼馴染みというバランスを必死に保ち続けたんだ。

いつか。

今ではない、いつか。
すぐそばまで迫っているだろ、いつか。

溶けてなくなつた足下……落ちていく姉妹のどちらかの手を、大
の手がつかむ時がくる。

その手は、姉妹のどちらかを暗闇からすくい上げてくれる。

確実に一人を救い。確実に一人を失う。

そしてそれは……確実に、私達姉妹のどちらか。

大の想いは、お菓子のように分け合つたり出来ない。いつまでも、
仲好し小好しの姉妹ではいられない。子供のままではいられない。

女と女の醜い感情が、大という男を取り合つ。

それが現実。

「……真由？」

グラスの中の氷が全て溶ける。

つぶやいたウインドウに向ひに、夢遊病者のように通りを歩く
真由の姿があつた。

毎日の手入れを欠かさない整つた髪は乱れ、少し脂ぎついて鈍

く外光を反射している。制服は薄汚れていて、スカートからのぞく
オーバーニーのソックスにも、泥がこびりついていた。靴紐は解け、
地面をなめている。まるで、鉄球を引きずる奴隸の如く。

普通の真由ではないことは一目瞭然だつた。

由美は、腰を浮かして飛び出さうとする。

びひしたの真由？ 一緒に帰ろう？

駆け寄りたい衝動が溢れ出る。ウインドウの向う側を、人波に流
されるように歩いていく妹。ひどく痛々しい。

お姉ちゃんが一緒にいるから。もう大丈夫だよ。

ウインドウ越しの由美には気が付かず、真由はふらふらと幽鬼の
ように歩いていく。

ブラジル系ストリートドリマーがそんな真由をいぶかしげに見上
げていた。

お姉ちゃんが助けてあげる。汚れを拭つてあげるよ。

真由に駆け寄り、膝を、顔を、制服を、妹をハンカチで拭つてあ
げよう。

ほら、遠慮なんてしない。そ、れ、に。そんなの当然だよ。
だって……。

真由はきっと恥ずかしがって、遠慮がちに顔を背けるだろう。

でも私はそんな真由の正面に素早く回り込んで、無理矢理ハンカ

チを汚れた顔に押し当てるんだ。

真由は、愛する妹なんだから。

「待たせて悪い、トイレがなぜか混んでてさ……」

真由が人波にのまれて見えなくなつた瞬間だつた。

「大！」

由美は大の声を聞き、音速で振り返る。
演奏を始めたストリートドラマ。小刻みな高速スラッシュショー
トが、由美の心をせき立てる。

「……外に」

外に真由がいるの。

「ん？ どうした？ 真っ青な顔をして」

「外を……」

外を真由が歩いていたの！ 今から向かえきつと追いつける！

「お、すいこな。あのドラマをばき」

大ならきつと……真由を助けてあげられる！

「大ならー。」

真由。真由。真由。

たくさんの中が溢れる。記憶が年月をさかのぼる。

笑顔の真由。純粋な真由。心優しい真由。苦労性の真由。引っ込み思案な真由。努力家の真由。器用貧乏な真由。恥ずかしがり屋の真由。大好きな真由。

窓の外、スラッシュユービーは加速する。

真由の温もり、真由の声、真由の涙、真由の瞳。真由の眼差し。
真由の……。

「あひヒー。」

……大を見つめる眼差し。

「練習すれば出来るようになるよ」

何かが胸の中でつぶれた。

「いや、あれは無理だ。早すぎてスタイルが見えないぞ」

そこから流出する罪悪感。

「あはは……そうだね……あれはさすがの大でも無理かな……」

罪悪感。

私は確かに思った。

真由がいなくなれば、大は私のものになる。

罪悪感。

私には確かに聞こえた。

ガラスが割れるような、砂利を踏みしめたような、黒板をひつかくような、不快きわまりない音。心の潰れる音。

胸なんかすぐに押しつぶされて、今では影も形も残っていない。心さえも圧搾され、碎け散つて。

「大でも……無理かな」

大を渡したくない。渡してはいけない。

それがたとえどんなに大切な妹でも、決して譲れないもの。譲つてはいけないもの。

「さて、真由のことは気がかりだけど……あいつのためにもチケット無駄にするわけにもいかないよな」

等価交換なんて言葉が実際に通用するのなら。いつも私は、妹を犠牲にして、大を手に入れる。

「そうだね、張り切つていきましょ～

私は大の腕に自らの腕を絡め、意図的に胸に押しつける。

「お、おい！ 店内だぞ！ ふざけるのも……！」

真由、実を言つとね、お姉ちゃん……もう、疲れちゃつた。
考へることに。

だから私、もう目の前の人だけを見ることにする。何も考へない
ことにする。

「……好きだよ、大」

大の胸元でつぶやく。

「なんだって？ 今なんて言つた？」

大だけを見るにしる。見ることにするの。
こんな傲慢なお姉ちゃんでごめんね。
でも。

もう、決めたから。

第B・8話・決心2（後書き）

興味を持つてくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
評価、感想、栄養になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3243b/>

スクール・オブ・ザ・デッド～ジ・アナザー・デッド

2010年10月9日18時38分発行